

福江市文化財調査報告書 第2集

白浜貝塚

1980

福江市教育委員会



白浜貝塚出土の石製・貝製装身具



白浜貝塚出土の縄文後期土器

ご あ い さ つ

長崎市のはるか西海にうかぶ、わが福江島は、風光あくまで美しく心の豊かなところであります。海の幸が豊かであることも万葉や肥前風土記の昔から、つとに知られており、遣隋、遣唐使が最後に日本を離れたところとして、歴史上我国にとって、常に対外的接点でもありました。

昨、昭和54年、市内向町にある、白浜貝塚の発掘調査が実施されました。三千年以上も昔の、縄文時代から弥生時代の始めまで、1500年もの長い間、嘗々とした生活が続いていたことを示す、大変重要な遺跡が発掘されました。

担当者の話によりますと、白浜貝塚の人々は、自然と相和し、海山の幸を求めて、つましい暮らしを営んだ反面、大陸系の石器を求める進取の気性に富んだ人々であり、また、発見された男性人骨が、幼児を胸にかかえ、当時としては貴重な貝製の腕輪や胸飾りをつけさせていた由であり、心根のやさしい人々であった、とも聞か及んでいます。

これらのことがらを思うとき、今日に生きる私たちが、ややもすれば見失いがちなことを、ものいわぬ遺跡や遺物に教えられる気がしてまいります。その意味でも、私たちは、土地開発が必要な一方文化財を大切に保存しなければなりません。

今回、白浜貝塚の調査報告書が刊行されるにあたり、文化庁をはじめ、関係者の努力に対して深い敬意をはらうとともに、この報告書が、「現代人が歴史になにを学ぶか」ということについて、みんなで考える一助になればと願うものであります。

昭和55年3月

福江市長 西野 稔

発刊にあたって

このたび、当市にあります白浜貝塚の調査結果について報告書を刊行することになりました。同貝塚は、縄文時代から弥生時代にわたる遺跡として、きわめて貴重なものであることが知られてまいりました。したがって、本遺跡の取扱いについては、極力、保存の方向で関係方面と協議してまいりましたが、結果として、昭和54年度、国庫および県費の補助を得て、緊急発掘調査を実施し、記録保存を計ったのであります。

調査は、同年5月および7~8月に行われ、実動48日を要し、特に後半は酷暑の中で休日なしで行われました。

この間に、縄文時代後期から弥生時代前期にわたる遺跡で、きわめて重要な数多い発見に接しました。特に縄文時代晩期の貝塚遺物と同期における成人と幼児合葬、あるいは弥生時代前期における大陸系磨製石器の発見等、あらためて古代五島の姿と日本における位置を如実に見たわけであります。

本書が、学会においては勿論のこと、広く白浜貝塚の重要性を知っていただく資料になることは疑いないことではあります。一方において、遺跡の大部分はまだ地下に温存されていることも判明いたしており、今後は保存の方向で衆知を集めてまいりたいと思います。

最後に、調査終了まで、数々の便宜をうけて下さった里本朝一氏、陰に陽に調査を助けていただいた地元町の方々、そして文化庁と県文化課の配慮、酷暑の最中、直接調査に当られた専門の方々に深甚の謝意をのべて、発刊のご挨拶といたします。

昭和55年3月

福江市教育委員会

教育長 川辺 昇

例　　言

1. 本書は、昭和51年度の助成金および県費補助をうけて福江市教育委員会が実施した長崎県福江市所在の「白浜貝塚」に関する緊急発掘調査の報告書である。
2. 本書は、膨大な出土遺物の量に比して調査結果の整理期間の不足から図録編的な体裁をとらざるを得なかつたが、調査に従事したものとして、本遺跡の詳報について、その責に任じるものである。
3. 現場設営の調査には主として正林 謙・安楽 勉（いづれも県文化課）が当り、前半調査には長崎大学医学部解剖学第2教室の松下幸幸・分部哲秋氏に直接協力をいただいた。調査にあたっては直接間接に多くの方々や機関の協力を仰いだが次項に記して感謝の意を表した。
4. 調査中の写真撮影は前半は正林が、後半は安楽があたり、遺物の撮影は安楽が行った。
5. 本書の執筆は、1～5・7を正林、6を安楽、8は松下・分部が分担して行った。
6. 出土貝類の同定は県立長崎北高校教諭山本愛三氏にお願いした。
7. 土器の復原は中村和毛が中心に行った。また、報告書作成について横山巳貴子・竹内 弘・福田一志の助力を得た。
8. 遺物写真的縮尺は、土器は寸、石器・刃器などについては十を原則とし、その他については各器種別に標記した。
9. 本書関係の遺物は長崎県文化課が保管している。
10. 本書の編集は安楽による。

調査関係者

福江市教育委員会

川辺 异(教育長)

福江市社会教育課

岩本総明(課長)・田島大六郎(指導係長)・中村利男(主査)・三村仁吉(同)・川口英三郎(主事)・古賀忠臣(同)・梅田清次(主事補)
・平山乙吉(社会教育指導員)・塙塚公二(同)

福江市農林課

中村武男(技術史員)・中山富男(同)・橋本恵一

長崎県文化課

正林 護(指導上事)・安楽 勉(文化財保護主事)

長崎大学医学部

松下孝幸(解剖学第2教室助手)・分部哲秋(同)

長崎県立長崎北高等学校教諭 山本愛三

調査協力者

河端千松(下崎山総代)・増田伝澄(崎山中学校教頭)・西村八蔵・
境脇基志・境脇兼行・白浜七也・境脇トメ・山下良子・久保松枝
・太田千恵子・平田デン・山田久子・坂井秋仁子・河野チヤ・野
原寿子・松木エキノ・吉田トメ子・藤田ヨシコ・熊川タケコ・白
浜キヨ子・山内久美子

調査内業者

江川利子・細山純代・大平由紀子・村山由美・種村二美子
高谷美子・魚下雅子・石井節子

このほかにも多くの方々のお世話をより無事、調査を終えること
ができました。心より謝意を表します。

本 文 目 次

| | |
|---------------------|-----|
| 1. 五島列島の地誌概観 | 1 |
| 2. 調査にいたるまで | 5 |
| 3. 白浜貝塚の位置と環境 | 7 |
| 4. 調査の概要 | 11 |
| 5. 編序の概況 | 22 |
| 6. 遺 物 | 24 |
| 縄文時代の土器 | 24 |
| 前期および中期の土器 | 24 |
| 鐘ヶ崎式系の土器 | 25 |
| 北久根山式系の土器 | 26 |
| 市来式系の土器 | 28 |
| その他の土器 | 28 |
| 縄文晩期の土器 | 52 |
| 弥生時代の土器 | 67 |
| 石 器 | 82 |
| 石製装身具 | 84 |
| 骨角器および貝器 | 109 |
| 7. 砂丘の形成と遺跡の成立 | 117 |
| 8. 五島・白浜貝塚出土の縄文晩期人骨 | 120 |
| 9. あとがき | 141 |

挿図目次

| | | |
|--------|---------------|----|
| Fig. 1 | 五島灘沿岸の主要遺跡 | 2 |
| Fig. 2 | 白浜貝塚周辺地形図 | 7 |
| Fig. 3 | 福江市南部主要遺跡 | 8 |
| Fig. 4 | 白浜貝塚調査区域図 | 12 |
| Fig. 5 | C区V層遺物出土状況実測図 | 29 |
| Fig. 6 | B・D区遺物出土状況実測図 | 53 |

図版目次

| | | |
|--------|------------------|----|
| PL. 1 | 遺跡遠景 | 4 |
| PL. 2 | 白浜貝塚航空写真 | 9 |
| PL. 3 | 旋砂採取坑および断面 | 13 |
| PL. 4 | 調査風景 | 14 |
| PL. 5 | 遺物出土状況（C区V層） | 14 |
| PL. 6 | タ | 16 |
| PL. 7 | 研磨されたサメ歯出土状況 | 17 |
| PL. 8 | 出土人骨の計測風景 | 17 |
| PL. 9 | 鰐骨製アワビ起し出土状況 | 18 |
| PL. 10 | 遺跡近景 | 21 |
| PL. 11 | D区南側土層断面 | 22 |
| PL. 12 | 調査区層序 | 23 |
| PL. 13 | 遺物出土状況（C区V層） | 25 |
| PL. 14 | タ | 27 |
| PL. 15 | C区V層遺物出土状況 | 29 |
| PL. 16 | 白浜貝塚出土の縄文前・中期の土器 | 30 |
| PL. 17 | C区出土の縄文後期の土器① | 31 |
| PL. 18 | タ ② | 32 |
| PL. 19 | タ ③ | 33 |
| PL. 20 | タ ④ | 34 |
| PL. 21 | タ ⑤ | 35 |
| PL. 22 | タ ⑥ | 36 |
| PL. 23 | タ ⑦ | 37 |

| | | | |
|-------|---------------------|-----------|----|
| PL.24 | C区出土の縄文後期の土器⑧ | 38 | |
| PL.25 | タ | (9)..... | 39 |
| PL.26 | タ | (10)..... | 40 |
| PL.27 | タ | (11)..... | 41 |
| PL.28 | タ | (12)..... | 42 |
| PL.29 | タ | (13)..... | 43 |
| PL.30 | タ | (14)..... | 44 |
| PL.31 | タ | (15)..... | 45 |
| PL.32 | タ | (16)..... | 46 |
| PL.33 | タ | (17)..... | 47 |
| PL.34 | タ | (18)..... | 48 |
| PL.35 | タ | (19)..... | 49 |
| PL.36 | タ | (20)..... | 50 |
| PL.37 | C区出土の縄文後期の土器底部②) | 51 | |
| PL.38 | B・D区遺物出土状況 | 53 | |
| PL.39 | 縄文晩期上器出土状況（D区） | 54 | |
| PL.40 | 縄文晩期の土器① | 56 | |
| PL.41 | タ | (2)..... | 57 |
| PL.42 | タ | (3)..... | 58 |
| PL.43 | タ | (4)..... | 59 |
| PL.44 | タ | (5)..... | 60 |
| PL.45 | タ | (6)..... | 61 |
| PL.46 | 木の葉文を有する縄文晩期土器の底部⑦) | 62 | |
| PL.47 | 縄文晩期の土器⑧) | 63 | |
| PL.48 | タ | (9)..... | 64 |
| PL.49 | タ | (10)..... | 65 |
| PL.50 | タ | (11)..... | 66 |
| PL.51 | 弥生前期遺物出土状況（B区ⅣB層） | 67 | |
| PL.52 | タ | | 68 |
| PL.53 | 弥生前期の土器① | 70 | |
| PL.54 | タ | (2)..... | 71 |
| PL.55 | タ | (3)..... | 72 |
| PL.56 | タ | (4)..... | 73 |
| PL.57 | タ | (5)..... | 74 |

| | | |
|-------|---------------------|-----|
| PL.58 | 弥生前期の土器⑥ | 75 |
| PL.59 | タ ⑦ | 76 |
| PL.60 | タ ⑧ | 77 |
| PL.61 | タ ⑨ | 78 |
| PL.62 | タ ⑩ | 79 |
| PL.63 | タ ⑪ | 80 |
| PL.64 | タ ⑫ | 81 |
| PL.65 | 礪器出土状況 | 82 |
| PL.66 | 石製装身具出土状況 | 84 |
| PL.67 | C区出土の磨製石斧（繩文後期） | 85 |
| PL.68 | C区出土の石斧および未製品 | 86 |
| PL.69 | C区出土の礪器 | 87 |
| PL.70 | タ | 88 |
| PL.71 | 尖頭状石器（石結） | 89 |
| PL.72 | サスカイト製石器および尖頭器 | 90 |
| PL.73 | サヌカイト製石器および石核 | 91 |
| PL.74 | 石鍤① | 92 |
| PL.75 | タ ② | 93 |
| PL.76 | タ ③ | 94 |
| PL.77 | 石鍤④と磨石 | 95 |
| PL.78 | 石鋸および鉛歯結先状の石器 | 96 |
| PL.79 | C区出土の石鐵 | 97 |
| PL.80 | C区出土の剥片鐵 | 98 |
| PL.81 | C区出土の各種石器 | 99 |
| PL.82 | C区出土の刀器 | 100 |
| PL.83 | タ | 101 |
| PL.84 | B区出土の石鐵 | 102 |
| PL.85 | B区出土の石鐵およびD区出土の各種石器 | 103 |
| PL.86 | D区出土の石鐵 | 104 |
| PL.87 | B区出土の刀器 | 105 |
| PL.88 | タ | 106 |
| PL.89 | B・C区における剥片石器および石核 | 107 |
| PL.90 | B・C区に出土の各種石器 | 108 |
| PL.91 | 骨角器出土状況（D区IV b層） | 109 |

| | | |
|---------|-------------------------|-----|
| PL. 92 | 貝塚出土の自然遺物（鱈骨） | 110 |
| PL. 93 | 骨角器① | 111 |
| PL. 94 | タ ② | 112 |
| PL. 95 | タ ③ | 113 |
| PL. 96 | タ ④ | 114 |
| PL. 97 | タ ⑤ | 115 |
| PL. 98 | タ ⑥ | 116 |
| PL. 99 | 白浜浦海岸風景 | 117 |
| PL. 100 | B区北側土層 | 118 |
| PL. 101 | D区晩期人骨出土状況 | 120 |
| PL. 102 | 1号人骨（壮年男性）頭蓋骨上面観・同後面観 | 130 |
| PL. 103 | 同上正面観・側面観 | 131 |
| PL. 104 | 1号人骨（壮年男性）下肢骨・同上肢骨 | 132 |
| PL. 105 | 2号人骨（幼児）頭蓋上面観・同後面観・同四肢骨 | 133 |
| PL. 106 | 鹿骨出土状況・貝塚出土の鹿骨 | 134 |
| PL. 107 | 貝塚出土の鹿角 | 135 |
| PL. 108 | 貝塚出土の猪骨 | 136 |
| PL. 109 | 貝塚出土の貝類 | 137 |
| PL. 110 | タ | 138 |
| PL. 111 | タ | 139 |

表 目 次

| | | |
|-------|-----------|-----|
| 表 1. | 脳頭蓋主要計測値 | 128 |
| 表 2. | 顔面頭蓋主要計測値 | タ |
| 表 3. | 鎖骨主要計測値 | タ |
| 表 4. | 上腕骨主要計測値 | タ |
| 表 5. | 換骨主要計測値 | 129 |
| 表 6. | 尺骨主要計測値 | タ |
| 表 7. | 大腿骨主要計測値 | タ |
| 表 8. | 脛骨主要計測値 | タ |
| 表 9. | 腓骨主要計測値 | タ |
| 表 10. | 膝蓋骨計測値 | タ |

1. 五島列島の地誌概観

古く、松浦郡直島と称された長崎県五島列島は、九州西辺の海上に浮かび、南西→北東につらなる。行政区画上は南端福江島より順次、久賀島・奈留島・若松島・中通島と並んで、1市（福江市）と南松浦郡の10町からなる。中通島の北隣に小値賀島（町）、宇久島が連るが行政区画上は北松浦郡に属している。これら、長崎県西方海上の島嶼群は、地形的には異相を呈しながらも、地図の上では五島ならぬ〈七島列島〉の觀を呈している。

肥前風土記に〈八十余の島〉と記されているとおり、付属の島嶼が多く、断層と沈降による一連の塊状山地を形成している。そのため複雑なアリス式海岸を見せており、一方、土地の傾斜は全般に著しく、上（北）五島（中通・若松島）において特に山容陥屈である。また、五島列島は火山が多く、火山岩類が南北に貫き、部分的に溶岩流出による低平な台地を形成している。

かかる五島列島の地形地誌は、人文の面においても重大な影響を及ぼしており、農業には概して不適な土地柄となっている。甘藷や豆類の栽培が古くから行われ、水田面積も狭く、反当収量も低い。一方において、五島列島は、対馬暖流の影響を強く受け、気温の年較差が少なく、植生の面において暖地性のものが多く見られる。また、クジラ・イルカの回遊路があり、火山性の脊椎が多いため沿岸漁業も盛んである。捕鯨は、上五島有川町一帯に特に盛んで、巻岐島（郡）と並んでいる。イルカの捕獲も盛んであるが、直接に食料とする目的によるものではなく、ブリ等の魚を大量（年間50万トンといわれる）に食べるイルカを除去する目的によるものである。古来、対馬暖流にのる魚類資源の豊富なことを示していよう。

五島列島の先史古代を概観する場合、基本的には、九州本島部の境外ではありえないが、前述の自然・人文上の特色が濃く見られる点は首肯できよう。五島列島における縄文時代早期以前の遺跡は、九州本島部と同様、現海岸部において稀薄である。最北端の宇久島（町）東岸のマグラ遺跡のナイフ型石器、同町城ヶ岳遺跡及び福江島岐宿町茶園遺跡の細石刃核・細石刃がある程度である。縄文時代早期の押型文土器は小値賀島柳遺跡、福江市鬼岳山麓に小片を見ているが明確な遺跡に接していない。

縄文時代前期に入るとかなり明瞭な遺跡が現われる。その姿を図表で示せばFig. 1のごとくなるが、遺跡の分布が南北五島にわたっており、現代の入文の様相と重複していることは興味深い。五島列島（宇久・小値賀を含めて）の北から主要遺跡を概述すれば次のごとくである。宇久島東岸長崎島遺跡（縄文中期），小値賀島殿崎島遺跡（縄文後期）・吉田遺跡（縄文中期），中通島頭鳥遺跡（縄文前・中・後・晚期），福江島宮下貝塚（縄文時代後期），江湖貝塚（縄文前期），水ノ森遺跡（縄文時代晚期），鷲川貝塚（縄文時代後期）等に今回の報じる白浜貝塚（縄文後・晚期）を加えて挙げることができる。

いずれも海岸における砂丘・砂嘴といった地形上に立地しており、出土遺物等とあわせて、

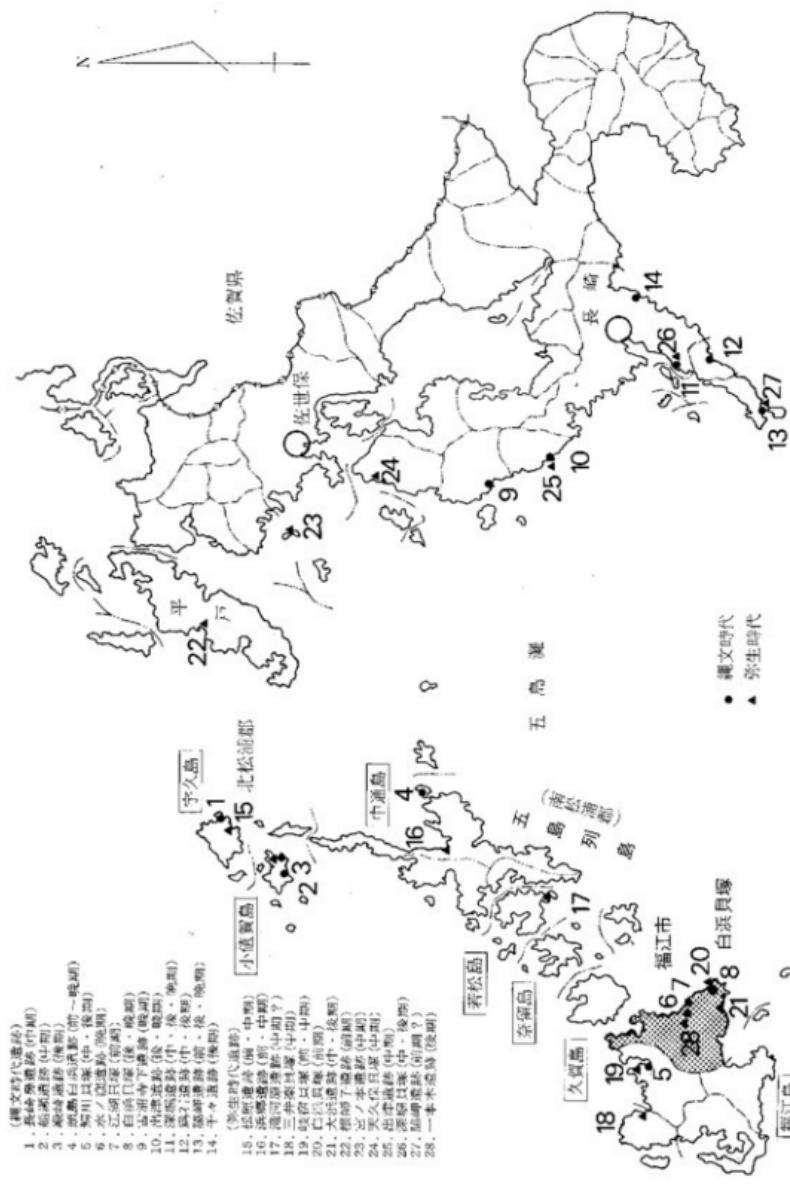


Fig. 1 五島沿岸の主要遺跡

海洋性を色濃く留めている。

このような自然と人文の条件に強く規制された五島縄文時代の遺跡の立地と生活の伝統は弥生時代においても殆んど変化を見せず、九州本島部の弥生時代と同じ場内にありながら、強い地域性を見せる。この点は、農耕適地の少い長崎県本土西海岸の様相ときわめて酷似するところであり、出土人骨の形質上においても縄文的な形質を示すといわれていることが想起される。

五島列島の主要縄文時代遺跡群についての前述の紹介に拠じて主要な弥生時代遺跡を列記すれば次のとおりであり、その分布はFig. 1のとおりとなる。宇久島宇久平遺跡（弥生時代前・中期）、小値賀島殿寺遺跡（^{とべ}（弥生時代前期）、中通島浜郷遺跡（弥生時代前・中期）、若松島瀧河原遺跡（^{たき}（弥生時代中期？）、福江島岐宿貝塚（弥生時代前・中期）、大浜遺跡（弥生時代中・後期）、三井梁貝塚（弥生時代中期）等の主要遺跡の他、本報の白浜貝塚（弥生時代前・中期）があり既報のものも多い。これらの遺跡の調査は大戦前のものもさりながら、1960年代以降において行われたものが多く、墓制・葬制を含めて明らかになった意味は大きいものがある。

他方、弥生時代後期以降の五島列島において、遺跡・遺物は急激に減じ、福江島の五社神社に残る遺物とそれらを出土した一本木遺跡が五島列島の弥生時代末期の姿をとどめており、弥生時代の五島列島は南端福江島を除いて考古学的事象による限り、過疎化現象をおこした感がある。

一方、古墳時代の五島列島も考古学的事象は全体に稀薄である。小値賀島（北松浦郡）のみは椿山・浜津古墳等の小円墳群が遺存するなど、上五島が下五島に対し、なんらかの優位を保つ条件があったと考えられる。西海の最西端にあって、日中・日朝の交渉史の中で、島の位置が弥生時代にもまして重要視されたことの投影であろうか。

小近・大近という五島列島の旧様が史上にあらわれるのは隋・唐への遣使を背景としたものであろう。また、弘仁・貞觀の日朝関係に際しても島名が登場する。元寇戦斗の諸将の中に宇久氏・松浦氏の名が見えている。松浦党・平戸松浦氏の基盤を形づくったものは、古来著名な海潮と水運であったことは考古学的な微証・文献からうかがえるところであるが、他の側面も九州島との接触の中で培われていったと考えられる。1334年（建武元年）、元来は狭い水道によって隔てられていた現在の小値賀島を「開港を構築」することによって水道を埋立てて水田17町歩を得た（松浦15代祖源定）という記録があり、現在福江島の東北岐宿町の城岳（21.6m）頂点をめぐって、「岐」の文字を刻した石碑をもつ城跡があつて、宇久氏8代の覚が1383年（弘和2年）宇久島より福江島に移って構築したとされている。宇久氏は、後に「五島」を名のることになり、現在の福江市に水城（石山城、県指定史跡）を構築する。

長崎県本土部から五島までの海上距離約90km、上五島～平戸島間約30kmを計り、晴天時は遠望可能な距離にある。日本西辺にあって、日中・日朝交渉史の中で五島列島は近世以前～古墳時代にさかのぼって、上五島を中心に動いていたようである。

〈参考文献〉

- 津田繁二「我長崎県の先史時代及び原始時代の遺跡遺物の概要について」長崎談叢26 1940
鏡山 猛・酒詰伸男・鈴木重治・桑山龍進「五島遺跡調査報告」長崎県文化財調査報告第2集 長崎県教育委員会 1964
賀川光夫「宮下遺跡調査報告」長崎県文化財調査報告第7集（図録篇）1968、同第9集（本文篇）1971
正林 譲・高野晋司「水ノ窪遺跡」福江市埋蔵文化財調査報告第1集 福江市教育委員会 1976
坂田邦洋「曾畠式土器に関する研究」江湖貝塚 1973
鏡山 猛「九州考古学論叢」1972
「富江町郷土誌」1977 富江町教育委員会
「小值賀町郷土誌」1978 小值賀町教育委員会
松崎久磨治「五島と古代の遺跡」五島の歴史と民話第1集 1969



PL. 1 遺跡遠景（手前火岳と後方鬼岳）

2. 調査にいたるまで

福江市の南郊、上崎山地区は「鬼岳火山群」の一峰「火岳」(314m)および「箕岳」(143m)を、それぞれ西と南にひかえた地域である。上崎山の東海岸は、両火山より流出した溶岩流が緩い傾斜地を形成して埋没した岩礁地形をなしている。ただ、白浜浦の部分のみは古くから砂丘が形成されて、縄文時代以来、生活の場として、あるいは漁撈の場として利用されてきた。その有様は、今回の報となるわけであるが、遺跡の存在はかなり古くから知られており、Fig. 2に示したB砂丘においても遺物の採集が可能であったといわれる。A砂丘の部分においては勿論遺物の採集は可能である。もっとも、土地の識者河端千松氏(福江市教育委員長)によれば、高い砂山(砂丘)が見られたのは、大正時代の末か昭和の初期頃までであり、この部分は崎山町に属さず公有水面とされており、昭和42年において、砂丘上にすでに建てられていた一群の民家群が正式に地籍があたえられて現在の向町なる町名が付された由である。このことは、福江市役所崎山支所の記録に明確である。また同氏によれば、高い砂山(砂丘)が遺存していた昭和初期以降、砂丘が宅地として利用されはじめた頃になって、遺物や貝殻がときおり見られるようになった由であるから、遺跡の所在が認められるようになったのは、比較的新しいことになる。さらに、砂丘を削るようになったのは宅地化のためだけでなく、砂を堆肥に混入してローム質の土を改良する目的があり、また、碇砂として、麻袋に封入して漁網の鍤として利用したことによって、砂丘が徐々に低くなっていたといわれている。

砂丘上に集落が生まれた昭和初期以降、今次調査地点の東側を南北に走る市道が作られ、側溝が掘られた折に貝と人骨が出土し、護岸堤防が建設された際にも人骨が出土したといわれている。砂丘の各地点における個々の遺物等が発見されたのは比較的新しい時期においてであるが、全国遺跡地図長崎県(昭和42年 文化財保護委員会)に「白浜貝塚」、「白浜遺跡」と、別個の遺跡として扱われているのは、この間の事情を物語っているといえよう。

白浜貝塚の遺物を実見したのは、昭和37~38年、地元の研究家である松崎久磨治氏採集の遺物であったが、貝殻条痕文土器に混じって、縄文中期の良好な資料があり、A砂丘南端の畑地より採集された由であった。その後も数回現地を訪れ、A砂丘の中央部において、貝層の一部と弥生式土器を認ることができた。これらのことよりして、白浜の砂丘は、数少い縄文時代中・後期の遺跡および弥生時代前期貝塚が、立地点をちがえて包蔵されていることが予察された。人骨埋葬の可能性も十分あり、人類学的にも重要な遺跡であることが予察されていた。

今回の調査地点である福江市向町3443-12番地は里本朝一氏所有の土地であり、家屋は廃されていた。氏は県外在住の不在地主であるが、昭和51年8月、現地において碇砂採取作業が行われたとの報が県文化財保護指導委員松崎久磨治氏からあり、現地把握のため、正林が急行した。砂の採取は大量ではなかったものの、貝層が露出しており、早急の対策が必要と

なった。

重要遺跡のことでもあり、公有化による保存が最良の策であることは勿論であり、調査費の試算額よりしても、指定と公有化が最善と考えられ、この点を福江市教育委員会に提言した。その後、土地所有者の里帰りと家屋建築予定の報があり、代替地の調達が可能であれば、公有化に応じてもよいとの土地所有者の理解も得られたため、福江市は、教育委員会を中心となつて代替地の物色に努力されたが結果的には代替地調達が困難となり、緊急発掘による記録保存の措置がやむをえない事態となった。土地所有者里本氏は建築予定をのぼし、同年8月中旬までに調査を終つて欲しい旨、理解を示された。

白浜貝塚の調査は前段の学術性と後段の緊急性によって実施されたものであるが、関係者の努力と理解の上に成り立ったものであることを特記したい。

調査は福江市が教育委員会担当のもとに事業主体となり、国庫および県費補助を得て実施したものであった。調査は、昭和54年5月8日から同月26日の間実施されたが、当初は、弥生期の貝塚部分にあたっているという予察のもとに実施したものであった。

調査が進行するなかで、弥生時代貝塚の下層に縄文時代晚期の貝層のあることが確認され、更に、調査区の西半部においては、縄文時代後期の包含層が確認され、あたかも各期の遺跡が、それぞれの境界を接する状態が確認されて、所定の期間と経費内で調査を終えることは極めて困難な事態となった。

調査は、一端中断し、現場保全の後、同年7月11日再開し、8月7日終了したが前半の調査中断後、再開のためには、更に予算と時間と入手の追加調達が必要であったことは勿論である。文化庁や県、さらに福江市当局の努力と理解によって、年度中途という条件のなかで、調査が再開され、当該地点の調査が成功裡に終了し得たことは特筆に値するものであろう。

なかでも、福江市教育委員会社会教育課の方々は、事務担当として調査の立案から実施にいたるまで終始積極的な取組みをされたばかりでなく、砂丘の輻射と炎天の中で、直接調査活動にも従事された。

更に、地元向町および崎山町の方々には物心両面において、終始調査の進行に御加勢いただいた。また、今次調査地点の北隣の崎山中学校教頭増田佐澄先生と御家族には、煩わしい電話連絡の労をいただき、調査器材置場も御提供いただいた。

遺跡自体もきわめて高い評価にたえるものであり、見るべき成果の一端を報じることになつたが、これらの成果は前述の方々の善意と努力と汗で支えられたものであることを記して謝意としたい。

3. 白浜貝塚の位置と環境

白浜貝塚は、長崎県福江市向町3443-9・11・12・2443-1を中心として、当該地帯西側の畠地および、東側を走る市道敷下にひろがり、一部現海岸堤防の外に突出する「えびす岩」の近くまで展開している。全国遺跡地区・長崎（文化庁1951）には16-15（白浜遺跡）・16-16（白浜貝塚）として収録されているが本来一つの遺跡である。市道工事に伴った削溝工事によって貝塚の一部や遺物が露出した部分を「貝塚」として収録、堤防工事に際して人骨等が出上したといわれる部分を別個の遺跡として収録したものであろう。知名度からいえば白浜貝塚の名称が高いので、報告書名も「白浜貝塚」を用い、本文にもこの名称を用いることにする。

下（南）五島地区の各島は、長崎市との間を、船便約3.5時間で結ばれている。福江市は、五島列島南端にあって、列島中最大の福江島の東半を占めている。福江島全島39.7平方kmの内15.8平方km、約40%を占めており、付属の島数は10を越える。市の西側は標高（最高翁頭山429.3m）に比して陥阻な山容をもつ地形となり急激に海に没して、複雑なリアス式海岸となっている。市の東南には「鬼岳火山群」があり、鬼岳（317m）、箕ヶ（143



Fig. 2 白浜貝塚周辺地形図(1/2000)

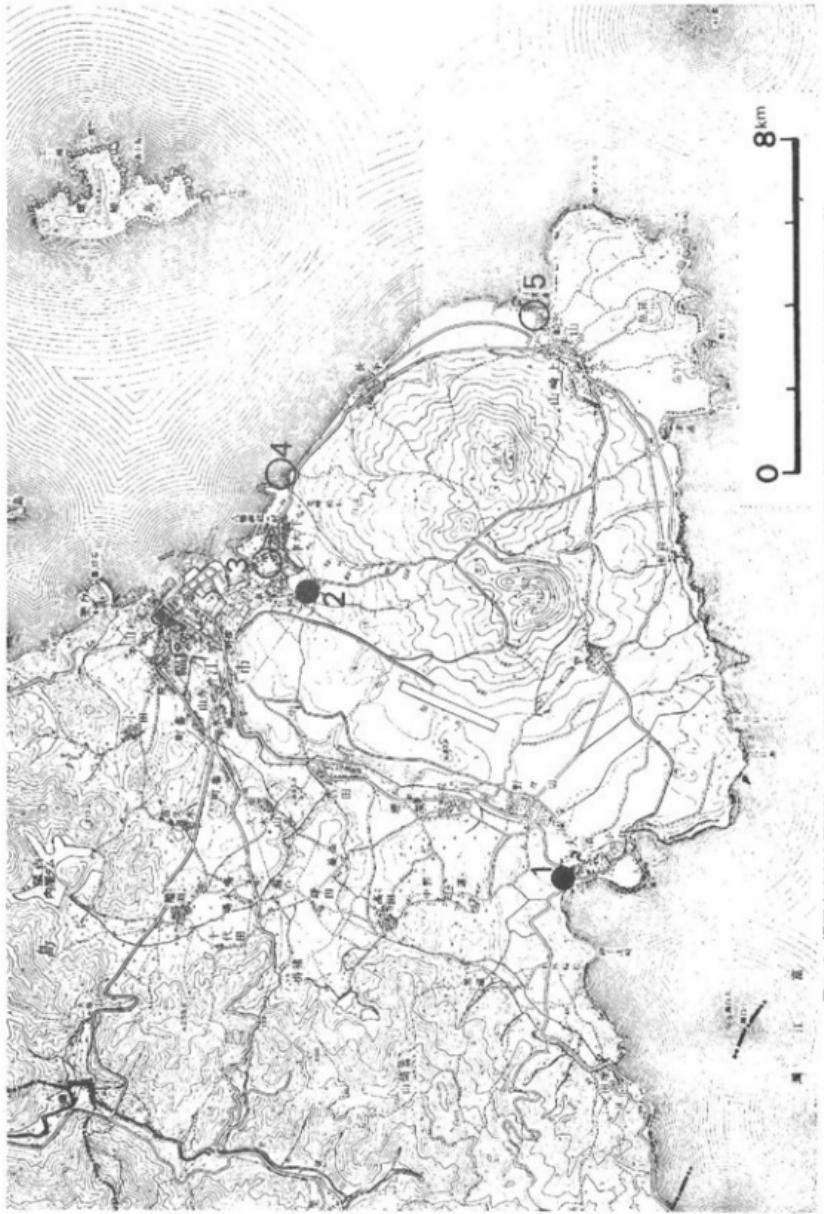


Fig. 3 福州市衛部主要地圖
1. 大東道路(弥生中・後) 2. 一木木道跡(弥生・後) 3. 水ノ澤通路(編文・晚)
4. 江湖貝環(編文・前) 5. 白貝環(編文・後・晚、弥生前)



白浜貝塚航空写真

（約314m）が美しい山容を見せる。これら火山群は流出した溶岩によるなだらかな斜面を形成し、市の西半部と対照的な景観を呈している。

鬼岳・火岳は台状火山の爆裂による火山砂礫が堆積したホマーテ火山で、両山とも爆裂口は北側が欠けて不完全なものとなっている。火口壁の傾きは山腹の傾斜とほぼ同様で、100mの等高線で囲まれる部分には火山砕の堆積が厚く、湧水点が見られ、そこに大字の集落が形成されている。畠地も大体、この標高域まで営まれている。白浜貝塚南手の箕島・白浜もホマーテ火山であり、両山からの流出溶岩によって小半島が形成され、鬼岳・火岳火山群と対峙する鞍部に上崎山の集落が形成されている。

白浜貝塚のある向町の集落は、火岳の東方の海岸に立地している。基盤は火岳から流出した溶岩が緩傾斜面を構成し、白浜浦に没したものであるが、遺跡の西方は厚く粘質の土壌が堆積して、多く畠地に利用されている。

一方、五島灘から押しかけた砂は厚く海岸に堆積して砂丘を形成している。古の言によれば、砂の山があって松林が繁り、砂すべりをしていたため、着物の尻を破り、親から「がられた」（おこられた）とあり、現在よりかなり高い砂丘があったことがわかる。砂丘は、Fig.2の漁業協同組合の建物あたりから、同区344-9（竹野助右衛門氏宅）までのびて一応切れた形で南北にのびており、別の砂丘が北に面して、Fig.2のBの位置にあったといわれる。この二つの砂丘の間に小川が流れ白浜浦に注いでいる。明瞭に遺跡が認められるのはAの砂丘であるが、かつてはBの砂丘でも遺物の表面採集が可能であったという。遺跡のある向町の一帯は地図では下崎山となっているが、「崎山」なる名称は、砂の山を指すところからきているといわれる。

砂丘の形成の有無は別として、大浜遺跡のある一帯から八幡神社に至る海岸線は同様に流出溶岩による緩傾斜地を基盤としており、白浜浦西方約8kmの海岸にある鎌瀬地区のごとく、奇岩奇観を呈する部分もある。溶岩基盤の傾斜が強い部分は、現在も集落が営まれており、本報の白浜浦をはじめ遺跡と重複しているものもある（Fig.3大浜遺跡）。白浜貝塚の北方、約8kmの海岸にある江湖貝塚は绳文時代前期（曾畠式）の貝塚であり、潮間線に貝塚が営まれているが、この海岸にも、かつて高い砂丘があり、白沙青松があったといわれる。海岸線の遺跡としては、この地区に大浜遺跡（弥生時代中・後期墓地）がある。江湖貝塚の西方には水ノ瀬遺跡があるが、旧海岸に立地した绳文晚期の遺跡である。一本木遺跡は、海岸に立地した遺跡ではないが、市内五社神社等にある遺物よりして、五島列島では稀な弥生時代後期の墓地・住居跡が見られている。

（参考文献） 鏡山 猛・酒詣仲男・鈴木重治・桑山龍進「五島遺跡調査報告」長崎県文化財調査報告第2集 長崎県教育委員会 1964

正林 譲・高野昌司「水ノ瀬遺跡」福江市埋蔵文化財調査報告第1集 福江市教育委員会 1976
坂田邦洋「曾畠式土器に関する研究」江湖貝塚 1973

4. 調査の概要

経過の項で記したごとく、白浜貝塚の調査は昭和54年5月8日～26日の前半と、同年7月11日～8月8日の後半とに分けられる。この間数日の雨天を除いて、48日間に及んだ。調査期間および経費が約2倍にのびたのは、今次調査の地点が、弥生時代の貝塚であるとの予測に反して、縄文時代晚期、更には縄文時代後期層の存在が確認されたことによる。かかる事態の中で、出土遺物の量も莫大なものとなつたことは当然であり、記録措置も複雑化した。

1. 聽きとり調査

別項で記したごとく、白浜貝塚は、かつて小高い砂丘状態の砂丘中に包含されていたといわれ、現在は人家の密集する海岸集落下に包蔵されている。したがって、現状では、西北九州に顕著な砂丘遺跡の景観をとどめていない。通常、西北九州の砂丘地形と総称されている海岸地形の場合、Sand spit の見られるもの、Back marsh の見られるもの、更に背後に Lagoon の見られるものとがあり、必ずしも一様でない。白浜浦の海岸砂地形の場合、顕著な Lagoon は認められず、僅かにB砂丘の背後に認められる程度である。A砂丘の背後には、これらの凹低凹地は認められない。

調査にさきだって実施した地形観察によれば、旧地形を窺わせるのは、今次調査地点の東側を南北に走る市道の起伏であり、海浜に露出した溶岩塊の出入、さらには調査地点西側の緩傾斜の畠地であった。土地の古考の記憶にたよって、土地の旧状に関する聞きとりを実施したのは、前述のごとく、砂丘が旧状をとどめていないという事態をふまえて、調査の進行と併せて、遺跡成立の条件を予察する必要からであった。聞きとりの結果については、別項「砂丘の形成と遺跡の成立」に記してあるので重複の煩を避けることにするが、今次調査地点の最下の文化層である縄文後期層の時代と、縄文晚期・弥生前期の頃の地貌と地形は、現在とかなり異っていたと考えられる。

2. 調査区の設定

今次調査の地点は別項で記したごとく、福江市向町3443-12番地、黒本朝一氏所有になる宅地部分約180m²である。東側は市道、南北隣とも宅地、西側は現状よりも約1.5m高いレベルの畠地となっている。調査地点の南北側とも石垣が構され、一部市道との間に石垣が構築されていた。調査着手前に北および東側の石垣は除されていたが、南側と西側は除去不可能であったため、約2mを残して発掘調査を実施した。発掘面積は約150m²の、ほぼ方形の区画である。調査区はほぼ4分割して層位観察の畦畔を、十字形に残した。調査区の符号は北

東区をA、南東区をB、北西区をC、南西区をD区として区分した。(Fig. 4)

3. 一部損壊の状況

別項で記したごとく、崎山地区では漁撈用碇に、海岸の砂を袋に封入して用いるため、しばしば砂の採取がみられる。今次調査地点においても砂採取の跡が見られ、現地表から深度1m余に達する採取坑が、幅1mのトレンチ状にうがたれ、調査地点をほぼ南北に2分する位置に認められた。一方宅地であったため、囲炉裡穴が1ヶ所、芋がまが1ヶ所認められた。

遺跡成立の項に記入したとおり、今次調査地点をほぼ東西に2分する線上に旧海岸線があり、この線を東限として縄文時代晚期の遺跡が展開していたが、調査地点のほぼ東半部をしめる縄文時代晚期および弥生時代前期遺跡の西限とが、いかなる層位的関係にあるかは重大な关心事であった。この境界のほぼ全面にわたって、碇砂採取坑がうがたれていたため、時代の異なる遺跡群の層位的関係は、南側の壁面において僅かに観察されるにすぎない状態にあった。囲炉裡あとは、径1m程度の円形にうがたれ、B区の貝塚を貫入していた。B区北東隅における芋が

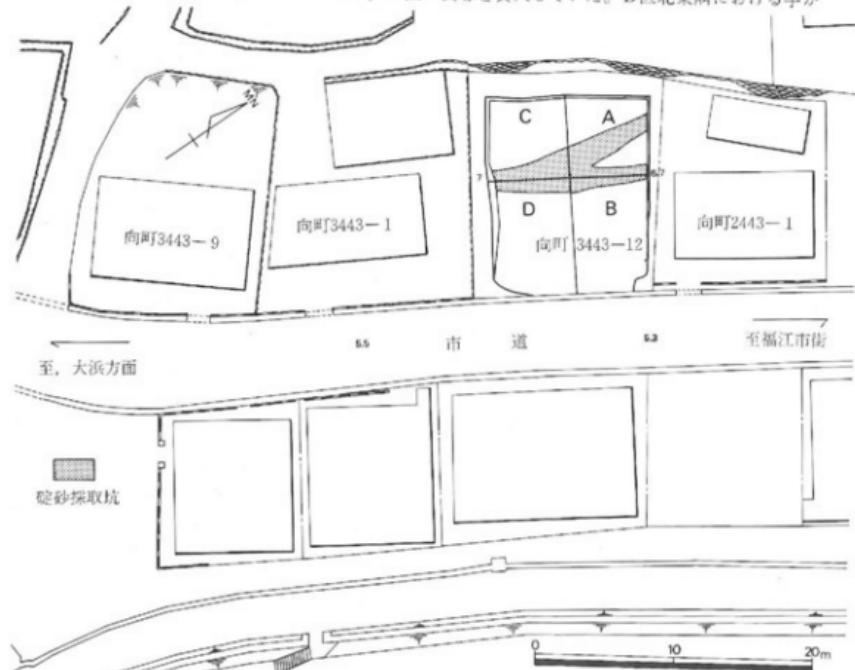
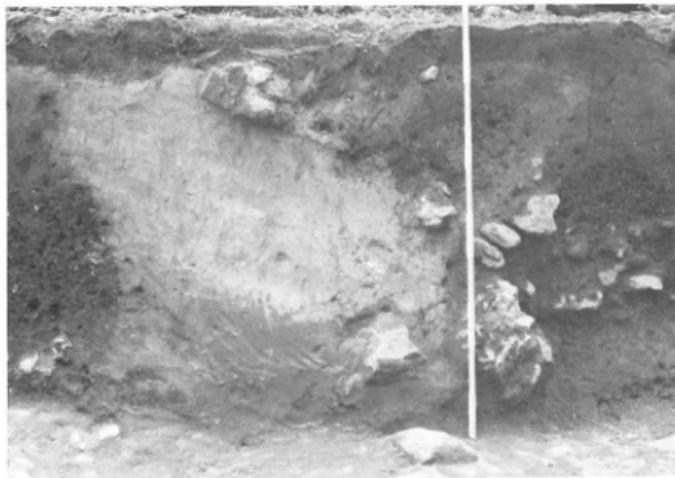


Fig. 4 白浜貝塚調査区域図



砾砂採取坑



砾砂採取坑断面（西侧）



調査風景

ま跡は1.5m×2m程度の隅丸方形に掘られており、貝塚の上面に達していた。このため、芋がま部分に、かつて存したらしい墓壙が損壊されたらしく、入骨片が散乱した状態で認められた。

これらの擾乱部位は、いずれも遺跡・遺構にとって重大な影響を及ぼしていた。

4. 調 査

Fig. 4 のごとく、調査は、当該地番の西および南辺は、石垣保全のために、その内側を約2m幅で残し、他の部位をほぼ4分割してA～Dの各区として発掘調査を実施した。層位については別項に譲るが、かつて、宅地として造成されていたため、一部に擾乱状態があつたものの概して整層状態が保たれており、宅地表面よりの調査深さは、西半部において約1.8m、最も浅い東半分部においても1.5mにおよんだ。砂層の状態は、初層から全5層に区分して層位を把握できたが、VI・V層は、おのおのの砂層が肉眼では区分困難であり、かつ遺物の変化が認められるため、それぞれa・bに細分した。

砂層の傾きは全体に緩く、西→東方向に僅かな下向傾斜が認められ、西半部のA・C区間にても北→南に緩い下向傾斜が観察された。これらの事象は、溶岩の下向傾斜に従って砂が堆積したことを見出している。

砂層の層順から遺跡包含状態をみれば、Ⅲ層までは擾乱状態が見られ、新旧遺物の混在があり、Ⅳ層上面にまで一部擾乱状態は及んでいたが、Ⅴ層までの人为的擾乱と異り、砂層上面の微細な起伏によるものと思われる。このことよりして、本来はI～Ⅲは一括処理できるものであり、Ⅳ層～Ⅴ層は、先史各期の整層状態にあるといえる。

「砂丘の形成と遺跡の成立」の項で触れたごとく、全調査区をほぼ東西に二分する線上に旧海岸が認められ、溶岩流の東辺が認められた。そして、この線が縄文時代後期遺跡と、同晩期および弥生時代前期遺跡の接触線でもあるが、本項で前述した碇砂採取坑による擾乱のため、「接觸」の境界は明瞭には把握できない状態であった。この境界の西側は溶岩礫群が認められ、それらを一部に寄せて空間を作り出したかの感じもあったが、明瞭に遺構と認められる状態ではなかった。これ等礫群の性格については不明である。A・C区、つまり縄文時代後期遺跡部分は、A区においては溶岩が高くもりあがり、包含層うすく、遺物包含の状態も稀薄であった。

記録の方途は概要次のとおりである。

遺物出土状況の記録はⅢ層（擾乱）下部から行い、20分の1のドットマップを作成した。以下の層においては、遺物の出土状況を10分の1で実測した。貝塚についても同様である。砂層断面は、各区境界の畦畔部が碇砂採取坑のため、損壊された部分とほぼ一致していたため、全調査区の西側および南側の層位についてのみ記録した。写真記録は白黒フィルムは主として6×9cmおよび6×4.5cm版カメラによって使用し、35mm版カメラをカラーリバーサル用と

して用いた。

5. 縄文時代後期遺跡

A・C区の東限がほぼこここの時代の遺跡の東限にあたり、全体としてC区の西南方向にひろがりをもち、調査地点西側の畠地および、南側にあたる向町3443-11番地（亀山氏所有の宅地）に埋蔵されている。

遺跡を包含するのは赤褐色の砂層で有機質を多く含んでおり、骨角質の保存はよいが、貝塚は営まれていない。遺物の保存状態はきわめて良好であるが、土器はつぶれたものが多く、前述した溶岩礫群の下におしつぶされた状態のものも認められたところよりして、当溶岩礫群は、なんらかの理由で流入したものと考えられる。

包含されている土器は磨消繩文と沈線群を組合せた浅鉢のものが一群をなし、ゆるく波状を描いて橈状把手をもつものがある。一方、貝殻条痕の地文をもち、ゆるやかな波状口縁部に逆W字状の文様を配し、各波頂間の口縁部に綾杉状の文様をもつ一群がある。これらは、いわゆる鐘ヶ崎式土器といわれる系統に属する一群と、北久根山式土器といわれる系統のものと、大別して二系統の土器に属する土器である。一方、例数としては稀少ながら、市来式土器に類するものがある。

これらの状態よりして、縄文時代後期における五島列島の文化も、九州本島の境外ではありえないものであるとともに、広く九州西海岸における交流と伝播の密であったことが知られる。

石器には、石鎌・石鋸・石鋸・搔器等の剥片石器群と石錘・磨製石斧・尖頭部をもつ拳大の櫛・敲石・凹石等、一群の礫石器が見られ、剥片・石核も好資料がある。石材の面でいえば、黒耀石の原産地をもたない五島列島の事情を反映してか、黒耀石の石器が比較的少量の感がある。蛇紋岩・緑泥片岩・絆雲母片岩等が、磨製石斧等に利用されているが、長崎半島ないし、西彼杵半島よりもたらされたものである。

骨角器はA・C区においては微量である



PL. 5 遺物出土状況 (C区V層)



PL. 6 遺物出土状況 (C区V層)

が保存はよい。自然遺物も遺存例数はB・D区に比すれば微量であるが、鯨・イルカ・サメ等の海獣骨が見られる。

6. 繩文時代晩期遺跡

B・D区全体に貝塚の状態で認められ、一部、墓域の辺縁と重複している。遺物の出土量よりすれば、B区の北辺に近い部位ほど出土量が減じる感がある。

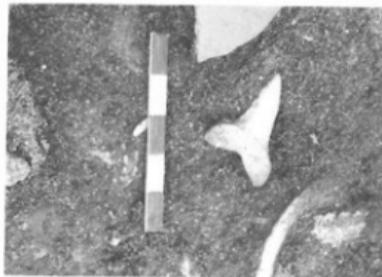
土器は、精製磨研の浅鉢の一類があり、うすでの胎土表面は滑らかに仕上げられ、口縁部のすぐ下で断面が「く」の字型に折れる形になる。口唇上、蝶ネクタイ型などの突起を作り出すものがある。一群は、土器の内外面に貝殻条痕を残す粗製土器であり、頭部から肩部にかけて、ゆるい「く」の字型の断面を見せる。また、他の一群は刻目突帯を口縁部と、ゆるく逆「く」の字型に断面が折れる部分に各一条めぐらす深ばちないしカメ型土器の一群である。刻目突帯は口唇に直接つくものと、口唇部からやや下って付けられるものがある。

これらの土器群よりして、繩文時代晩期の後半に当該貝塚は位置づけることができる。共伴した石器類は、基本的に繩文後期のそれと大差ない器種が見られた。

D区の西壁よりに埋葬状態の入骨が検出された、埋葬場の状態は砂丘の場合不明瞭なものが多く、本例も例外ではないが、晩期貝層の最大部において検出されており、晩期人骨といい得る。人骨は成人および幼児各一体であり、人類学上の点は別項に譲るとして、成人骨は仰臥屈葬位をとり、右腕の間に幼児骨を擁した状態で検出された。人骨の直下において、巻貝製垂飾および小型の貝輪各1点が出土した。貝輪は小型のもので、幼児骨が装着していた可能性が強い。

貝層中には自然遺物豊かであるが、鯨・サメ等が多く、鹿・猪等の陸獣の骨角豊かである。

また骨角器も多く見られ、ヤス状の刺突具や齒根部を扁に研磨した大量のサメ歯が注目された。



PL. 7 研磨されたサメ歯出土状況



PL. 8 出土人骨の計測風景

7. 弥生時代前期の遺跡

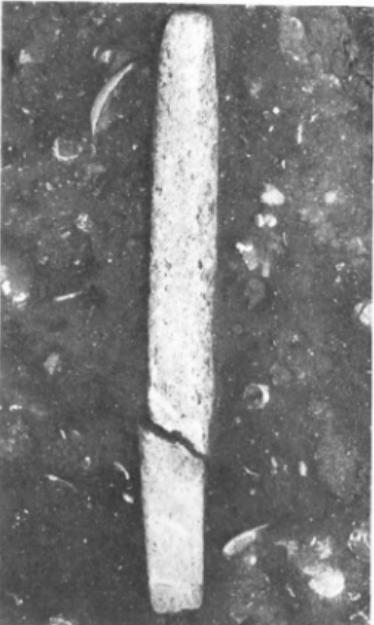
B・D区全体に貝塚として認められ、縄文時代晩期貝塚と接層状態で展開するが層界は明瞭でない。

土器の中には、斐型・壺型の土器が数量的に目立っている。斐型土器は推定器高3.0～4.0cmほどの比較的大型のものが多く、胴部から口縁部にかけての断面型が、ゆるい「S」字の曲線を描く、胴部の張り出しあらんどないか、きわめてゆるい張り出しにとどまり、口唇部に刻目をつけている。頸部には、狭い間隔で2条の沈線を描くものもあり、ハケ目地文をもつるものもある。

壺型土器も推定器高の比較的高いものが多い。基本的な器型は、胴部は極端な張り出しあらない。口縁部外側は頸部直上部でいったん弱い段をつけた後、外反するため、この部分が頸部に比して肉厚になっている。頸部から胴部への移行は円滑である。内外器壁ともヘラ磨きがみられ、一部丹塗りを施したものがあり、縄文晩期の精製磨研土器をおもわせるものがある。文様は、無文で放置するものの外、頸部あるいは胴部上半部に複数の沈線をめぐらすものや重弧文ないし鋸歯文を描くものがある。

これら土器群の特長の他に検討すべき点もあるようが、一応、弥生式前期中葉ないし後半の貝塚と見て支障ないと考えられる。共伴した石器群についての詳述は後日にゆずることとして、本遺跡における縄文時代後期以来、基本的な変化を認め難い。但し、方柱状の片刃石斧が2点検出され、内1点は明瞭な抉入の完成品であった点、さらに石製垂飾7点（内2点は未成品）が注目された。石製垂飾はいずれも不整形の小礫そのもの形に研磨し穿孔が見られるが、内1点は全面に線刻が見られている。材質は瑪瑙4点（平戸産？）、1点は蛇紋岩（？）である。磨製石鏃片1点も注目される資料である。

骨角製の出土資料も多く見られるが、本遺跡の縄文時代各期出土の資料と大きな変化は認められない。但し、全長33cm、幅3.3cm、厚み1.5cmのヘラ状鰐骨製品が注目される。本資料の側面観を略述すれば、全長の中



PL. 9 鰐骨製アワビおこし出土状況 (B区IV層)

尖部近く段がつけられ当該部が最も厚く、尖端に向って鋭利な角度がつけられており、挺状の支点を意識した作意が見られる。欠損品をも含めば 4 点をかぞえる。

B 区東北隅において、芋がまの掘りこみ坑底部が確認され、人骨頭骨の破片が認められた。埋葬の遺構は確認できなかったが、埋葬人骨であった可能性があり、弥生時代前期の墓域を予察するに重要な意味をもつものと考えられた。

以上、調査の概要を報じ、細述は後報に譲ることにするが、予報としていくつかの注目すべき点を記して本項を終ることにする。

今次の調査地点は、従前、白浜貝塚、白浜遺跡として周知されてきた砂丘遺跡の一部であり、従前の遺跡名称よりすれば白浜貝塚の一部に相当している。道路事業等の機に由来の遺跡の遺物が発見され、白浜貝塚は弥生時代の貝塚、白浜遺跡は縄文時代中期の遺跡として認識されていたわけである。今次の調査地点は、計らずも、新たに縄文時代後期遺跡と同時期の貝塚の存在が確認されたわけで、従前の知見とを総合すると、A 砂丘の南端部において縄文時代中期、ほぼ中央部に同後期、更に晚期、中央やや北寄りに弥生時代前期の遺跡が成立していく、それらの境界がほぼ予察可能となり、各時代における砂丘の利用部位の変遷が、砂丘の消長とともに見られるに至った。

第 2 に重要視されねばならないのは、今回確認された縄文時代後期遺跡の存在である。五島列島における同期の遺跡に関する資料は表面採集資料としては見られてきたが、発掘調査によって、五島列島の同期の姿が幾分明らかになったのは福江市の南隣、南松浦郡富江町宮下貝塚の調査によってであるが、同遺跡出土の土器が北九根山式の影響を認めながら、地域性の強い点から富江式なる土器名称の提唱があった。今次の調査によって確認された縄文後期土器は、磨消縄文と橋状把手をもつ鐘ヶ崎式の壺内でしかありえない土器であり、ゆるい波状口縁に逆「W」字の文様を施すものとの 2 系統の土器がほぼ等量の共伴関係をもって把握されたことである。

この 2 系統の土器群は、九州の縄文時代後期を代表するものでありながら、その前後関係が論ぜられてきていた。いま直ちに、本遺跡における事実のみをもって、両者が同時期における地域差であるとの結論を出すことには、ためらいがあるが、今後の検討の有力な資料とはなり得よう。

第 3 に、縄文時代晩期貝塚および同期人骨の埋葬を確認できたことがあげられる。

赤色または黒色の精製磨研の浅鉢に、横方向の擦痕のつよく残る粗製の壺型・深鉢土器が伴い、更に「く」の字型に胴部と頸部の接合部が折れ、この部分と口唇直下に刻目突帯をめぐら

して、器壁に擦痕を強く残す變型土器が共伴した貝塚ということになるが、黒川式の影響を強くうけ山ノ寺期の貝塚といえよう。この「刻目突帶」を有する土器の中には、突帶自体がやや微弱な状態となり、上部突帶が口唇に直接するとともに器形の面でも「く」の字型の肩の折れが微弱なものが認められる。山の寺式の特性の微弱な一群の土器群は注意を要しよう。共伴した石器群は、1点の扁平磨製片刃石器の他は、粗大な剝離面を残す插器群と石錐・敲石・凹石・石鐵等があり、鋭利な刺突用骨器群とあわせて、縄文時代の伝統的な姿をとどめている。当該期の九州本島部においては稻作農耕の萌芽のあったことがほぼ肯定されているに対して土地柄を強く反映していることが注目される。同じ福江市の水の窪遺跡とともに、従前は明瞭な遺跡と資料に恵まれなかった縄文時代晩期とその終末期の五島列島の姿を考える重要な貝塚であるといえよう。

弥生時代前期貝塚中に1点ながら磨製石錐片・方柱状の片刃磨製石斧が2点認められた点を第4点として注目できよう。方柱状片の磨製石斧の1点は欠損していて原状不明であるが他は完形の抉入石斧である。従前の五島列島における大陸系石器の所見は稀少で、中通島の有川町浜郷遺跡5号石棺（18号人骨）にタカラ貝片1点とともに副葬されていた方柱状石斧、福江市大浜出土の磨製石劍と本報例を数える程度である。五島列島は九州本島よりすれば西辺の孤島群でありながら、北九州ないし西北九州文化の域内にある。一方、豊富な海産資源に恵まれると共に、農耕適地が稀少である土地柄によって、弥生時代以降においても新文化への順応はきわめて鈍く、縄文時代の伝統を強く残している。結錐車・鐵布・大陸系磨製石器・金属器・農工器具・支石墓等・弥生文化を形づくる事象の一部が五島列島の南端の地に及んでいることの意味を注目したい。

第5点として、大量の出土を見たサメ歯およびサメ歯製品と石製有孔垂飾について付言しよう。宮下貝塚においては、サメ歯の歯根部を研磨したサメ歯製品18例が出土し、いずれも装身具とされている。同じサメ歯製品は、崎ヶ森洞窟（縄文後期 島根）、山鹿貝塚（縄文後期 福岡）、宮下貝塚（縄文後期 長崎）があり、西北九州から山陰海岸の縄文時代後期遺跡にある程度共通した製品であることがうかがえる。これらのサメ歯製品は「耳飾り」とされているが、出土人骨の耳ないし頭の部位で出土したことがその理由とされているが、これらのサメ歯製品は総数をあげても13点にとどまり、そのうち、耳ないし頭の位置で検出されたのは山鹿貝塚の3例と計3例のみである。一方、「サメ歯製耳飾り」とされている理由にサメ歯の歯根部における穿孔があげられている。

白浜貝塚のサメ歯およびサメ歯製品は縄文晩期および弥生時代前期後半の貝塚で、埋葬に伴ったと確認できるものはない。サメ歯そのものの出土例をあげれば、100点をこえ、サメ歯製品も詳細は後報に譲るとして、約20を数える。エナメル質部のみを焼いた例を「製品」と

すれば30点をこえる例数がある。山鹿貝塚等に見られる「複式」のものは1例にすぎぬが、いずれも穿孔を有せず歯根部を扁平に研磨している。サメの頭骨は殆んど見られないが、いずれにしても大量のサメ歯が、なんらかの用途に加工する目的をもって集められ、貝塚中に遺存したものである。これらサメ歯製品は歯根部を平らにしてあたかも石鎚の形に研磨されており、縦でもって「耳にさげた」とされていることに疑念が生じる。また、穿孔ある山鹿貝塚のサメ歯製品の「孔」の位置も、軸に装着する目的とも考えられる。つまり、漁撈ないし狩猟用の刺突具と考えることが自然であろう。本報のサメ歯製品は、前述の諸遺跡とは時期的には異なるが、疑問点を提示して、本遺跡の注目すべき点の5点目とする。

〈参考文献〉

1. 「宮下貝塚調査報告」賀川光夫 図録篇 長崎県文化財調査報告第7集, 1968 長崎県教育委員会
2. 1に同じ 本文篇 同第9集 1971 同
3. 「水の窪遺跡」正林謙・高野晋司 福江市埋蔵文化財調査報告書第1集 1976 福江市教育委員会
4. 「五島列島の弥生文化」総説篇 小田富士雄 1973
5. 「出雲・崎ケ鼻洞窟遺跡」佐々木謙 ひすい7 1954
6. 「山鹿貝塚」前川威洋 山鹿貝塚調査団 1972
7. 1・2に同じ



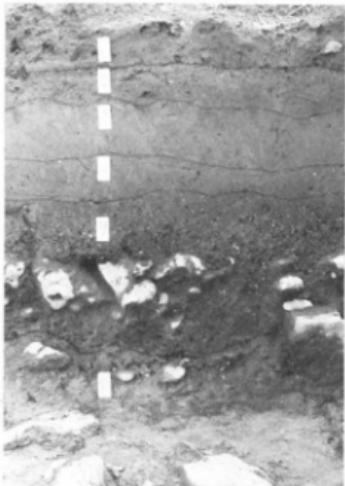
PL. 10 遺跡近景（南から）道路から手前部分は埋め立て地

5. 層序の概況

今次調査地点の基盤は熔岩台地である。全体に北東→南西方向に下向し、A・C区とB・D区の、ほぼ境界線から東（海）側に急没して、縄文後期遺跡の東辺とほぼ合致している。遺跡を包含する各砂層は、この基盤に乗っているが、基盤の傾斜に比較して、傾斜度は緩い。

I～II層は茶褐色ないし黄褐色の砂層であるが後世の擾乱をうけており、一括できる砂層である。III層は、黄褐色の砂層で有機質を含み、弥生時代土器等を若干含むが、破碎状態の小片が多く、後世の遺物をも微量ながら混入しており、整層状態とはいいがたい。IV層は黒褐色の砂質状で、バミスを微量含み、有機質の含有も顕著である。この砂層はA・C区とB・D区のほぼ境界以東（海側）においては豊富な遺物を含む混貝塚となり、白浜貝塚の西限を示している。同時に、後述する縄文時代後期遺跡の東限と、平面的には境を接するかたちとなる。当該地の宅地造成面からの深度は-0.8mから-1.3mに及んでおり、上部には弥生時代前期後半の遺物を含み、下部には縄文時代晚期終末の遺物を豊富に包含するが、自然層としては区分困難である。V層はバミスと小礫を含む黒褐色の砂層であるが、A・C区とB・D区境界付近で急激に東（海）側に没し、ここ以東において、縄文後期遺物の包含は皆無に近い、従って縄文後期遺跡はA・C区とB・D区境界をほぼ東限としていることになると同時に、同期における旧海岸線とほぼ合致することになる。

縄文後期層の下は基盤にのる溶岩疊の層（VI層）であり、疊群の性格については不明である。一方B・D区貝塚（IV層）の下は黄褐色の純砂層となり、今次調査で検出された縄文晚期終末



PL. 11 D区南側土層断面

の埋葬人骨の埋葬場は、この砂層にまで及んでいる。

以上のことを、A・C区とB・D区の層序に關し、模式的に整理すれば、IVa層（弥生前期後半貝塚）—IVb層（縄文晚期終末貝塚）—V層（縄文後期層）となる。また、縄文後期以降、砂丘の発達と拡幅があり、その上に、縄文晚期以後の貝塚が営まれたことが理解される。

縄文時代中期の土器が、後期層の下面において数点認められたが、整層状態をなしておらず、他地点において、縄文中期ないし、それ以前の遺跡が立地している可能性を示唆するにとどまっている。



C区南侧

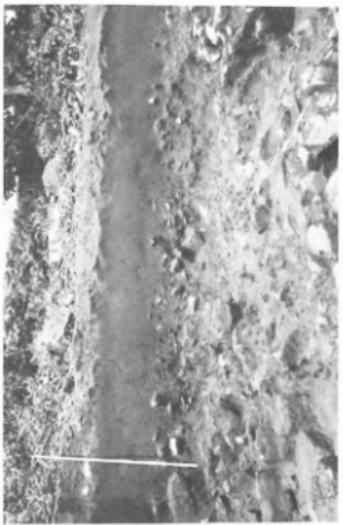


A区西侧

调查区位置序



D区南侧



C区西侧

6. 遺物

出土遺物は土器数約80000点、石器約7000点、自然遺物は獸骨および魚骨を含めて最終的把握をしていないが50000点を越すと思われ、膨大な量に達した。中でも貝塚を形成していたB区・D区における出土量が優位を占め、縄文晚期終末期の遺物が弥生前期中葉から後葉の遺物を凌ぐ。A区は主に縄文後期が主体に出土したが、溶岩疊までの深度が浅くその数は少ない。C区も後期を主体にした遺物で占められ、単純層の感を呈し遺物量は多い。石器類はサヌカイト、黒曜石の剝片類が多く、製品では縦削ぎのサイドブレイド、剝片鏃、石斧、石錘の出土量が多く認められた。自然遺物で目立ったのは鹿の骨類で、イノシシの骨を上回った。動物遺存体および魚類の同定は後日行なう予定であり、その種類については不明である。貝類では大形のアワビ貝が目立ち、他の貝類も大きなものが多く現在の同種は小形化している様相が窺える。完全な同定は終っていないが、種類は少なく量的には多いといえる。

縄文時代の土器

縄文時代に属する土器は調査区の全体から出土しているが、時代によっては明確に区別される。特に後期に属する土器と、晚期および弥生前期に属する出土は区域が分かれる。後期に属する土器はC区を中心とした区域より集中的に出土し、碇砂採取坑で、晚期の土器が集中するD区との接点が分断される。その結果は土器復原を試みた際にも影響となって現われ、割れた断面が新しいにもかかわらず、接合する部分が失われているケースが見られた。

出土した土器の概要は後述する如くであるが、前期の土器と、中期阿高式系を中心とする少數土器の一群があり、後期では磨消縄文と直、曲沈線文の組み合せを主体とした鐘ヶ崎式鉢形土器の系統と、口縁部に短斜線を刻み、あるいは逆「W」字（W字）文を貼り付けた粗製深鉢形土器を中心とした北久根山式土器の系統が主体を占め、その他の土器としては、中間的要素をもつもの、明らかに南九州からの流入を考えられる市来式土器などの、異質の土器があげられる。

前期および中期の土器（PL. 5）

前期の土器はPL. 16-1～4の4点が考えられる。どちらもC区の後期土器を主体とする層からの出土である。前者は口縁部に2段貝殻を押圧して文様を付け、形状はキャリバー状を呈し、塞ノ神式土器に近いと考えられる。3点とも同じ手法の文様であるが、口唇部および反りが若干の違いを見せる。後者は短い沈線を配列したもので、曾畠式土器の系統と思われる。

中期の土器はすべて小破片で、ローリングを受けているものが多い。また出土層位もほぼ上層からの出土である。これは中期の出土層の主体は、調査地点より西側に確認されているので

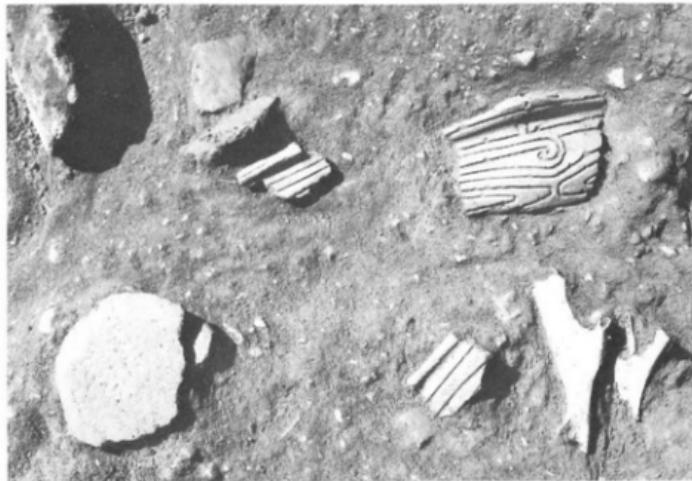
その流れ込みによるものと考えられる。土器の胎土には殆ど滑石が含まれ、色調は灰褐色か茶褐色を呈する。文様では貝殻による文様の土器が1点認められ並木式と考えられるが、他は太い凹線文と太い刺突文が多く、橋状把手のものも1点ある。いざれも阿高式土器系統のものである。

鐘ヶ崎式系の土器

鐘ヶ崎式土器は特徴ある文様で区別すれば、北久根山式土器の出土量を上回った。口縁部が比較的多く、復原を試みたが、張出した胴部以下の無文部分は文様帯と接合することは困難を極めた。しかし同一個体と思われるものも多く見られ、時間をかけて復原できる個体は増えるかもしれない。

文様構成は磨消繩文とそれを区画する平行沈線、および橋状把手の有無、それに橋状把手口縁部分に刺突文を有するものとしないものなどが要素となっているが、細分すればかなりの分類が出来る。ここでは概略で述べるにとどめる。

本貝塚での鐘ヶ崎式土器の代表例はPL.17に示したものであろう。この土器は平行沈線文によって交互に繩文が磨消され、口縁部突起は推定復原で4個有するものと思われ、その突起物を中心に対称的に文様の展開を見る。殆どの鉢形の土器は張出した胴部のすぐ下で文様帯の下限が見られるが、PL.17-27は橋状把手を4個所に有し、やや波状に高くなった部分に刺突が施されている。口縁部と胴張出し部に沈線と磨消繩文が見られ、渦巻状の文様は橋状把手の縦の線に集約され、底部はやや反り気味に平底になる。この土器は復原口径40cm器高28cmを測り



PL. 13 遺物出土状況 (C区V層)

かなり大形になる。器壁は内外面ともに丁寧にヘラ磨きされており、胴部から底部にかけては赤褐色を呈する。また橋状把手と平行沈線の施されている部分にはわずかながら丹塗の痕跡をとどめる。PL.18-29は同じようにコブ状の橋状把手をもつものであり、器形も類似するが、31の方は繩文でなく貝殻縫似繩文が施されている。PL.19-34・35の口縁部も丹塗の痕跡が観察される。PL.20の土器は磨消繩文と沈線を主体にしたもので橋状把手あるいはやや突出した口縁に刺突を行い、その直下に「x」状結節を配したものが多く、PL.17-26に類似したものである。PL.21-51は口径24cmの中形の鉢であるが、内外面とも丁寧なヘラ磨きで仕上げ、灰黒色を呈し、黒色磨研土器の觀がある。PL.22に示した土器は、口縁に「貼り付け」を行い、口唇部には繩文を施し深い刻目を入れ、内側には連続した「V」字状の沈線が刺突文で区切られ、その間に繩文が施されている。胴部にかけての「S」字状の沈線と平行沈線を刺突文で区切った一連の手法と器形は、北久根山式土器と鍾ヶ崎式土器の特徴を備えて興味深い。PL.23-65は鉢形土器である。口縁に2個の山形突起があり、4箇所に半月状の貼り付け突起を2段有する。この突起のうち、山形突起下の貼り付け突起には、下段から上へ2個の空孔がある。そしてこの突起は菱形の沈線と磨消繩文で囲まれる。口唇部と胴部にも磨消繩文が施され、底部は直接的ながらやや反り気味に平底になると思われる。PL.23-66も口径約40cmを測り、大形の鉢形土器になる。口縁は平坦に突出した三角形状の突起を4個有し、その平坦部は「の」字形の渦巻文を中心として、同心円状に沈線が施され、さらに外郭を刺突文で囲まれている。なおこの突出した下には橋状把手を有していた痕跡をとどめる。頸部から胴部張出し部にかけては、沈線および磨消繩文と、それに短く刺突で区切られた沈線文を有し、胴部は曲線的で底部も丸くおきまり、据えつけは不安定である。このPL.23の土器は鍾ヶ崎式土器と北久根山式土器の系統を融合した形で観察できる。

北久根山式系の土器

口縁部に文様が集中し、粗製深鉢形土器を特徴とする北久根山式土器は、PL.24-67の復原土器に見られるように、ゆるやかな波状口縁がやや肥厚し、その部分に棱杉状の文様を刻み、頸部はややしまり、胴部がゆるやかにふくらみ均整のとれた大形の深鉢形の例と、PL.25-69のように横にめぐる2条の沈線をはさみ、上下2段に施文された棱杉文に橋状把手を付けたもの、粗い棱杉文を有し、又は橋状把手をもつもの（PL.26-72～79）の1群と、PL.27-84の斜線文を施し口唇部に「W」字の貼り付けて、その下に橋状把手を有し繩文で施文された土器と、口縁部に「W」字あるいは逆「W」字を貼り付けた粗製深鉢が、文様を有する土器として主体を占める。その他にはPL.28-90の、口縁部に斜線および2条から3条の沈線文の組合せや、PL.29-87の橋状把手をもつものと、PL.29-91の山形突起状口縁に粗い短斜沈線文を刻み「く」字形口縁になり、胴部が丸く張り出す土器がある。PL.29-92は波状口縁に斜線を有し、頸部から胴上部にかけ沈線による文様が描かれ、中央部は渦巻文で区切られる。器壁内



PL. 14 遺物出土状況 (C区V層)

外ともヘラによる研磨が行われ、精製された大形の土器になる。この文様構成の口縁部は北久根山式土器の特徴をひき、胴部は鐘ヶ崎式土器の系統をひいている。

鉢形土器はPL.30の如く、精製された土器に磨消繩文の手法が用いられ、口縁と間のびした頸部から胴部にかけて文様帶があり、直線、曲線が沈線文によって区切られ貝殻疑似繩文と繩文回転によって施文されている。こうして区画された部分はヘラにより磨消され、内面も同様である。口唇部には押圧文が見られ、やや波状を呈するところから曲線のまとまった部分の直上には何らかの貼り付けをもつことも推察される。PL. 31-100は錐鉢状の口の開いた口縁部に「の」字状に刻目を入れ、貼り付けを行い固く焼き縮めたものも見られる。PL. 31-103はキャリバー状に内湾するゆるい波状口縁の土器である。頂点に貼り付けを行い刺突文を施し、その下に浅く弱い沈線を縦に3本いれ左右に浅い沈線をめぐらし、下に貝殻による押圧文を施し口唇にも疑似繩文がつけられている。口唇部に2個ないし3個の穿孔を有する土器がある。これらの土器は穿孔する口縁部を台形状に平坦に張出させ、刺突あるいは繩文回転を沈線曲文で区切って、内外壁面とも丁寧にヘラ磨きで仕上げている(PL.32-107~113)。小型の鉢は器高が15cm内にありミニチュア的要素をもつ。丸く張出した胴部には貝殻疑似繩文(PL.32-111)や繩文回転で施文され、両端は丁寧なヘラ磨きで消されている。

浅鉢は複雑な曲線と貝殻による疑似繩文の文様をもち胴部が「く」字形に折れるもの(PL.33-114)や、黒色研磨土器に類似した口縁の開いた土器(PL.33-115)、頸部がくびれ小型の把手に刺突されたコブ状突起が2個ついたものがあり、器形はよく整えられているものがある。(PL.33-116)

塊状の土器は胴部の部分だけであるが、黒色の精製された研磨土器であり PL.33-118 は 1 条の沈線がわずかに観察できる。

台付の底部は 2 点ほど出土したが、深鉢形になるものと思われる。(PL.33-121・122)、やや内寄しながら広がり、脚端部は縄文回転で縁どられ、磨消縄文が施されている。又やや厚手の脚部はゆるやかな段をもち、端部にかけて浅い凹文が施され、いずれも粗製土器である。

以上の概観は主に有文の土器に限ったが、無文の土器も多く出土した。山形口縁の口唇部に刺突や劍目を入れたもの (PL.34-123)、平坦な口縁あるいは波状口縁をもつが、内外壁面とともに貝殻条痕で丁寧に調整されたものなど (PL.34-124) がある。また厚手の粗製深鉢には条痕と無文土器の一派があるが、これらに共通していることは、貝殻を粒状に碎き混入し、強度を保っている点であろう。

市来式系の土器 (PL.35)

ここにあげた土器は「く」字形口縁と貝殻文を特徴とする南九州型の土器である。125は口縁は「く」字形を呈し方形状になると考えられるが、口縁に施された文様は 4 条の沈線で区画された磨消縄文であり、一部に丹塗の痕跡をとどめる。また貝殻による押し引きと斜行押圧文を口縁に施した土器が見られるが、波状口縁となり内外面とも貝殻条痕で調整されている。また口縁部が短くおさめられ、「く」字形になっている部分に沈線をめぐらし、間を貝殻疑似縄文で施しているものもある。県下における市来式土器の出土遺跡は、口之津町の水月永瀬貝塚 (加津佐貝塚)、諫早市の有喜貝塚、三和町の為石遺跡などで出土しておりいずれも海洋性の遺跡であることに共通性が見いだせる。

その他の土器 (PL.36-131~138)

顔面把手と呼ばれる獸面を思わせる土器の出土がある。赤褐色の色調で胎土焼成も良く、わずかな滑石の混入を認める。山形にもり上った口唇部にも左右対称のモチーフがあり、全体の形狀が不明であるが、中期土器の系譜を引くものであろうか。この種の例は佐賀県西有田町坂の下遺跡出土の顔面把手にも類似している。その他にも異質の土器があり竹崎式土器や南福寺式土器に類似したものもある。

C区V層遺物出土状況

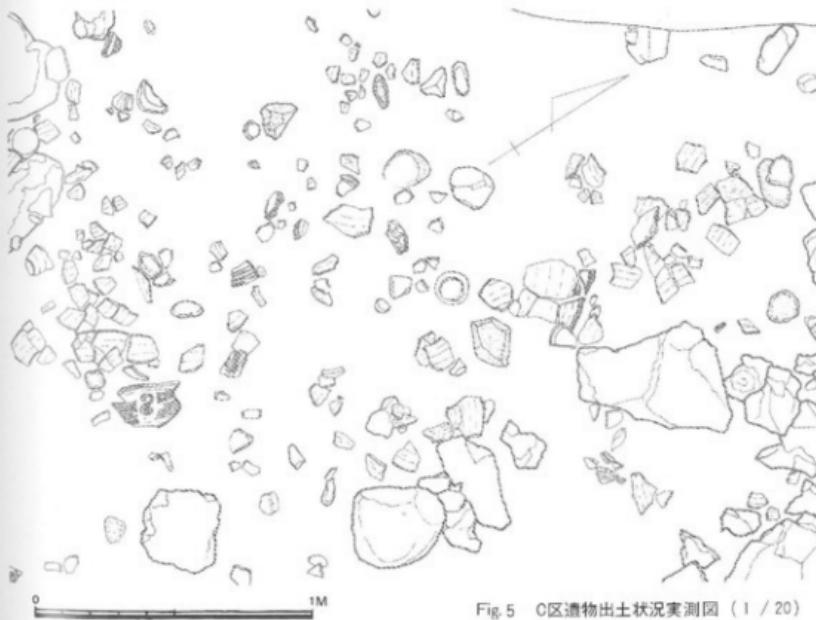
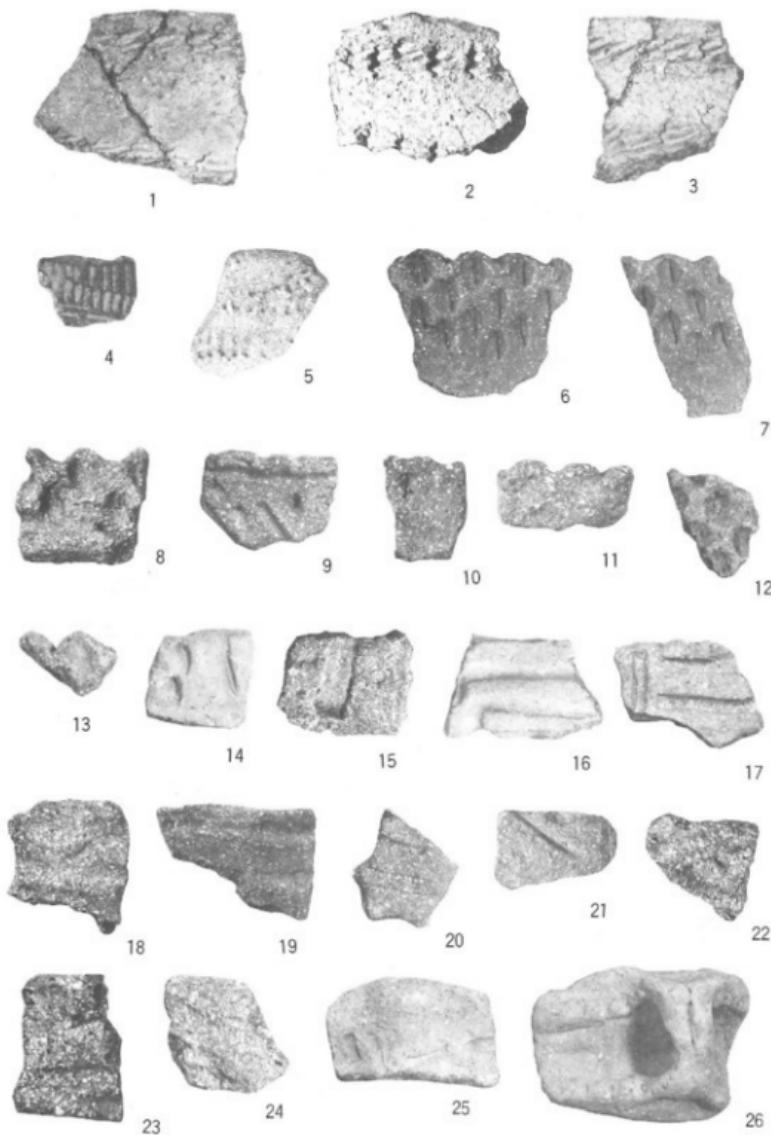


Fig. 5 C区遺物出土状況実測図 (1 / 20)



白浜貝塚出土の縄文前・中期の土器



27

復原器高 28cm
タ 口径 40cm



28

復原器高 28.5cm
タ 口径 40cm

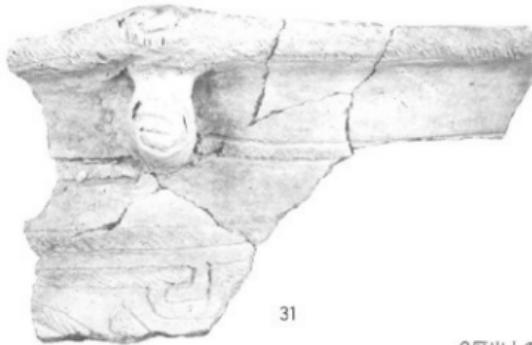
C区出土の縄文後期の土器①



29

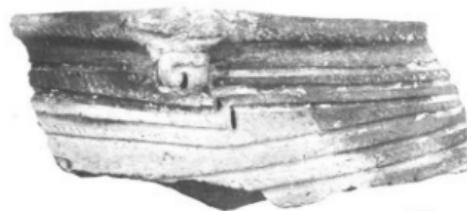


30



31

C区出土の縄文後期の土器②



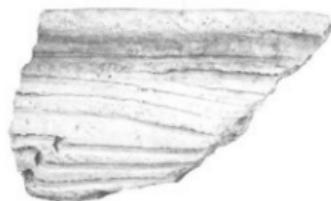
32



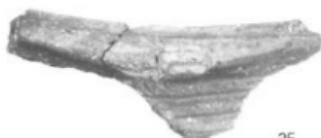
33



34



36



35



37



38



39



40

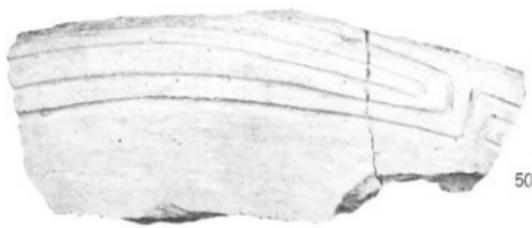
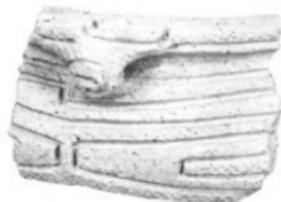


41



42

C区出土の縄文後期の土器③



C区出土の縄文後期の土器④



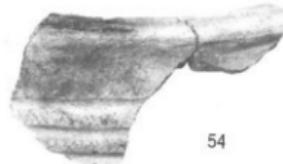
51



52



53



54



55



56



57



58



59



60

C区出土の縄文後期の土器⑤



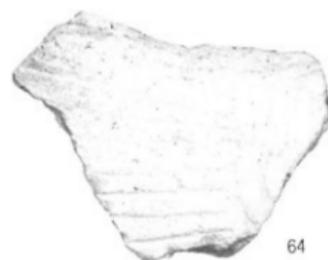
61



62



63



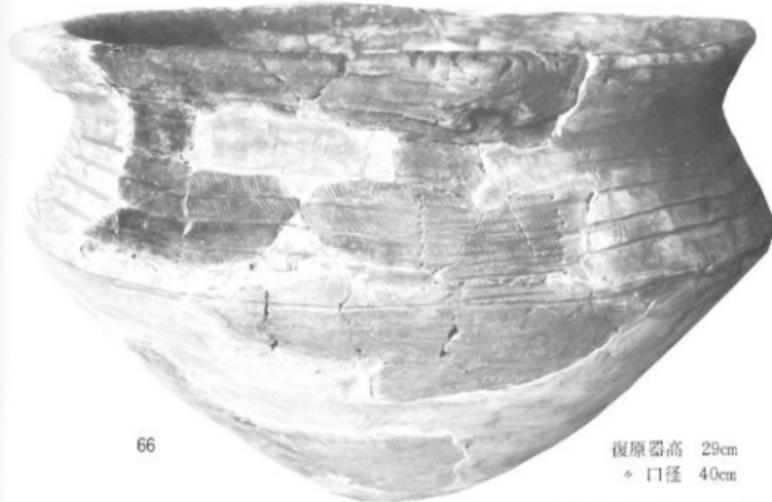
64

C区出土の縄文後期の土器⑥(ここにあげた土器は同一個体と思われる。)



65

復原器高 15.5cm
タ 口径 30cm



66

復原器高 29cm
タ 口径 40cm

C区出土の縄文後期の土器⑦



67

復原器高 35cm
・ 口径 45cm

C区出土の縄文後期の土器⑧



68



69

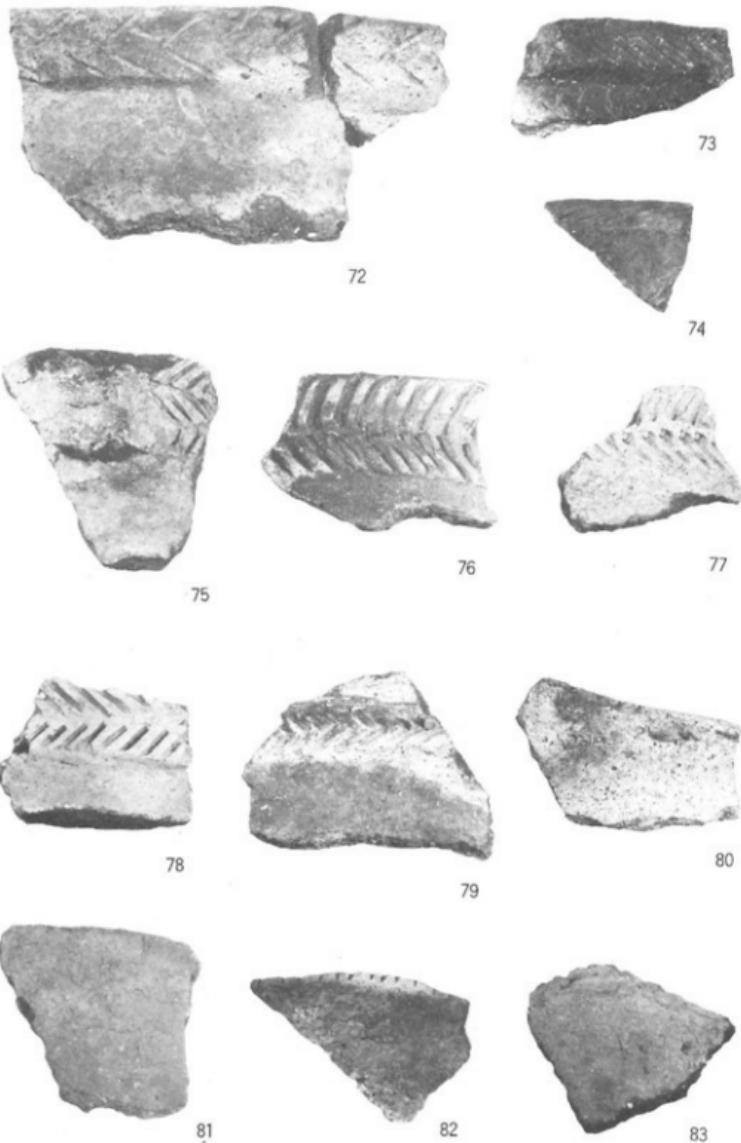


70

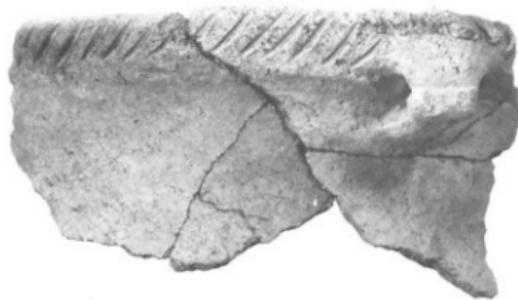


71

C区出土の縄文後期の土器⑨



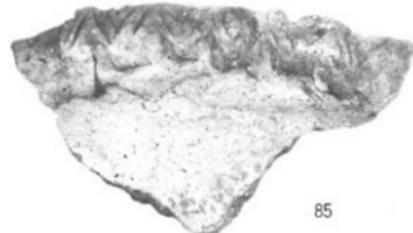
C区出土の縄文後期の土器(1)



84



口唇部の拡大

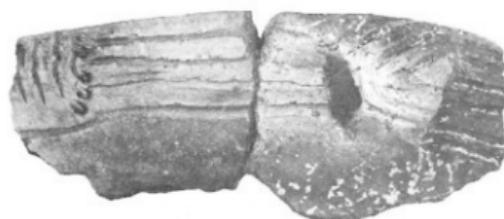


85

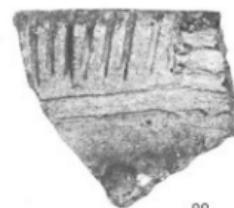


86

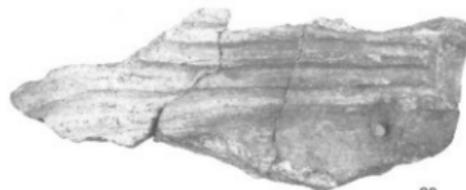
C区出土の縄文後期の土器①



87



88

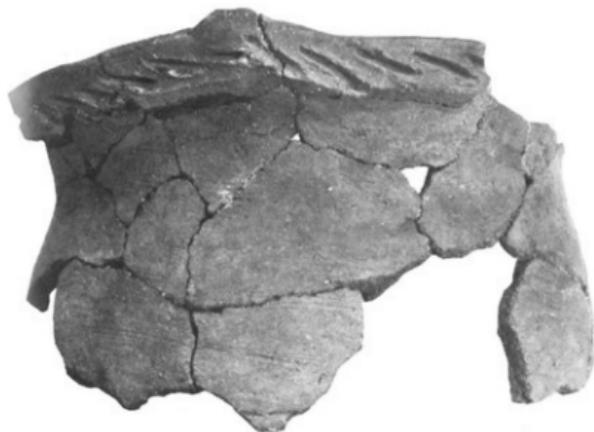


89



90

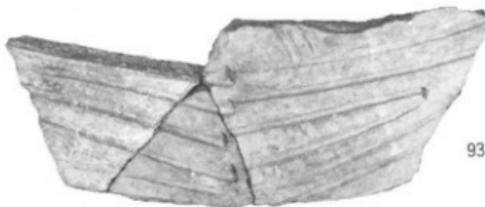
C区出土の縄文後期の土器



91



92



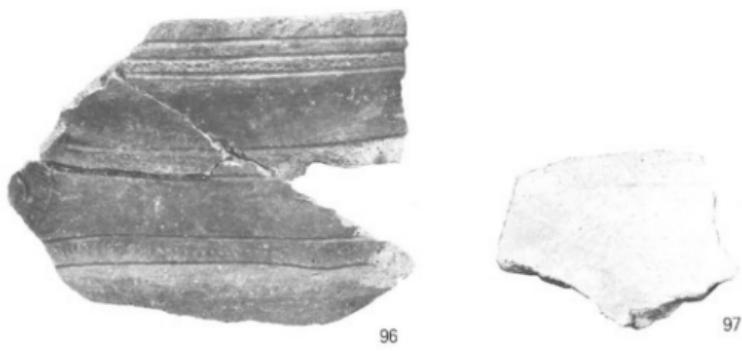
93

C区出土の縄文後期の土器¹³



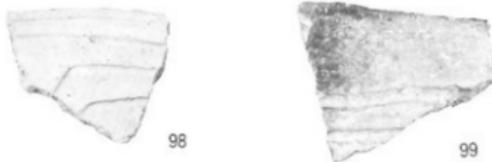
94

95



96

97



98

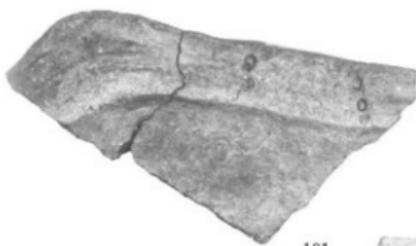
99

C区出土の縄文後期の土器④



100

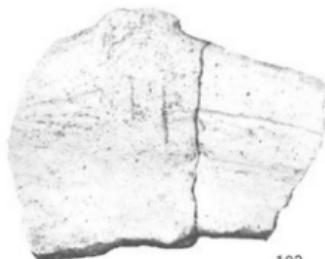
口縁部に貼りつけられた「ぬ」状
刻目文様の拡大部分



101



102



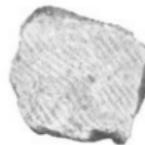
103



104

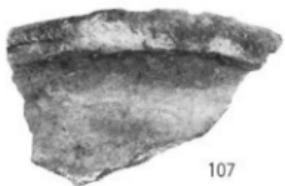


105



106

C区出土の縄文後期の土器⑤



107



108



109



110



111

復原器高 9 cm
タ 口径 12cm



112

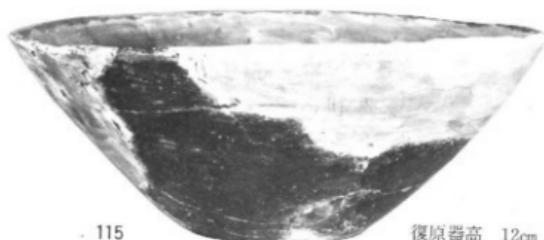


113

C区出土の縄文後期の土器⑥



114



115

復原器高 12cm
タ 口径 32cm



116



117



118



119



120

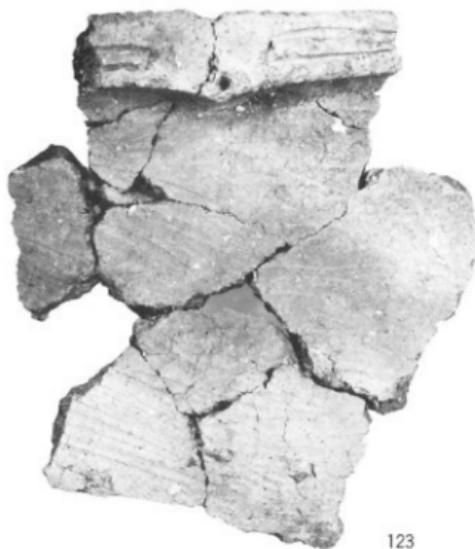


121

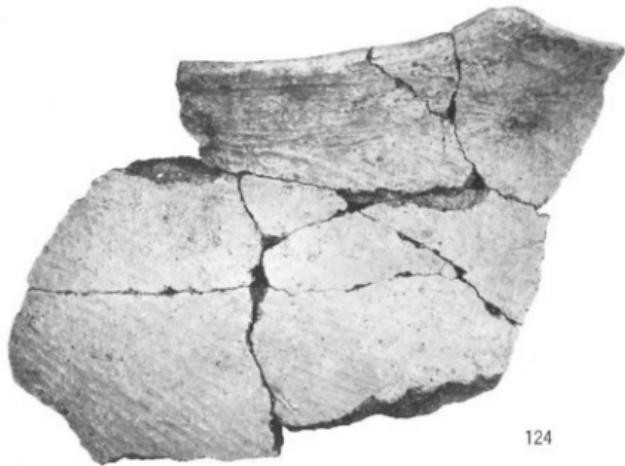


122

C区出土の縄文後期の土器 121・122は脚台部⑦



123

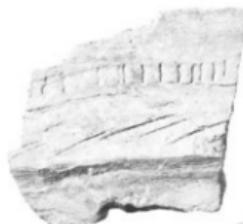


124

C区出土の縄文後期の土器⑩



125



126



127



128



129



130

C区出土の縄文後期の土器¹⁹



131



132



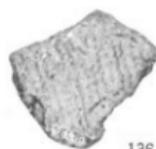
133



134



135



136



137



138

C区出土の縄文後期の土器群



139



141



142



143



140



144

C区出土の縄文後期の土器底部②

縄文晩期の土器

B・D区では多量の晩期土器の出土を見た。粗製深鉢を中心に、大きな破片が多い。精製研磨土器も少量ながら出土した。

白浜貝塚における晩期終末期の様相は、山の寺期から夜臼期に至る土器が殆どであり、板付II式土器出土との層位関係は明確ではなく混在して出土した。この貝塚では九州北部で弥生期の生産体制には入っており、縄文時代の伝統が消えていく中で、まだ強く縄文時代の性格を残している。その特徴は土器の形態によっても窺える。

PL. 40に示した土器は内外の壁面を粗い貝殻条痕で調整仕上げを施し、口縁部は平坦あるいは丸くおさめられ、リボン状の突起を有し、肩に段のつくものもある。胎土には貝殻粉末を混入しているのがこの一群の土器の特徴でもある。この手法は、縄文後期層出土の粗製厚手土器の貝殻粉末混入と同一である。また多くの破片には補修孔と思われるものがある。これらの晩期の出土遺物としては早い時期のものであり、晩期二式の伝統を受け継いだ土器といえる。

晩期の資料は今述べた貝殻粉末混入や貝殻条痕を有する無文土器系と、口縁部および胴部に刻目突帯をめぐらし、さらに口縁、胴部を「く」字形に折り曲げたものに分けられるが、山の寺に見られるような大きな刻目突帯とやや腰が低くなるような土器は若干しか見られない。PL. 41の土器は口縁と肩の部分に刻目突帯をめぐらし「く」字形に折れたもので、特に口縁から肩にかけての間は丁寧にナデを行ない、胴部は粗い条痕やハケ状のもので整形されている。PL. 42-153は「く」字形に折れた剛張出し部に刻目突帯をつけ指によるナデが観察でき、その上部に二重の円と2条の沈線が上下に描かれ、稚拙な絵が書かれていたことも想像できる。PL. 43-154, 155は口縁と胴部に貼り付けの刻目突帯をめぐらすが、全体的に内寄するだけで折れず、退化現象としてとらえることができる。この土器も口縁と胴部の間は丁寧にナデを行っているが、下は粗いハケ状のもので整形している。PL. 43-156~158はミニチュア状の土器で口縁に刻目突帯をめぐらし、指による整形を行っている。PL. 44-159, 160は非常に似通った土器であるが別個体である。いずれも口縁部直下に1条の刻目突帯を有し、口縁は平坦でナデを行い胴部は粗いハケ状のもので仕上げ、内面は外面より丁寧に施されている。形状は全体的に内寄しながら鉢状を呈する。粗製深鉢はバラエティに富んだ貝殻条痕文やハケ目状のものが見られる(PL. 45)。なかでも形状、胎土は晩期土器の特徴を有しているが、内面にハケ目調整を施し、弥生式土器と見分けがつかぬ土器があるが(PL. 45-165), 過渡期なものであろうか。

浅鉢形の土器は殆ど精製研磨の土器である。量的には少ないが形態的にはまとまりを見せていている。PL. 47-171は口縁にリボン状の突起をもち、肩部屈折より口縁部は外反し、胴部はやや丸味をおびる。色調は灰黒色を呈し、胎土には貝殻粉末の混入を認める。PL. 48の土器群は口縁部は丸くおさめられ、内と外に1条の沈線をもつものが多い。頸部は内側に張出し、胴部は丸く球形になっている。色調は赤褐色や黒色をおびたもので、ヘラ磨きによる仕上げ痕をの

B·D区遺物出土状況

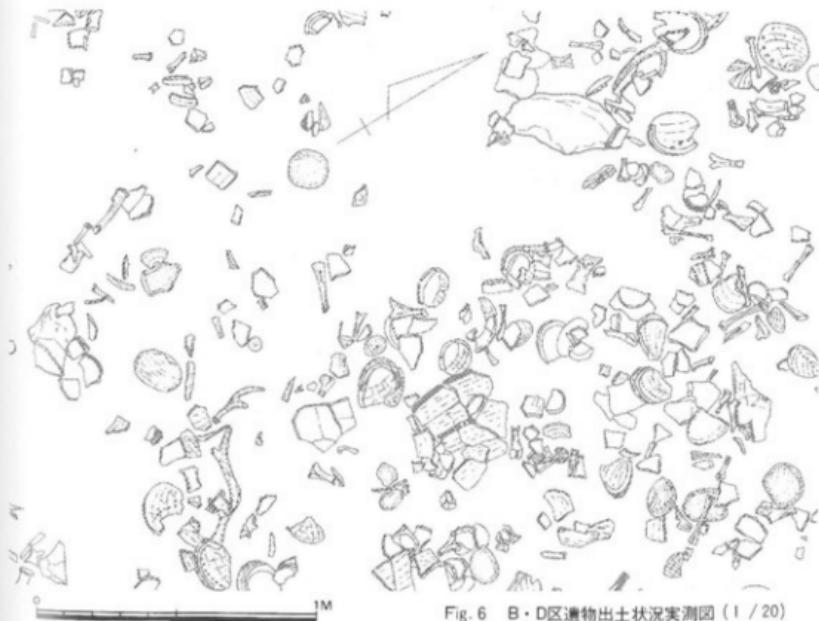
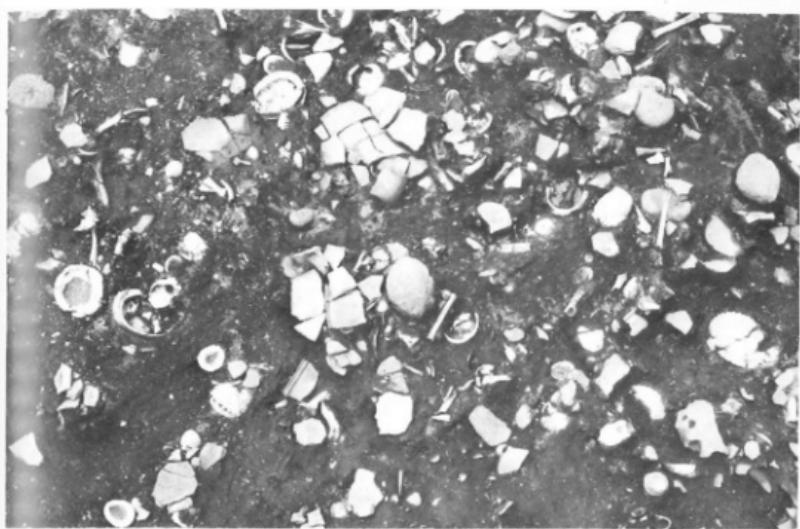


Fig. 6 B·D区遺物出土状況実測図 (1/20)



繩文晚期土器出土状況 (D区)

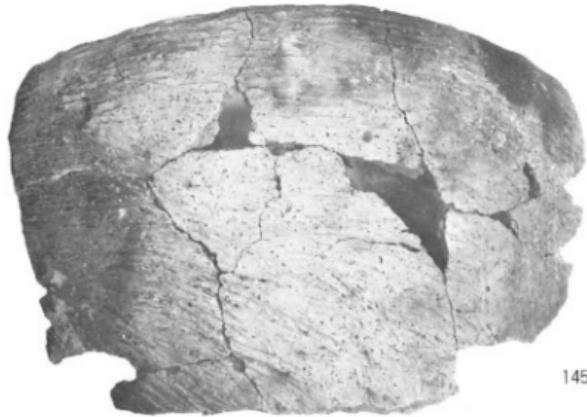
こす。胎土には貝殻粉末を混入したものが多いため、PL.49の土器は口縁から肩部が接近して「く」字形を呈するもので、胴部は直線的かやや内寄する。底部は球形の削をもつものが丸底になるのに対して、円盤形の貼り付け底部になるものと思われるが、確認はしていない。PL.50-190-192は口縁が大きく外反し、190は丹塗である。頭部はナデているが肩部はヘラ磨きである。形状からすると脚台を有するものと思われる。この一連の土器群は弥生期まで引き継がれていくものであり、PL.50-200は精製土器で、彫折した肩部に上下2本の沈線で区切られた中に山形複線文が施されており、夜臼式土器の特徴をもつものである。

その他の土器として注口土器がある(PL.47-172)。注ぎ口の部分であるが、完全にはのこっていない。しかし内側から外側に向かって注口を有している。内外ともヘラ磨きによる仕上げが行われ、貝殻粉末を混入した精製土器である。

晩期の土器はその終末的様相から晩期三式である夜臼式土器を中心としたものであり、形状から考えると晩期II式の伝統をもつもの認められ、それは浅鉢の黒川式土器の系統にみられる。また終末期の下限は板付II式との関係など過渡期的な現象も見られ、今後の考察の問題点としたい。

〈参考文献〉

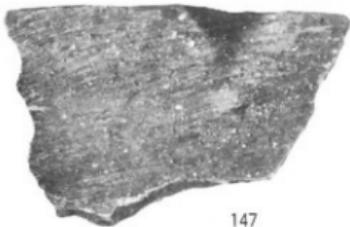
1. 「肥前国有喜貝塚発掘報告」浜田耕作他 長崎県史跡天然記念物調査報告5 1925
2. 「宮下貝塚調査報告」賀川光夫 図録編 長崎県文化財調査報告第7集 1968 長崎県教育委員会
3. 「縄文後期文化の九州」乙益重隆・前川威洋 新版考古学講座3 1969
4. 2に同じ 本文編 同第9集 昭和46年間
5. 「沖ノ原」坂本経亮・坂本経昌 天草の古代 1971
6. 「山鹿貝塚」永井昌文他 山鹿貝塚調査団 1972
7. 「北久根山式土器の設定」坂田邦洋 考古学論叢3 別府大学考古学研究会 1975
8. 「坂の下遺跡の研究」佐賀県立博物館調査研究書第2集 1975 佐賀県立博物館
9. 「黒橋」熊本県文化財調査報告第20集 1976 熊本県教育委員会
10. 「坂付」福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 1976 福岡市教育委員会
11. 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第4集 春日市・柏田遺跡の調査 1977 福岡県教育委員会
12. 「礎石原」百人委員会埋蔵文化財報告第7集 1977 百人委員会
13. 「九州縄文文化の研究」前川威洋 前川威洋遺稿集刊行会 1979



145 (1 / 3)



146



147



148

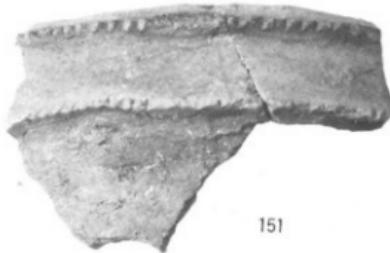
縄文晩期の土器①



149



150



151

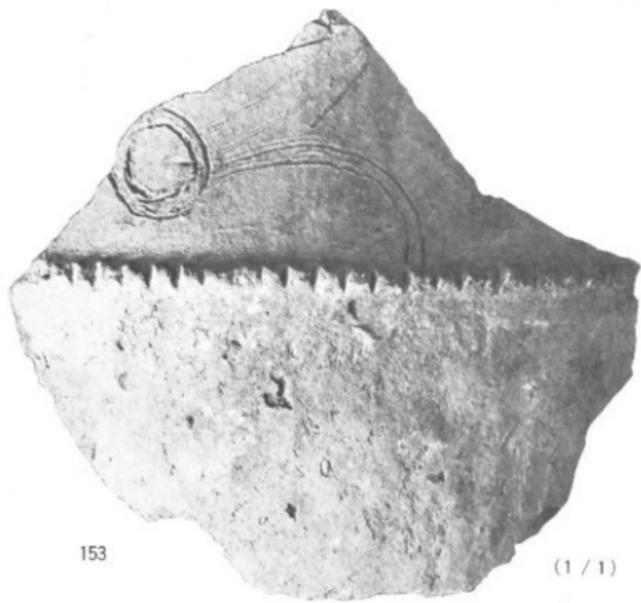
縄文晩期の土器 ②



152

(1 / 3)

線刻文様を有する刻目突帯文土器



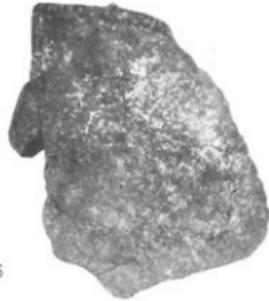
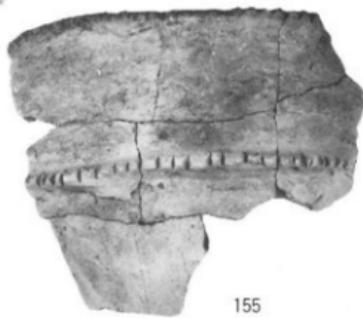
153

(1 / 1)

縄文晩期の土器③



(1 / 3)



縹文晚期土器④



159



160

縄文晩期の土器⑤



161

外面には輪郭の手法による輪郭がはっきり認められ、内面には端正な貝殻条痕が施されている。

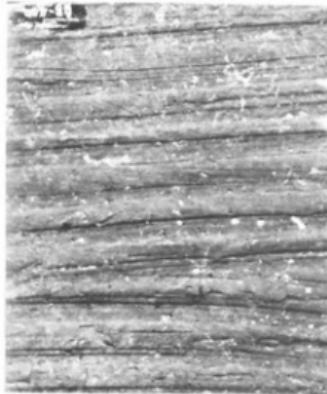


162



163

各種の唇面調整痕、貝殻による施文が多いが、
微細なハケ目状の施文も見られ、寄生式土器
との関連を示す資料である。



164 (1 / 1)



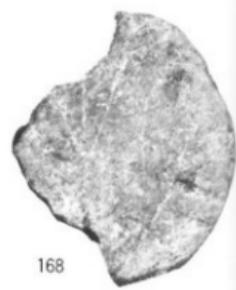
165 (1 / 1)

縄文晩期の土器⑥

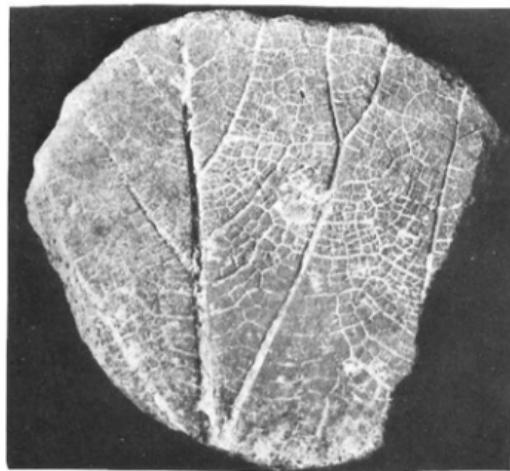


166

(1/1)



168



167

(1/1)



169



170

木の葉文を有する縄文晩期の土器底部



171

精製土器にも胎土に貝殻碎片の混入
が認められる。



172

注口土器



側面

縄文晩期の土器⑧ (1 / 1)



173



174



175



176



177



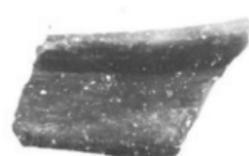
178



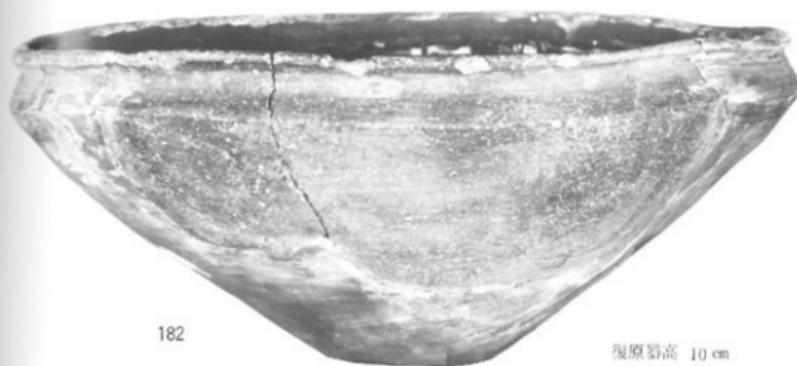
179



180



181

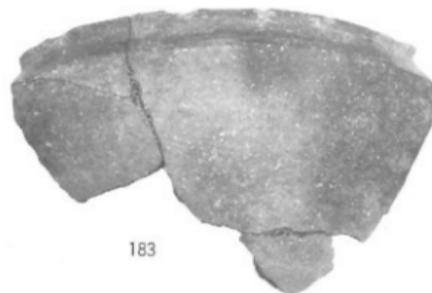


182

復原器高 10 cm

タ 口径 23 cm

183の復原土器



183



184



185



186

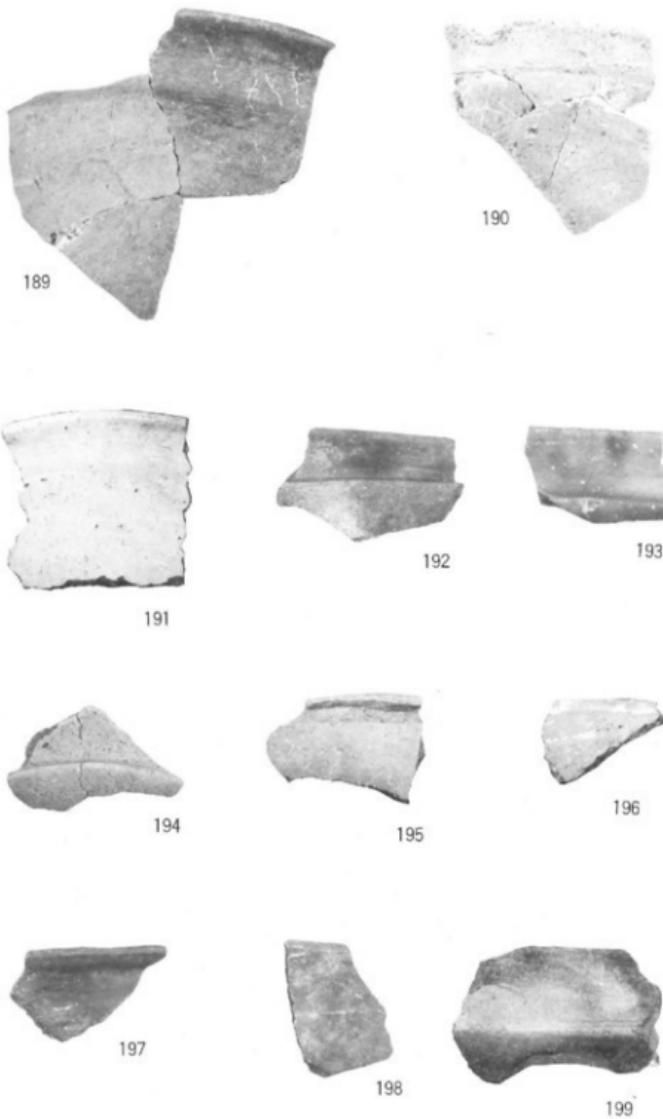


187



188

縄文晩期の土器 (3)



縄文晩期の土器 II

弥生時代の土器

弥生式土器は、前期中葉板付II式を中心に出土し、出土地点はややB区よりに集中している。粗製壺形土器が多く、壺形の土器もみられる。板付I式は確認されていないが、それに近いものは若干見受けられる。

PL.53に示した土器は一部を欠損しているものの、ほぼ完形品である。口径17cm、高さ13cmを測る。口縁は内側に斜行し平坦である。口縁から胴張出し部にかけては、ゆるいふくらみをもち、その部分には縦に暗文が施され、口縁部近くは横ナデである。暗文部には、その上から櫛齒状のものによる引っかきを斜行させている。さらに胴張出し部はわずかにしまり、貝殻による刻目突帯文を施し、ここから底部にいたる部分はヘラで丁寧に磨かれている。底は貼り付けの高台になっており高さは2cmである。内部は約1.5cm幅単位の粗いハケ状のもので、口縁から胴にいたる部分は横方向に、底にいたる部分は自由に調整仕上げしている。胎土は微細な雲母を含み、精製された土器で、上部は暗褐色、下部は茶褐色を呈する。時期的には板付II式に伴うものであろうが断定しがたく、今後類例の増加に期待したい。PL.54—201、202は口縁部に刻目突帯を有し、器暁はハケ状のもので仕上げてある。胎土は晩期の土器に似るが、過渡期にあたるものと考えられる。205、204も口脣部近くに刻目を施し、やや口が反る程度のもので、板付I式に近いものとしてあげた。PL.55にあげた土器も、1条あるいは2条の刻目突帯を有し、肩部から胴部にかけてやや弯曲する。205を除いては晩期の過渡的なものであろう。PL.56—210は肥厚した口脣部に貝殻による刻目を入れ、外反しながら胴部が張出し、貝殻による刻目



PL.51 弥生前期遺物出土状況（B区IVB層）



弥生前期遺物出土状況

がめぐる「く」字形に屈折した變形土器であるが、口縁だけをみると壺の形状と間違う程である。頭部から胴張出し部にかけては、細かいハケ状のもので仕上げ、胴部から下は条痕が見られるが、内壁は外面と逆に仕上げられている。PL.56-211は口唇部および口縁部に刻目を入れ、さらに肩の部分に1条、張出した胴部に1条、細目の刻目を入れている。口縁はやや外反し、胴部はゆるく張り出す。胴より上は横ナデであるが、下は粗いハケで仕上げられている。PL.57は外反した口縁に刻目を入れ、口縁下部に1条ないし2条の沈線が入れられ、ハケによる仕上げが内壁の上部と外面全体に行われている。PL.58のものは口縁に刻目を有するものと無いものがあるが、口縁部の反りが直角に近い形状を示している。これらに続く土器としてPL.59の土器群がある。口縁が肥厚し、刻目を施しさらにその下に1条あるいは2条の刻目突帯文を有する。なかには口縁断面が三角形になる鬼ノ甲式土器と思われるものもあり、PL.60にあげた、口縁がやや間のびし、胴部の張出しが上方に來た前期後葉の土器もみられ、226の白っぽい胎土をした土器は口縁が平坦になり鉢状になるもので、時期的に新しくなるのかもしれない。PL.61の鉢形土器は精製で口縁がやや開き、頭部はしまり胴部はゆるく折れている。

底部は円盤貼り付けの甕および壺につながるものがあり、ハケ目を有するものは直線的に平底になる。脚台は1点出土したが、浅い刻目突帯がめぐり丹が塗布されている。

壺は口縁と文様を有する土器に限ったが、量は多かった。殆どの口縁は黒色研磨の精製土器で、口縁肥厚して段のつくものと、肥厚しないものがある。PL.63に示した口縁は板付II式に伴うものであるが、複線山形文を有するものや口縁内面や外面全体に丹の塗布されたものがある。PL.63の土器は壺の胴部に文様の施されたものであり、やや乱れた重弧文や山形複線文、羽状文あるいは有軸羽状文が見られるが、全体の形狀は不明である。文様の端正さからすると板付II式に伴うものである。

弥生式土器は先にも述べたが、板付II式土器を中心である。貝層中よりの出土が多かったが、層序をはっきりわけることはできなかった。このことは白浜貝塚においては、縄文晩期から弥生期にいたるまでの程度の共存関係があり、生産性の基盤とも絡み、I式文化よりII式文化が一度に受け入れられたと考えられる。



200



拡大

器高 13cm

口径 17cm

弥生前期の土器 ①



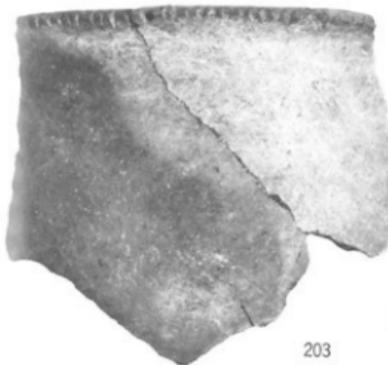
201



202

縄文晩期終末から弥生前期にかけての過渡期的な土器と思われ、胎上、焼成は晩期のものと区別が出来ないが、ハケ状のもので仕上げをしており、形状も弥生的になっている。(上)

口縁部がやや外反し、刻目が施されており、板付I式土器に近いものである。(下)



203



204

弥生前期の土器(2)



205



206



207



208



209

弥生時代の土器③)



210



211



212

弥生前期の土器④



213



214



215

弥生前期の土器⑤



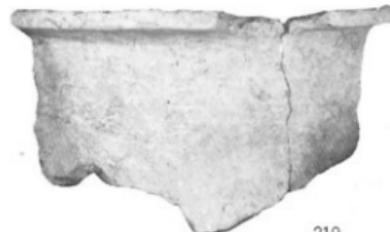
216



217



218

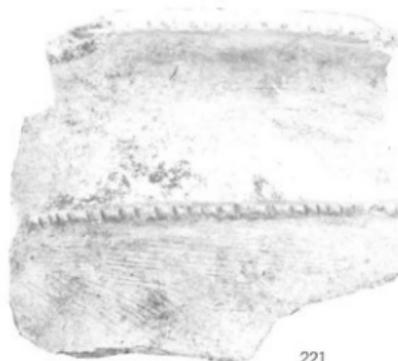


219

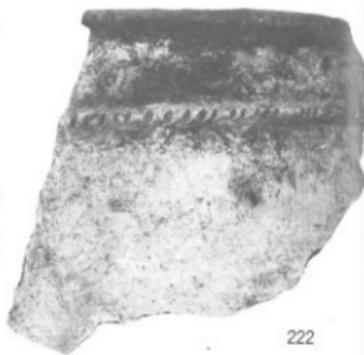
弥生前期の土器⑥



220



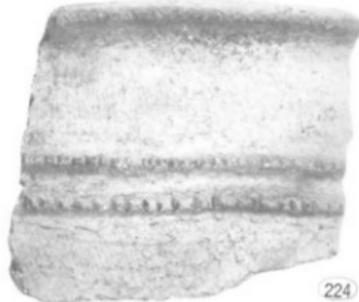
221



222



223



224

弥生前期の土器(7)



225



226

弥生前期の土器(8)



227



228



229



230

弥生前期の土器(9)



231



232



233



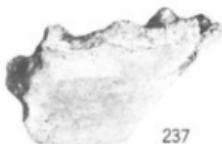
234



235



236



237

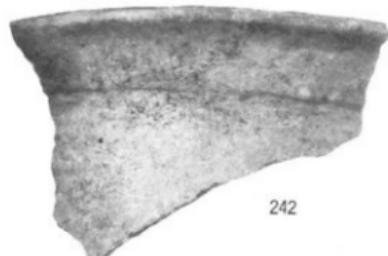
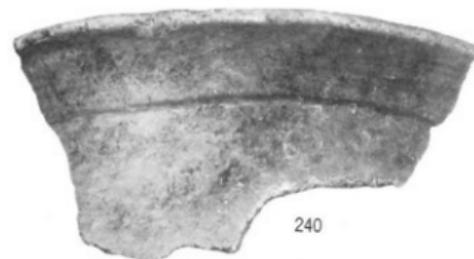


238

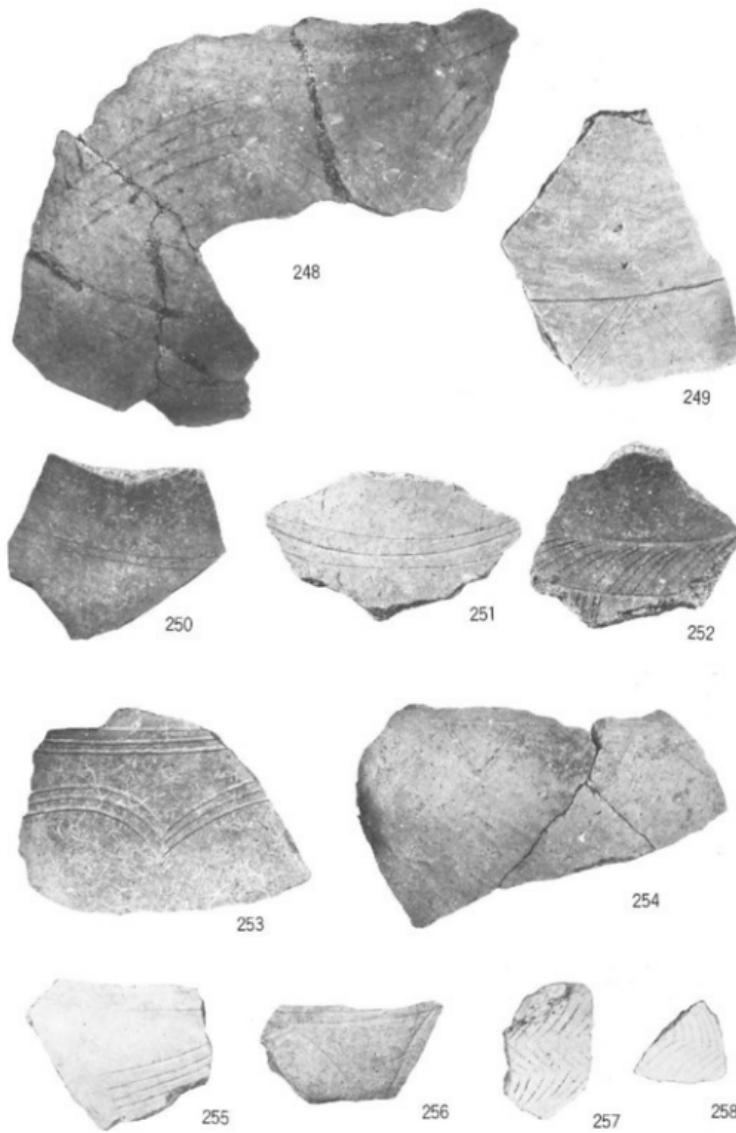


239

弥生前期の土器⑩



弥生前期の土器①



弥生前期の土器②

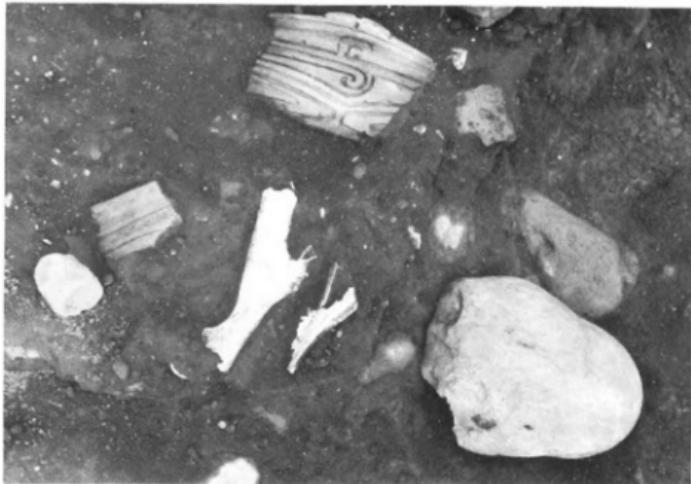
石 器

出土した石器のうちC区より出土した遺物は縄文時代後期に伴うものといえる。またB・D区における石器はIV層より上から出土したものについては、晩期および弥生前期に属するものといえる。図版に示した遺物は出来るだけ調査区ごとに分けたが、異形石器や石鏃に属する少量出土した石器は出土区ごとに分けなかった。

石器は磨製石斧・打製石斧・尖頭状礫器・礫器・石錐・磨石・敲石・石鏃・剝片鐵・つまみ形石器・刃器・搔器・石錐・石匙・その他異形石器や石製装身具の出土が見られた。これらの石器の中で、石鏃や刃器類は殆ど黒曜石が用いられ、搔器類はサヌカイトが用いられている。この石材の原産地は下五島においては発見されていないが、大小の旧火山が多い地理的条件から将来必ず発見されると期待している。

PL. 67に示した石器はすべてC区における出土であり両面から研がれている。小形の扁平片刃石斧も9・10を含めて3例認められる。石質は同定していないのではっきり言えないが、蛇紋岩や安山岩質のものがある。PL. 68-17~19は石斧の未成品であるが、原石はかなり大きなものを使用している。

礫器はPL. 69の尖頭状礫器とPL. 70のチョッパー形の礫器がある。最近ではこの種の礫器を認めた遺跡は県下で30箇所近くに達し、特に弥生時代後期の遺跡では1ヶ所から100点を越えている例も見られる。礫器の出現は縄文時代前期に一部みられるが、中期から量は増える傾向にある。重量も普通400~500gぐらいであるが、PL. 70-32は1.6kgと大形のものである。用



PL. 65 磨器出土状況 (C区V層)

途については貝類の捕獲や調理が考えられる。特に内湾性の所ではカキ類の採れる所に多く、外洋性の遺跡ではアワビなど大形貝類の棲息地に接した所に出土する。

PL.71にあげた石器は尖頭状石器である。最近では「石錐」の名称が与えられ、西北九州における海岸部の遺跡からの出土例が多い。特に田平町所在の「つぐめの鼻」遺跡では多量の石錐の出土があり、形態的分類が行われている。また用途については海棲性哺乳類や大形魚類を捕獲対象とすることが想定されている。白浜貝塚でも鯨、イルカ、サメなどの自然遺物が確認されており、容認できる。ただここに示した石器はあまり鋭利な形態はしていないが、石錐や骨角器などと比較すると、かなりの強度に耐えられると考えられる。PL.72や73の石器はサヌカイト製である。PL.72-52・53は石錐の上部を欠失したものと思われ、54-57は尖頭状石器の機能を持ったものである。60-62は錐状に一角を尖らせたもので、用途については不明である。その他の石器は縦剥ぎあるいは横剥ぎの攝器で粗い剝離で刃をつけたものが多い。PL.73-82・83は大形のサヌカイトであるが不定形な方向から剝離が行われ、石錐と考えられる。

石錐はPL.74-77に示したもので、総数は30点を越えC区出土のものが多い。平均重量は約400gである。石質は安山岩質のものが殆どを占める。形態は両端を打ち欠いたものであるが、比率からすると、錐型と横型に区別される。

石錐はPL.78に示したものがすべてである。サイドブレードまで含めると数的には増える。県下における石錐出土地は30個所を越すが、近接した富江町女鬼遺跡でも多く採集されている。調査における出土資料は、C区A区を主体とした後期が多い。鋸齒状の錐も鋸歯先ということで示した。石質は黒曜石を利用している。

石錐および剝片錐は一括して概略するが、A、C区層のものと、B、D区層のものは形態分類からも区別はつかない。概略を述べれば、形態的には①基部にわたぐりを有し、その抉りも深く、逆剥の部分が内彎し、断面はレンズ状のふくらみを呈するもの、②全体的に正三角形状に近く、基部はゆるい孤状になり、断面がうすくなるものに大別されるが、後者の方に破損品が目立つ。また剝片錐は、①不定形な剝片を利用し、肩に張りを持たせたものと、②あきらかに縦剥ぎの棱線を有し、刃器状のものを利用した鋭利な一群に大別される。

つまみ形石器はPL.81-206-211とPL.85-358-361だけであり、前者は確実に後期の層からの出土、後者は晩期層からのものである。各地における出土例は縄文後期中葉からの出土例が多いようである。

その他の石器では、錐や石匙などがあるが、PL.85-366のような黒曜石製双角状石錐とも呼べる性格不明の異形石器がある。

剝片石器もかなりの量出土した。なかでも縦長剝片の側縁部に使用痕、あるいは加工痕を認めるものなど、一般的に言われる「刃器」として取り扱ったが、人為的なものかどうかの判断はあとに譲る。刃器は大別すれば、縦長で2本の棱線を有するものと、1ないし2本の棱線を有し先端が尖がるもの、横剥ぎでやや形が不安定なものに分けられ、すべて良質の黒曜石が用

いられている。

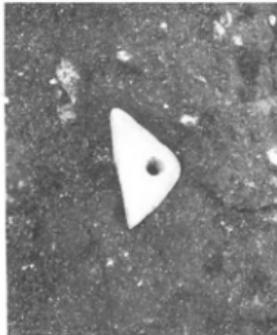
石核あるいは残核と呼ばれるものは、PL. 89-476~478だけ示したが、明瞭な石核といわれるものは少なく、むしろ不定形に剥離を行い、残核と呼ばれる方のものが多く見られる。

確実な弥生時代に属する資料として、方柱状の抉入片刃石斧2点と、扁平な抉入片刃石斧がある。両者とも大形のものではないが、仕上げによる擦痕が鮮明である。(PL. 90-479~481) また鉈刀状の磨製石斧も半欠品ではあるが2点認められる。

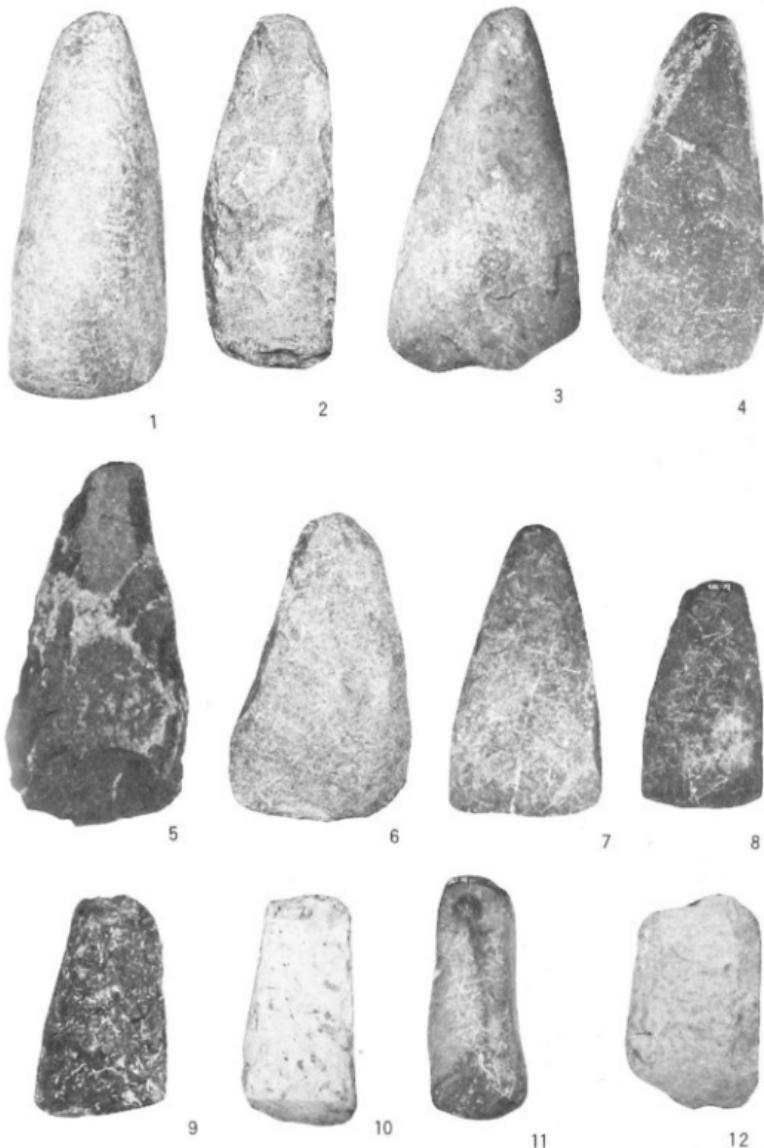
PL. 90-482は磨製石鎌の半欠品である。断面はうすい菱形を呈し、中央棱線としのぎはよく観察される。これら一連の大陸系磨製石器は、五島列島においても早い時期に受け入れられており、出土例もきわめて限られた稀少なものといえよう。

石製装身具

装身具は貝製、骨製と石製が認められたが、石製装身具は7点を数えた。しかし2点は未製品である。時期的には板付II式に伴うものと思われる。写真はカラーで示したもので、三角形状のものに全面線刻を施し、両面とも横の線と縦に1本入れた規則性をもっている。穿孔も両面から行われており、石質は瑪瑙である。またやはり瑪瑙であるが、自然の小角礫に穿孔を両面から施したものもある。瑪瑙製はこの2点の他、穿孔した部分の一部を欠いたものと、全面を研磨して長方形に整えたものがあるが、穿孔されておらず未製品である。蛇紋岩製の細長い扁平な石を全面に研磨して端部は丸く仕上げ、穿孔に刻目を入れているもの、石質は不明だが、ややふくらみを持った隅丸の方形に研磨整形した穿孔を施したもの、滑石に似た岩質のものを三角錐に整え、先端部を平担に磨き、穿孔途中の未製品がある。これらの石製品はすべて穿孔を持ち歪曲の性格を持つものである。今後は石質の同定と原石のルートを究明することを課題としたい。



PL. 66 石製装身具出土状況、左C区IV層・右B区IV層



C区出土の磨製石斧（縄文後期）(1/2)



13



14



15



16



17

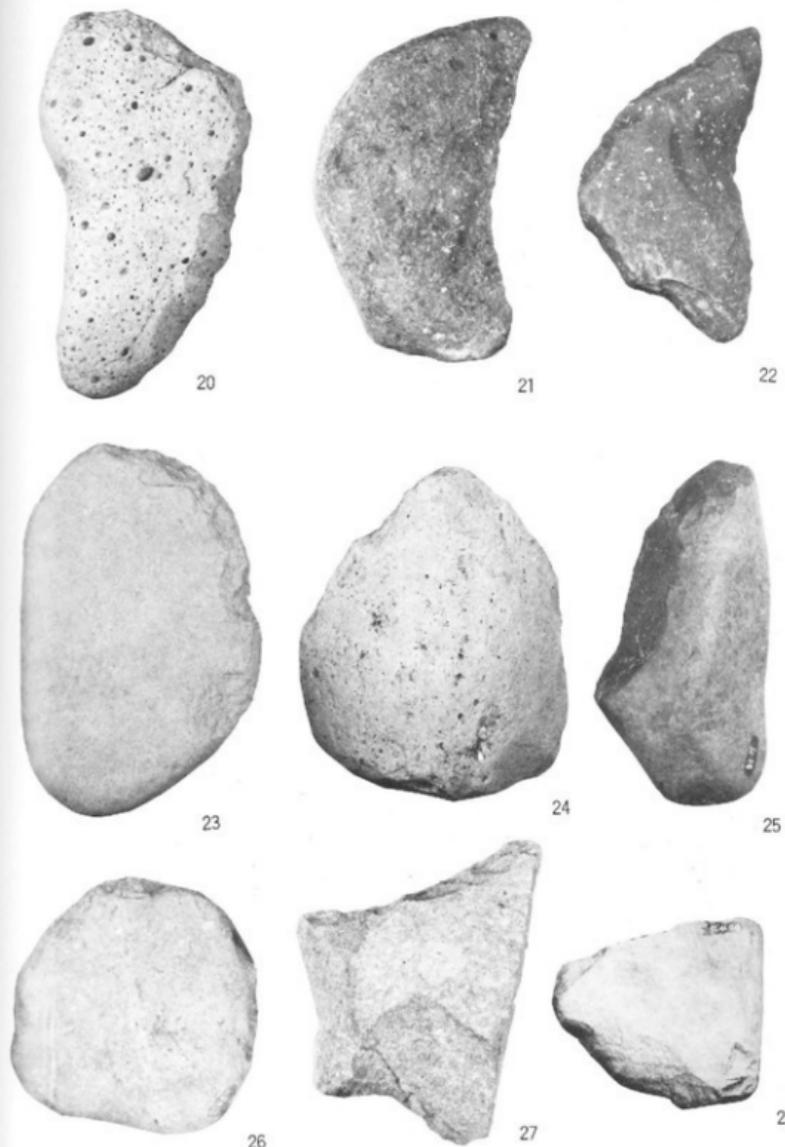


18

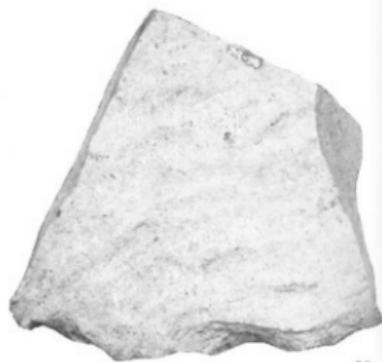


19

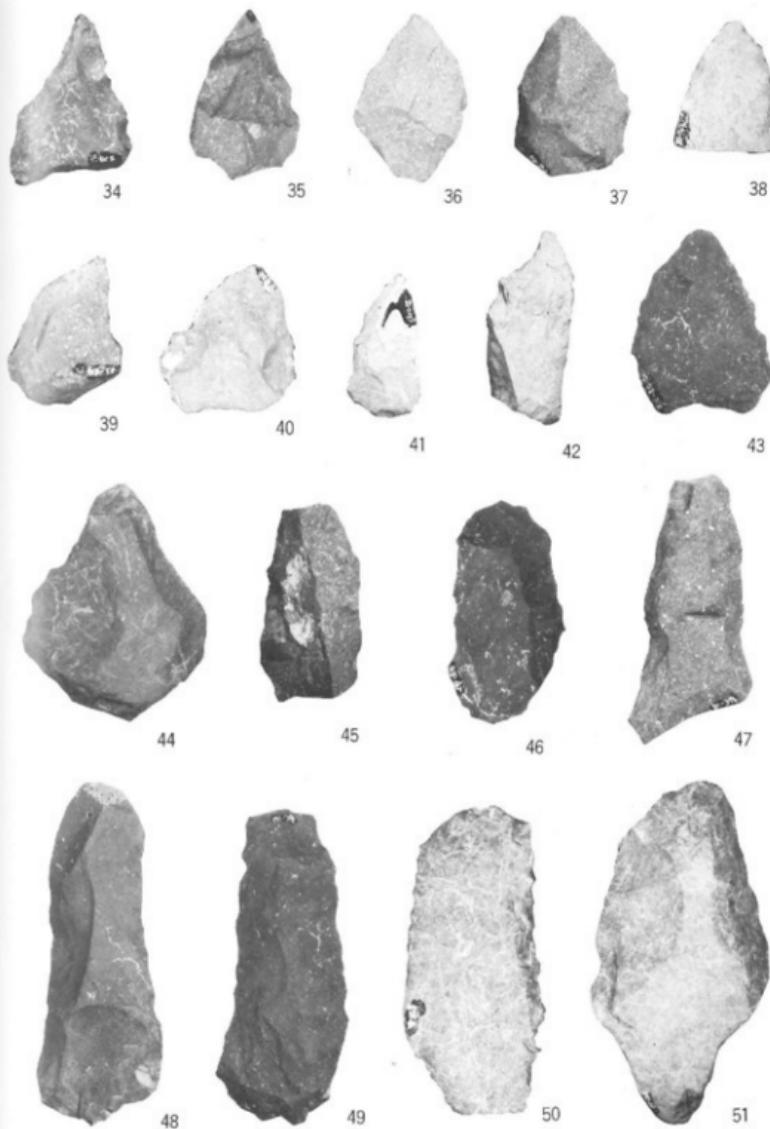
C区出土の石斧および未製品 (17・18・19) (1/2)



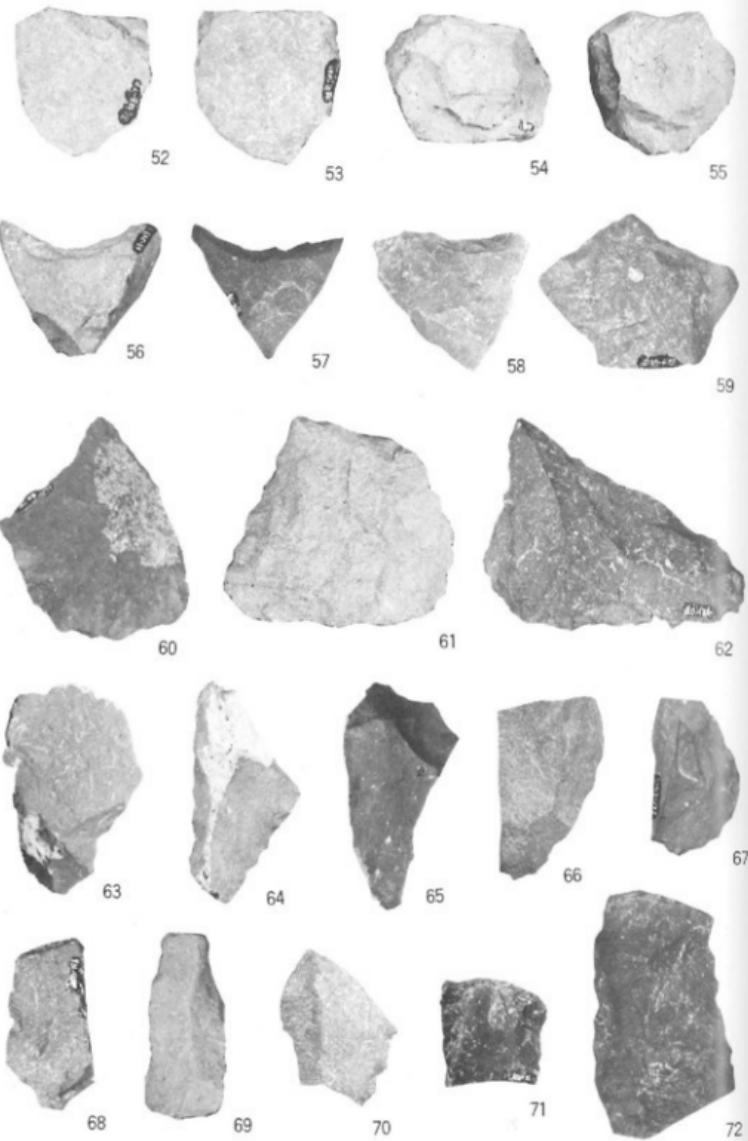
C区出土の礫器 (1/2)



C区出土の櫛器 (1/2)



尖頭状石器（石錐）(1/2)



サヌカイト製石器 (60~62) は尖頭器 (1/2)



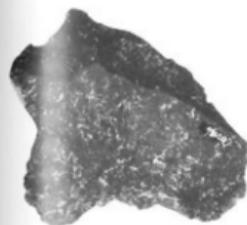
73



74



75



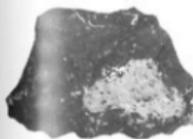
76



77



78



79



80



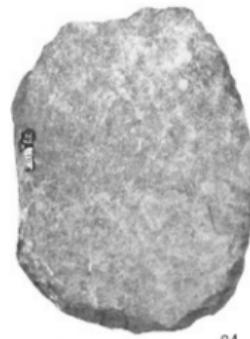
81



82



83



84

サヌカイト製器および石核 (82・83) (1/2)



85 (350g)



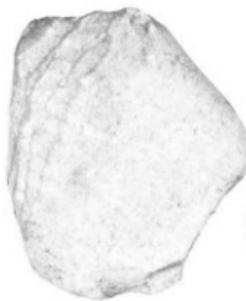
86 (250g)



87 (300g)



88 (310g)



89 (320g)



90 (220g)



91 (380g)



92 (380g)



93 (280g)

石 鍾① (1/2)



94 (360g)



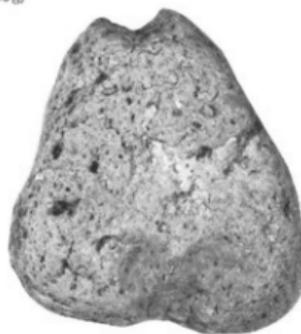
95 (680g)



96 (300g)



97 (610g)



98 (640g)

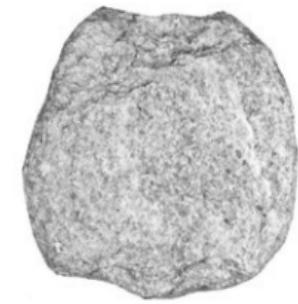


99 (560g)



100 (580g)

石 錘② (1/2)



101 (450g)



102 (500g)



103 (340g)



104 (630g)



105 (300g)



106 (380g)



107 (320g)

石 鐘 ③ (1/2)



108 (350g)



109 (300g)



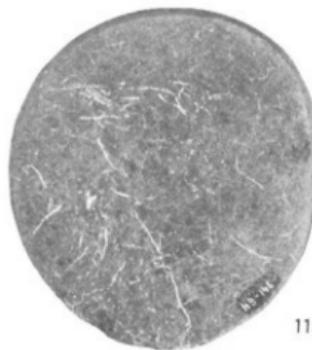
110 (580g)



111 (690g)

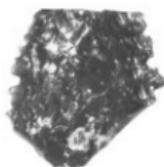


112

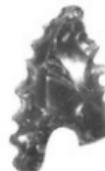


113

石錘④と磨石 (1/2)



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130



131



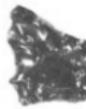
132



133



134



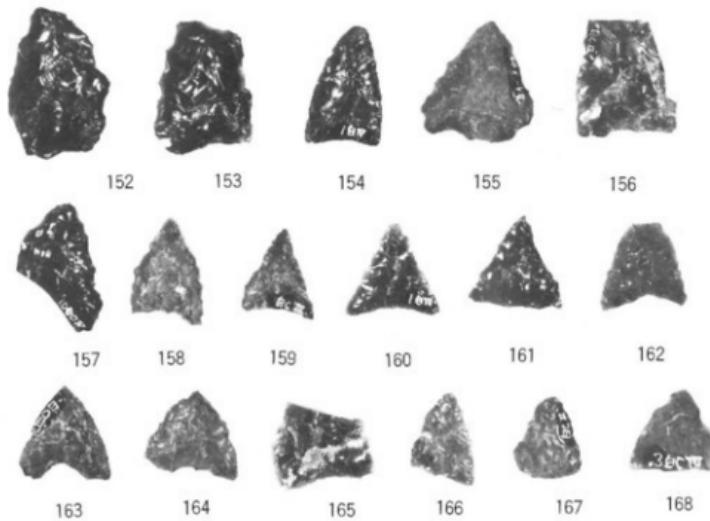
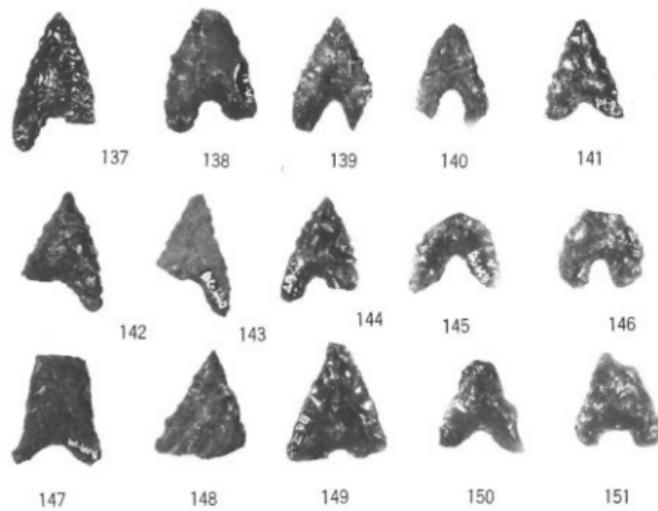
135



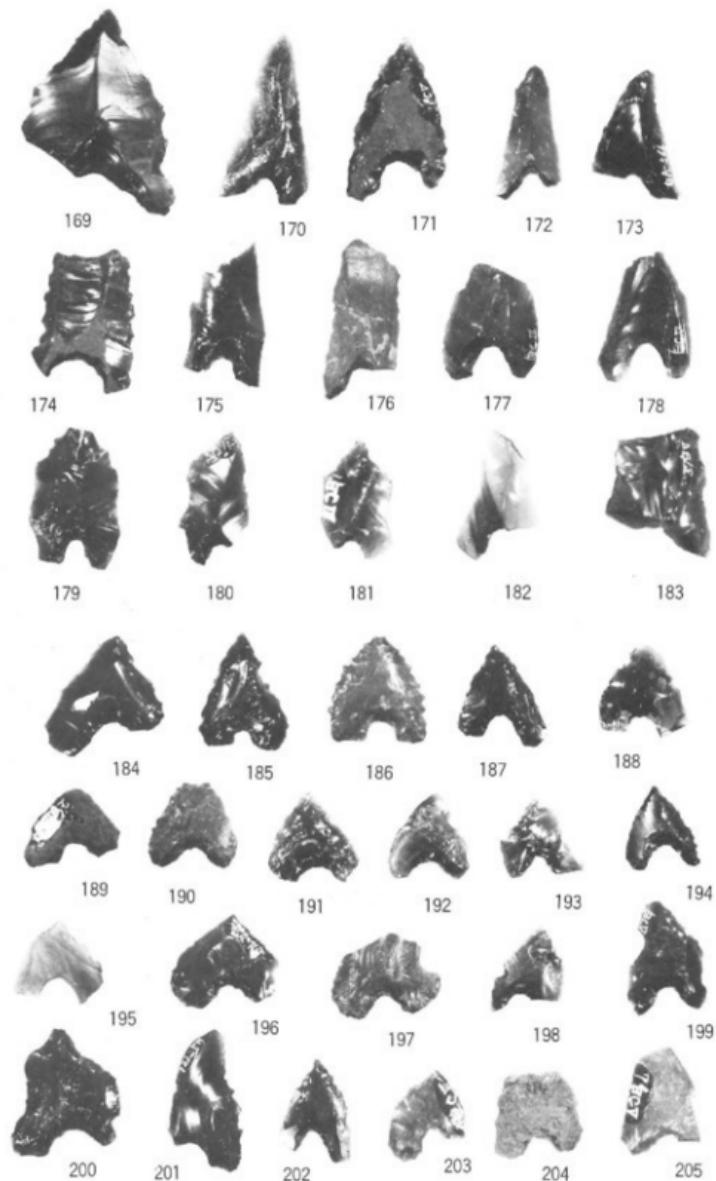
136

石器には剥片を利用したものと、押石削離によるものがあり、銛先として使われるものと、鋸歯だけのものがある。

石器および鋸歯銛先状の石器



C区出土の石鏃



C区出土の剥片群



206

207

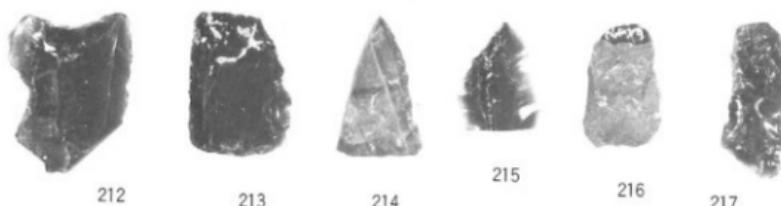
208

209

210

211

つまみ形石器



212

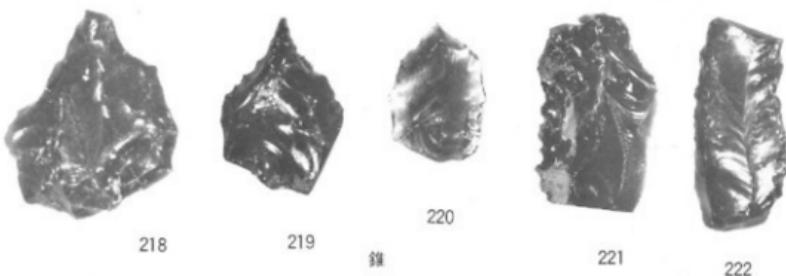
213

214

215

216

217



218

219

220

221

222

錐



223

224

225

石匙 226

C区出土の各種石器



227



228



229



230



231



232



233



234



235



236



237



238



239



240



241



242



243



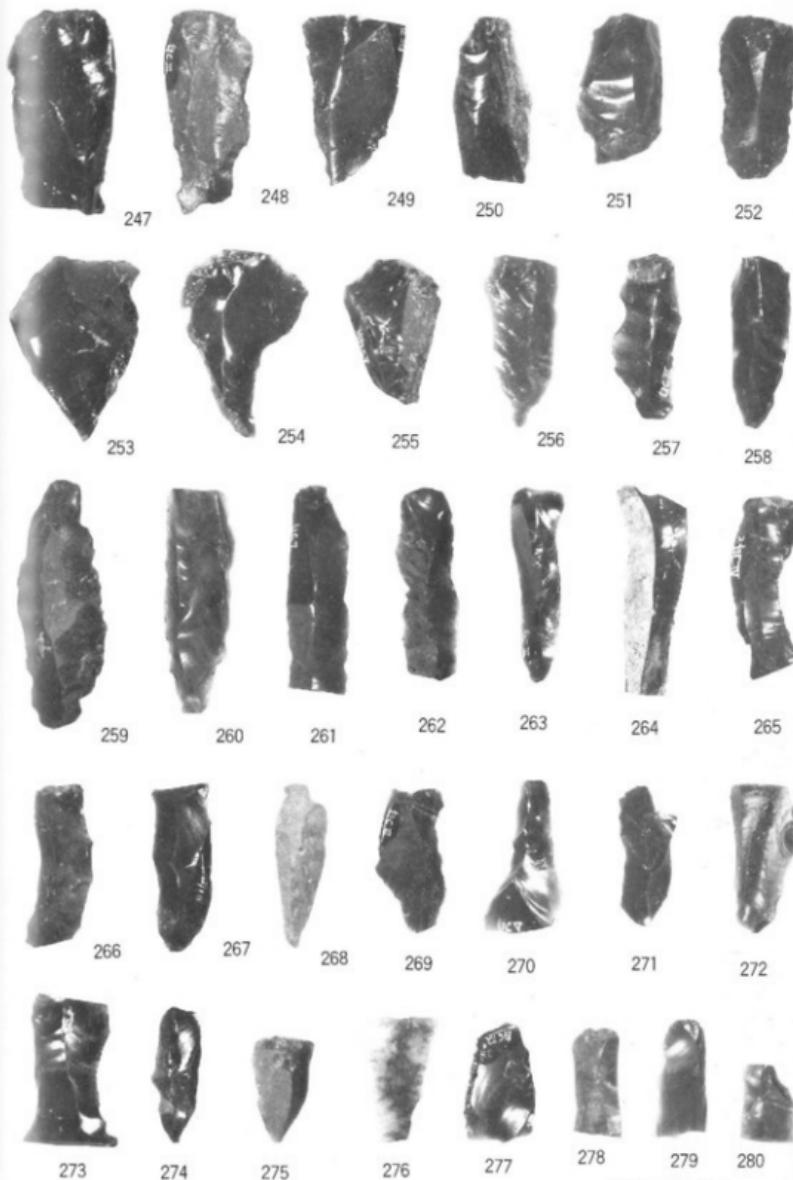
244



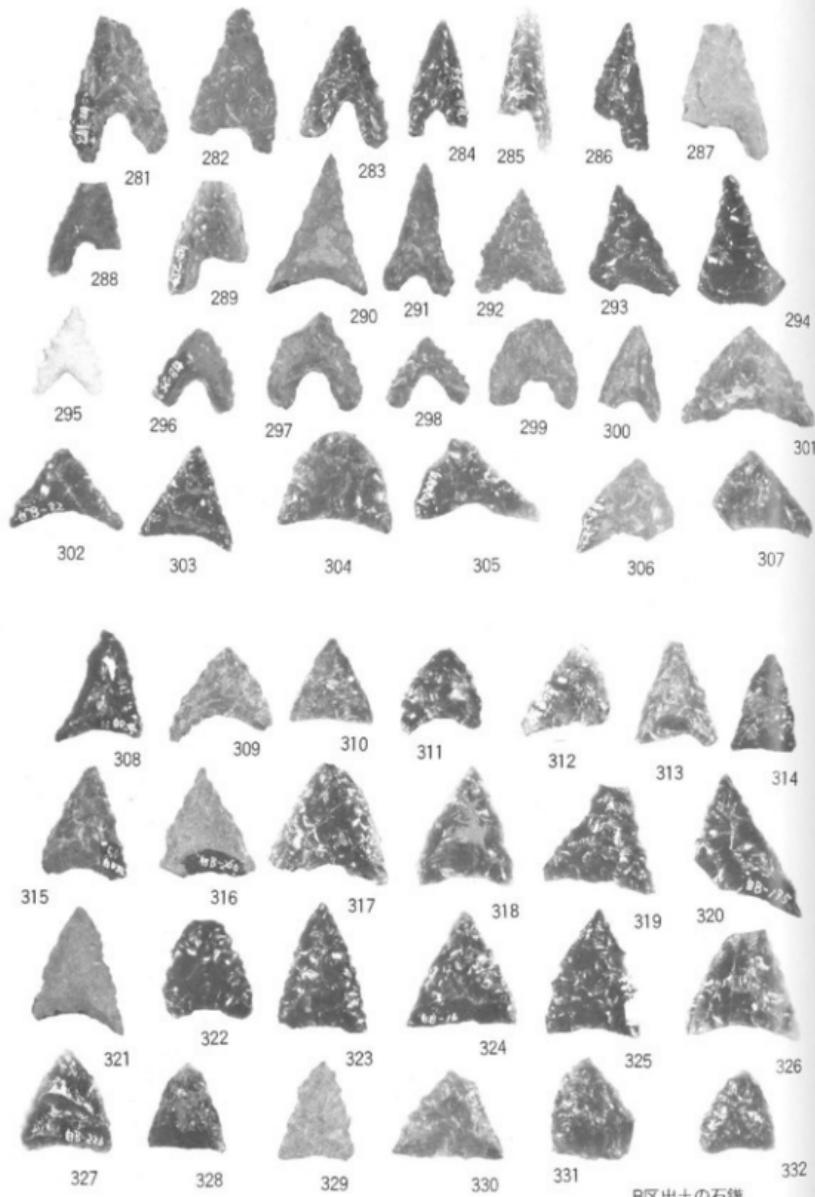
245



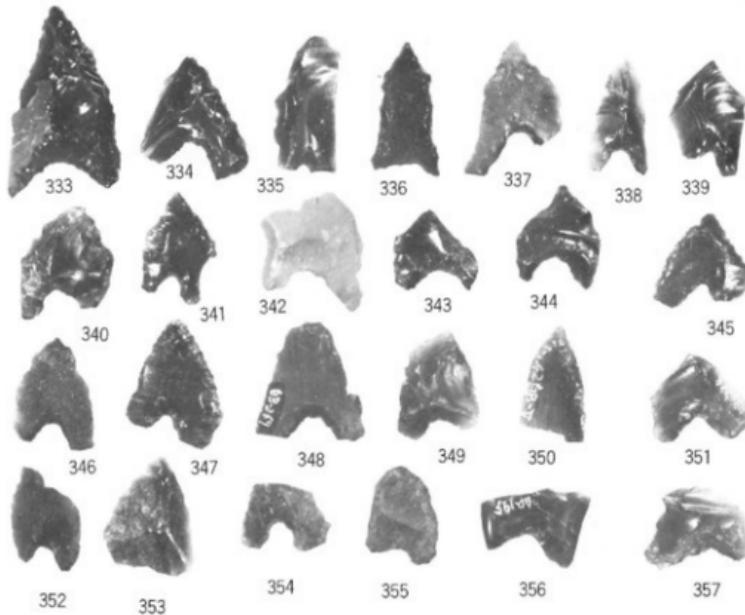
C区出土の刃器



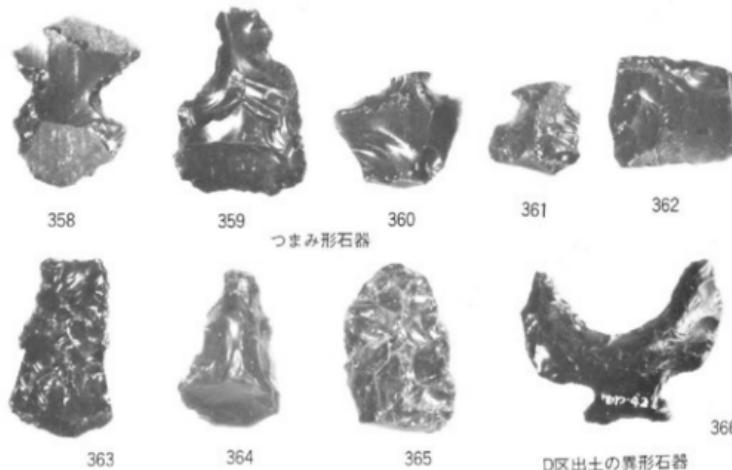
O区出土の刃器



B区出土の石錐

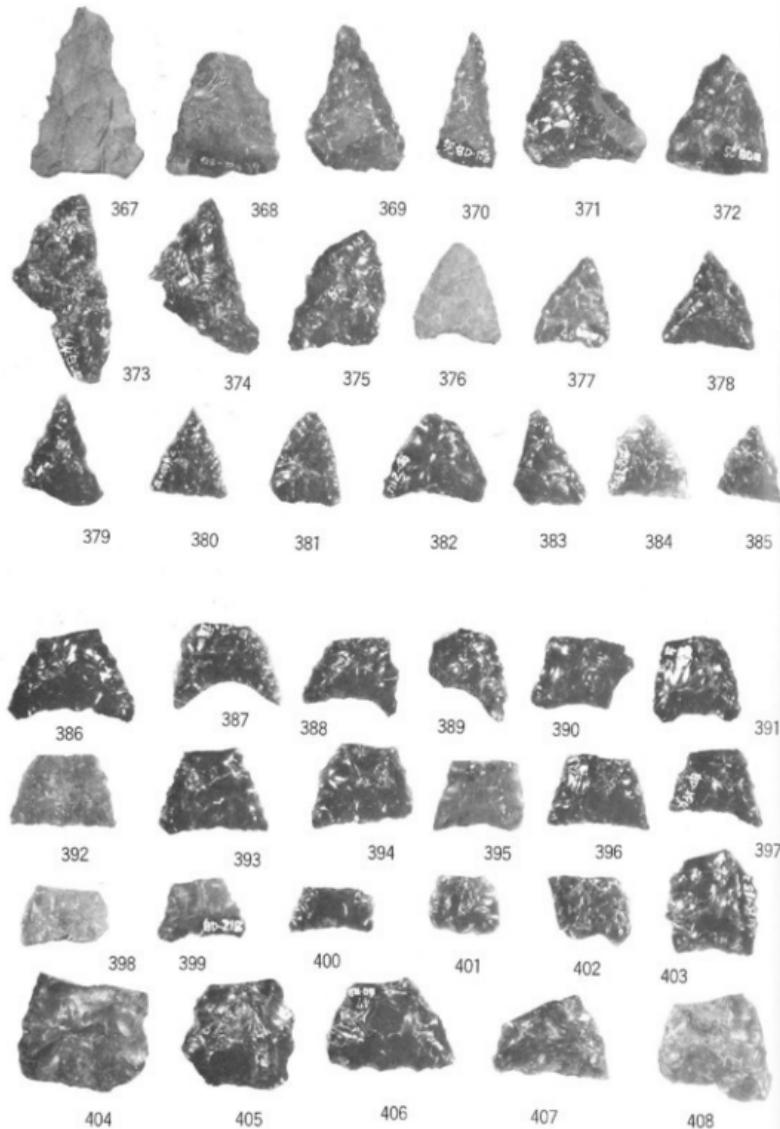


B区出土の石器

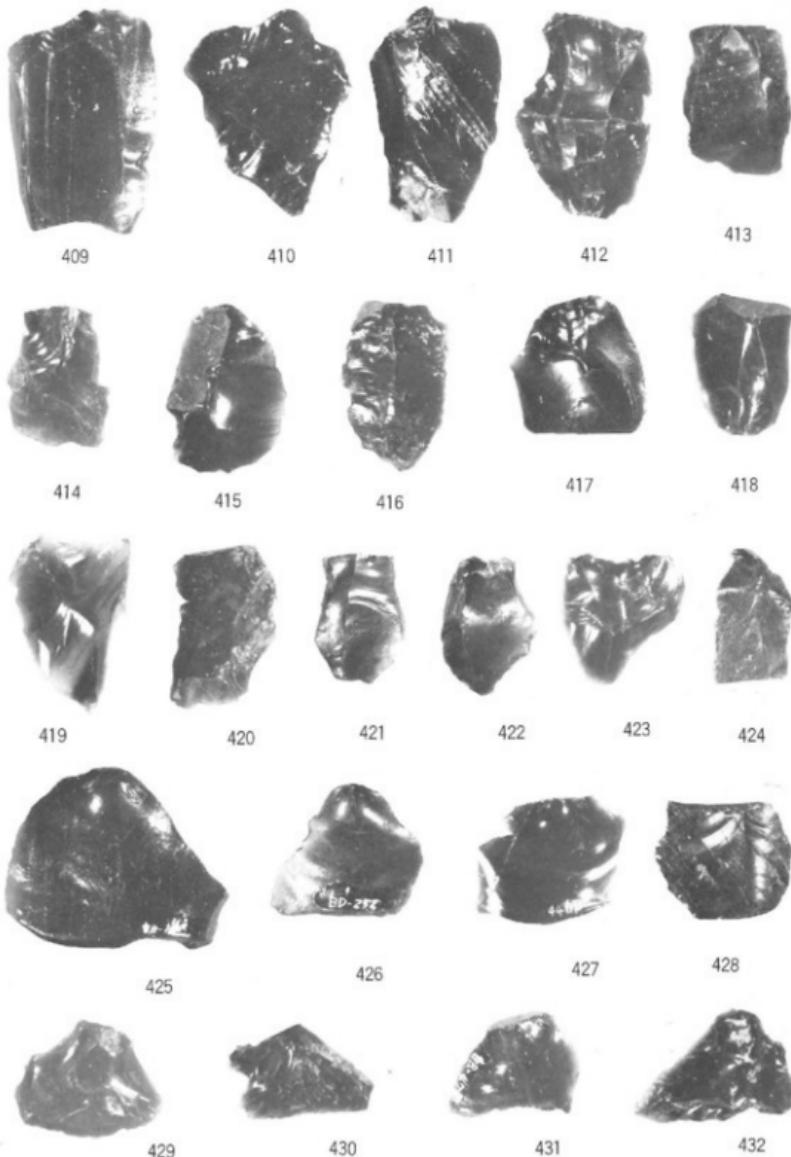


つまみ形石器

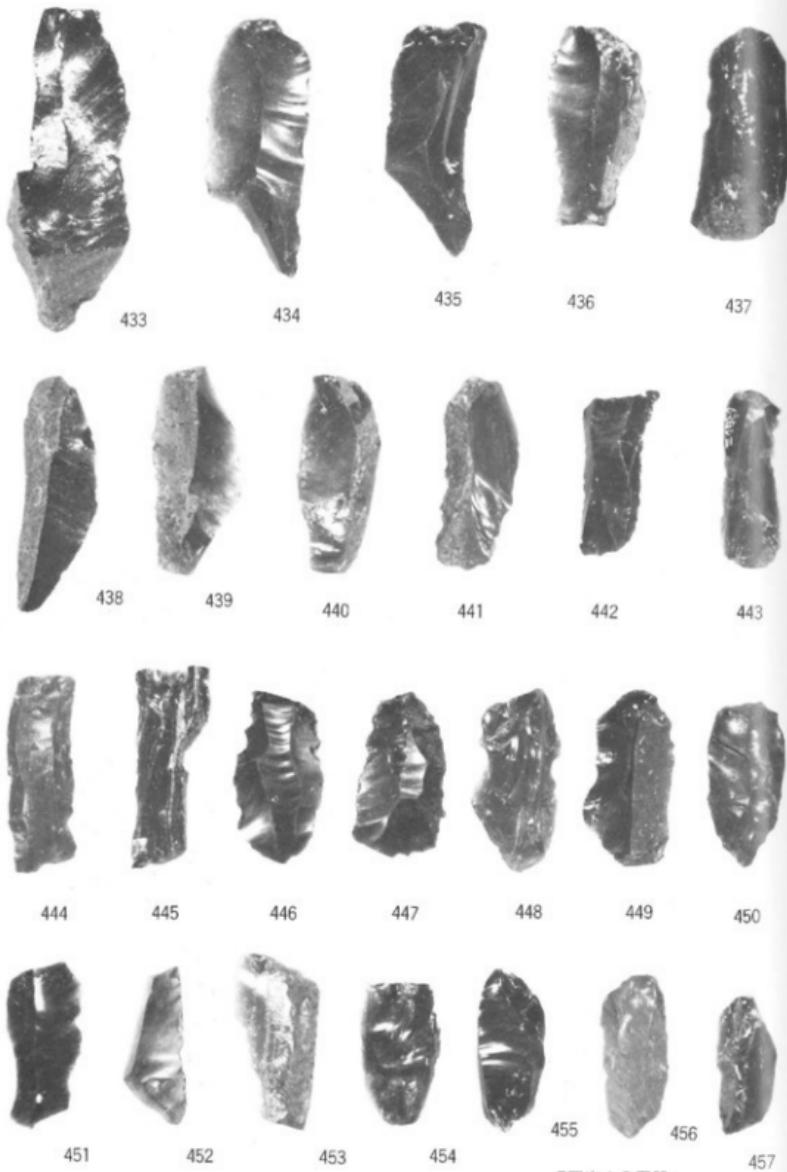
D区出土の異形石器



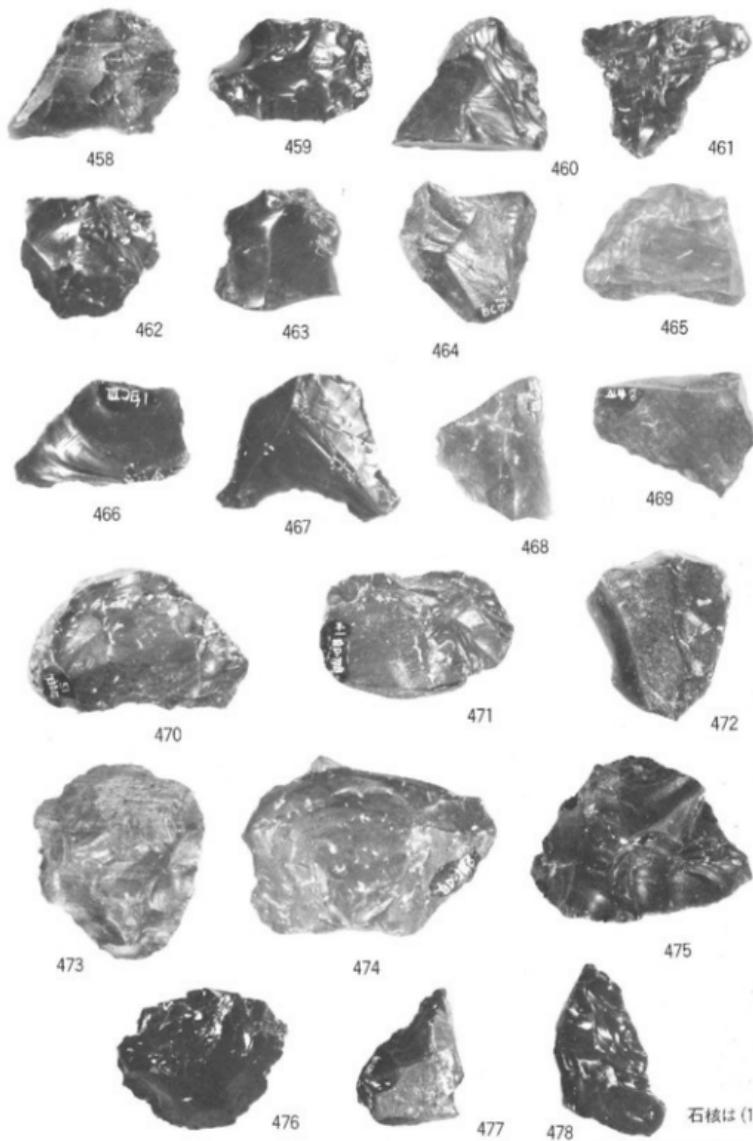
D区出土の石鎚



B区出土の刀器



B区出土の刀器



B + C区における剝片石器および石核



479



抉入石斧
(1/1)



480

扁平抉入片刃石斧 (1/1)



481



482

磨製石鎌 (1/1)



483



484



485



486

抉入磨製片刃石斧と磨製石斧

骨角器および貝器

本貝塚における骨角器の出土は晩期および弥生前期における層中からの出土が殆どを占め、绳文後期層より若干の出土があった。層位的な分類はこれからの課題であるが、C区D区の出土状況から判断すると困難である。

加工材料は鹿、猪の骨、牙が多く利用され、鰐骨、サメ歯も重要な位置を占める。製品は鉛、鐵、装身具などであるが、骨針、釣針などは認められない。

PL. 93は鰐骨製アワビ起しである。1は全長33cm、巾3.8cm、最大厚2.7cmを測る。断面は台形状を呈し、中央部には段がつけられている。先端部は両面より研ぎ出され、使用痕を認める。時期的には弥生前期に属する。

ヤス、鐵などの刺突具は40本余り出土しており、詳細な分類は後に譲ることにするが、概略記せば、反りをもたず細長いものと、関節に近い海綿質の一部を残した反りをもった返しの機能をもつものに大別できる。いずれも骨を縱割りにして両面を研磨によって仕上げしている。

サメ歯も多くの出土を見たが、製品は歯根部のコブ状の高まりを研磨し平坦にしており、サメ歯の形状から右に傾くものと左に傾くものがあり黒く焼けているものもある。(PL. 96・97)これまで穿孔されたものは装飾品として扱われてきたが、本貝塚出土のものは穿孔されたものは全く認められない。宮下貝塚でも報告例があり「鐵」であることも示唆されている。またミクロネシア、ボリネシアでは土俗例の中に、穿孔されたサメ歯を棍棒に装着し武器として使用する例が報告されている。使用方法については「鐵」的性格を強く持ち、刺突具として考えてよいであろう。

貝製品は貝輪および穿孔ある垂飾品と考えられるものと、アワビ貝製庖丁の実用的なものが



PL. 91 骨角器出土状況 (D区IVb層)

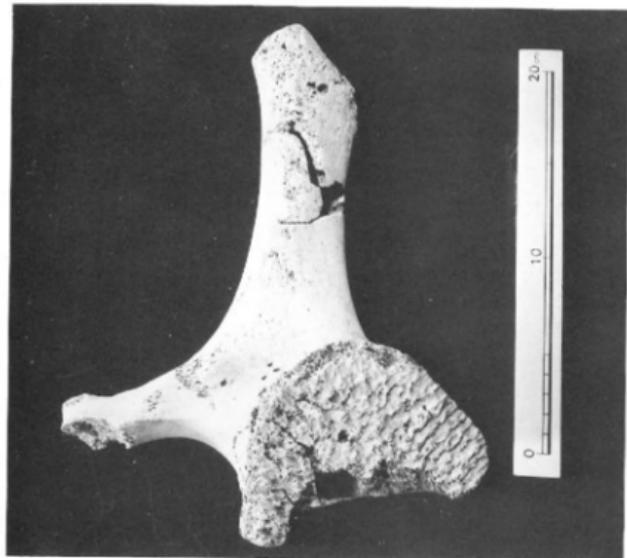
ある。PL.96~78は縄文晩期終末期の幼児人骨に伴うものでタマキガイを加工、79はアマオブネガイの背頂を磨き2ヶ所の穴を穿っている。PL.98~99・100もイタヤガイに2箇所の穿孔を施している。

PL.98~97はアワビ貝のやや直線的な部分を選び、方形状に切断した両端を磨きあげているが、刃先の部分は現状をとどめていない。98は自然のアワビ貝を加工せずそのまま使用したもので、刃先として使用した複縁の部分は現状よりかなり磨り減っている。この2例は収穫具であるが、地元崎山地区では近年まで収穫具として使用したことがあり、小田富士雄氏報文中にも民具例としてあげられている。

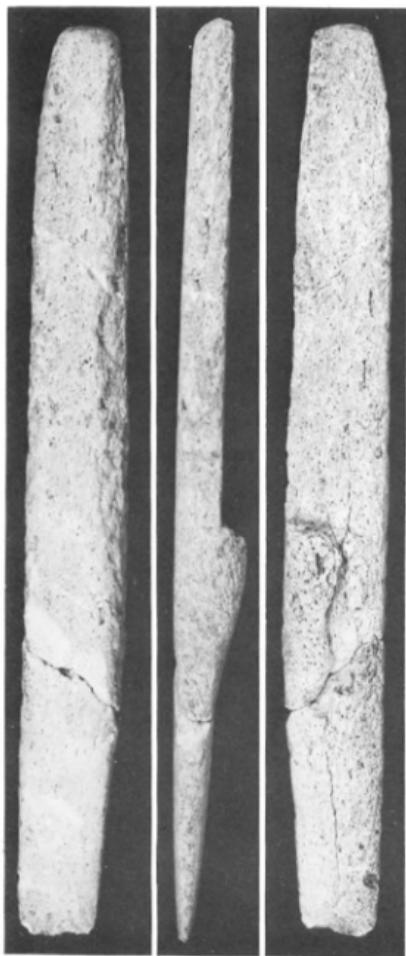
装身具はPL.98~94の猪牙に穿孔したものや、95の鹿の長骨を丁寧に研磨し、何箇所も穿孔された笄になるとされるものがあるが、沖ノ原貝塚、下本山岩陰遺跡からも類似の資料が出土している。本資料も後期のものであり、時期的にも一致している。

（参考文献）

1. 「下本山岩陰」麻生優 1972 佐世保教育委員会
2. 「貝杓丁と鉄庖丁—五島列島民具探訪録一」小田富士雄 考古学論叢(1) 別府大学 1973
3. 「貝杓丁と貝製搔器」立平進 考古学ジャーナル第128号 ニューサイエンス社 1976



PL. 92 貝塚出土の自然遺物（鯨骨）

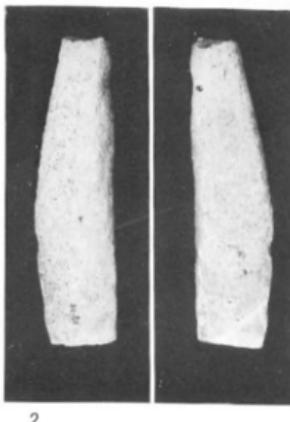


1

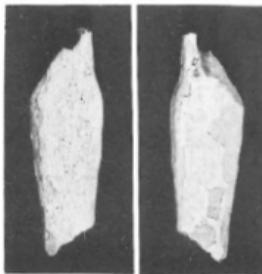
鰐骨製アワビ起し

全長 33cm
巾 3.3cm

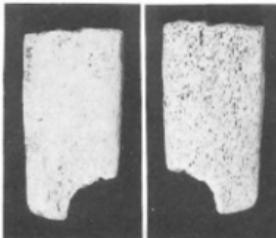
骨角器①



2

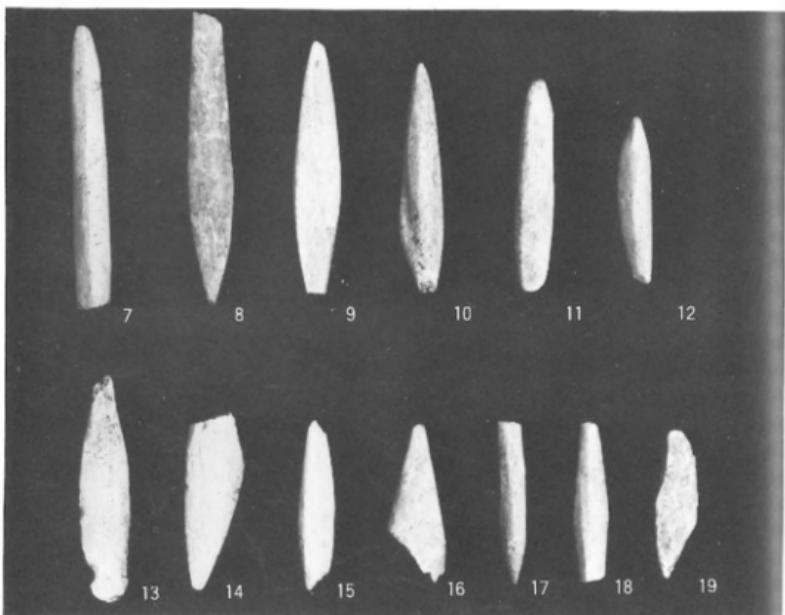
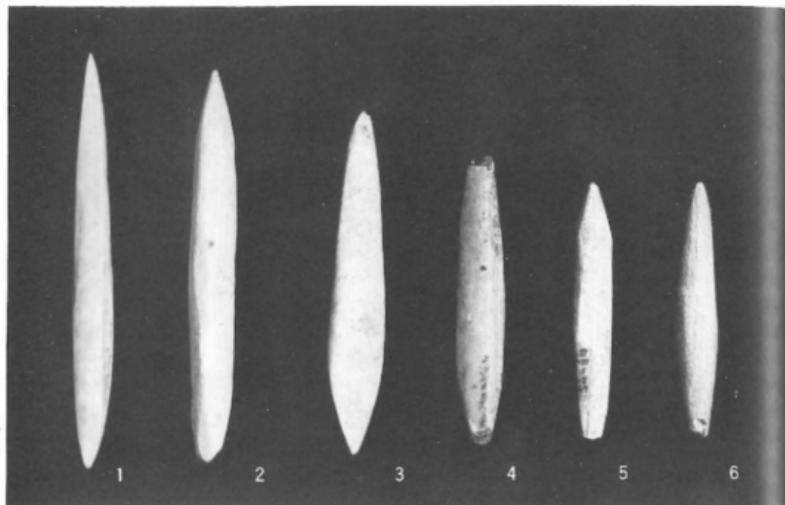


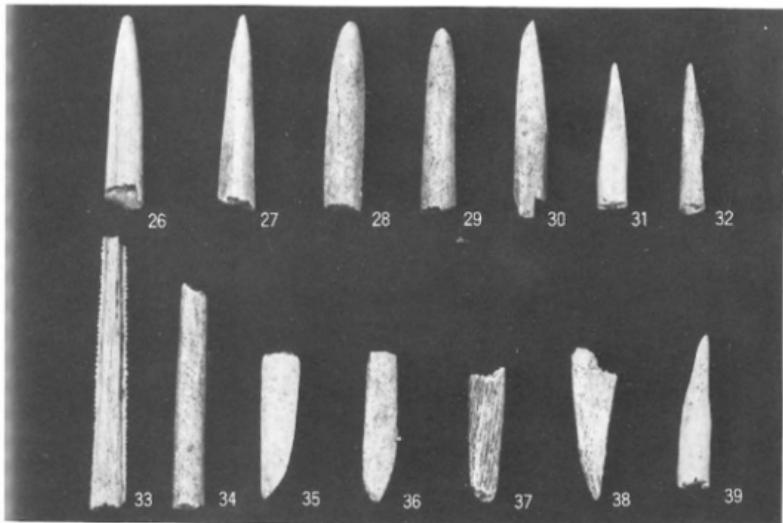
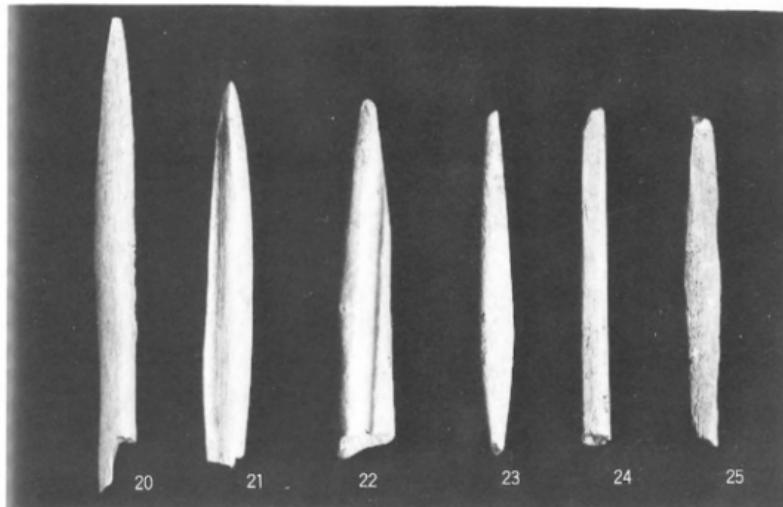
3



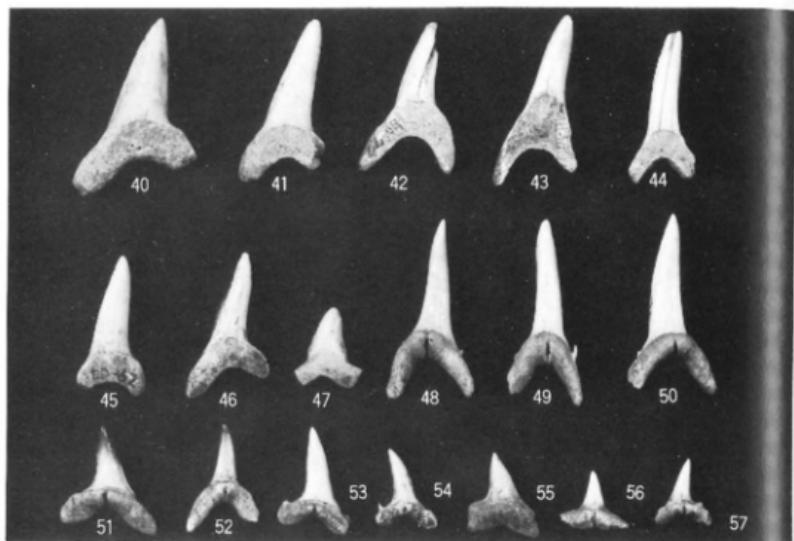
4

(1/2)

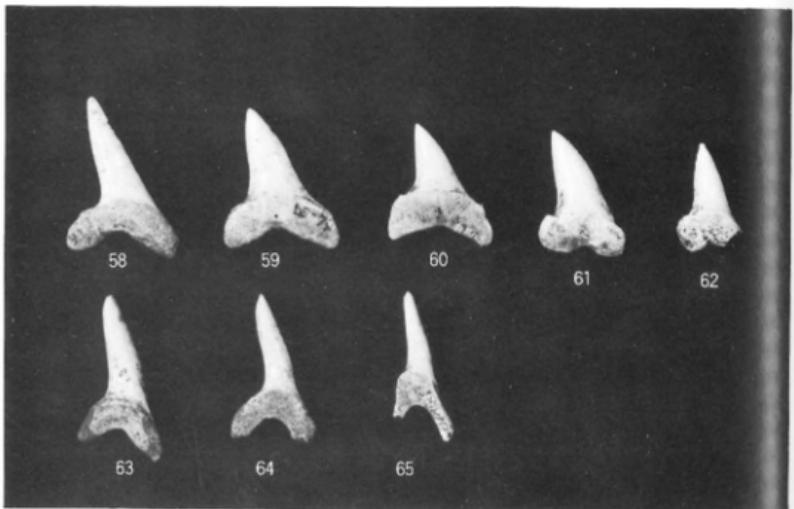




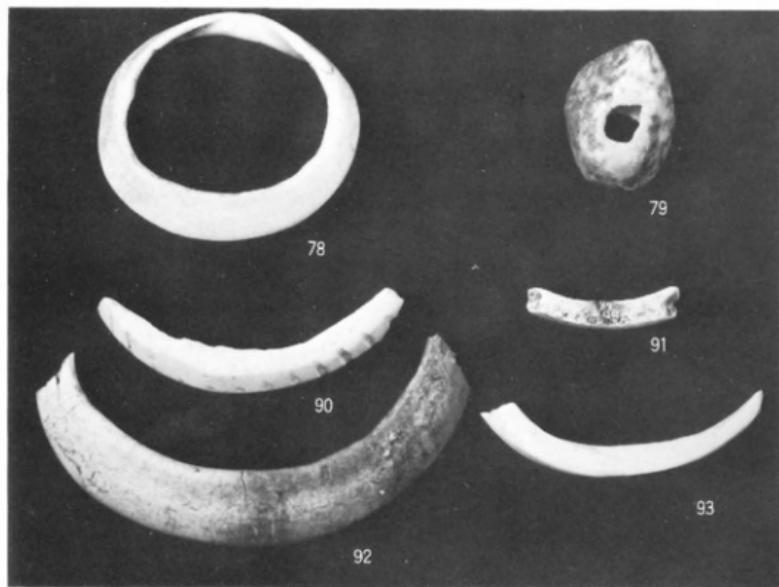
骨 角 器 ③ (1/1)



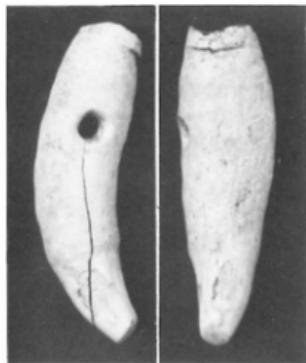
48~57は未加工



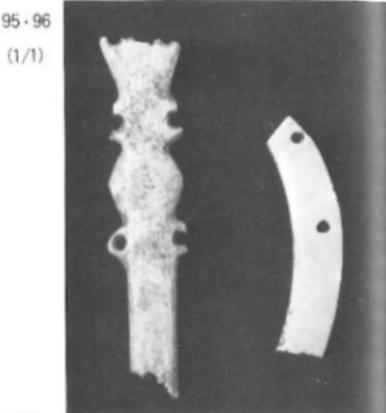
骨 角 器 ④ (1/1)



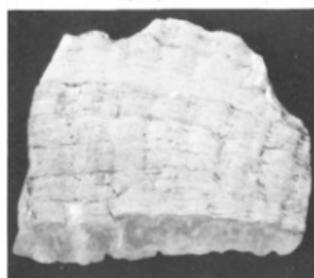
骨 角 器 ⑤ (1/1)



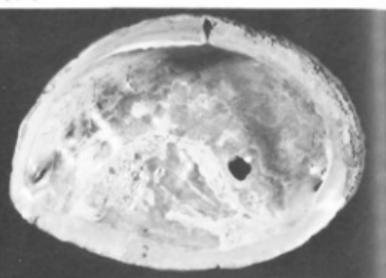
94 (1/1)



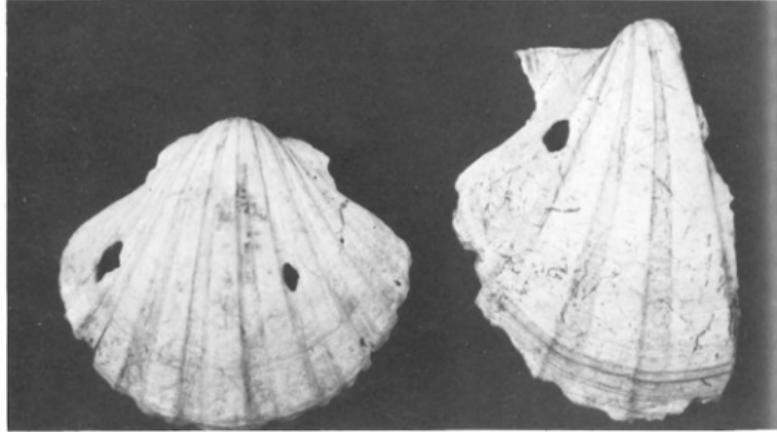
95 · 96
(1/1)



97 (1/1)



98 (1/2)



99 (1/2)

100 (1/2) 骨角器 ⑥

7. 砂丘の形成と遺跡の成立

白浜貝塚は別項でのべたごとく縄文時代後期・同晩期・弥生時代前期の遺跡である。遺跡の全範囲は現時点ではかならずしも明確でないが、今次の調査において、各時期の遺跡の境界がある程度明瞭になったといえる。

白浜浦の海岸は、夏季には海水浴客で賑やかになるが、遠浅の砂地海浜である。Fig. 2 で見るとく白浜浦の潮間線部は、現在の海岸堤防より約130m の沖合で一たん浅く盛上っており、西北九州の砂丘地形海岸の潮間線部の状況と共通している。このことは、白浜遺跡をのせる砂丘が海底から運ばれた砂によって形成されたものであることを示す。

かつての白浜砂丘は青松の繁る「砂山」であったといわれ、台風時には砂が飛んで雨戸の隙間から家屋内に飛びこんだといわれる。かかる現象の繰返しによって砂丘が形成されたものであるが、「えびす岩」が山側から張り出でて、砂丘の北限をなしている。因みに「えびす岩」以北の海岸は、溶岩がむきだしの状態で海中に張り出している。したがって、古く漁業活動の行われた崎山漁港は、「えびす岩」の北側にあって、必要な水深を保っており、「えびす岩」の北側と南側の海岸は際立った異相を示している。このことからして、古くから「えびす岩」を境にして、南側が生活の場に、北側は漁撈の場に使いわけられていたことになる。

遺跡をのせる砂丘は、この「えびす岩」から南側に張り出しているが、砂丘海岸はいったん東側に折れて、「かぎ」の手に曲っている。この北面している海浜も現在集落が営まれているが、かつては、ここにも大きな砂山があり、遺物の採集が可能であったといわれる。したがって、



PL. 99 白浜浦海岸風景

「えびす岩」の南側に、二つの砂丘があったことになる。説明の都合上「えびす岩」から直接に南側に張り出す砂丘をA砂丘、海に北面して存在した砂丘をB砂丘とよぶことにするが、両砂丘の間は小川によって断ちきられている。明瞭な遺跡が存するのはA砂丘の方であるが、砂丘の利用部位は各時期によって異っている。

調査区の層位の項で紹述したところであるがA砂丘のほぼ中央、3443—12番地(里本朝一氏)における今次の発掘調査において、縄文時代後期以降のA砂丘の利用部位が把握できたと考えている。(Fig.2)

当該地はFig.2にみると、A砂丘のほぼ中央に相当している。方形の調査区を、ほぼ南北に二分するかたちで旧海岸線を示す溶岩の辺端が確認された。この溶岩流辺端以西(山側)に限って縄文時代後期の遺跡が確認された。したがって縄文時代後期における崎山の海岸線は、現在より30m程度後退していたことになり、当時の地貌はかなり異相を呈していたことになる。緩い傾斜の溶岩台地辺までローム質の黒褐色土がのり、海砂がゆるく展開する状態の海岸であったろう。

一方、縄文時代晩期になると、前述の溶岩台地辺端は海からおしよせた砂が堆積して、低い砂丘がほぼ現在のA砂丘位置に形成されて晩期の人々の生活の場となったと考えられる。因みに、縄文時代晩期の貝塚は、今回の調査区を南北に走る前述の旧海岸線以東(海側)において展開していた。同期の墓域も今次調査地区的C区を北西邊にして営まれたと考えられ、父子抱擁の状態で埋葬された屈葬人骨が検出された。

縄文時代晩期以降、弥生時代前期に至るまで大差のない地貌であったが、砂丘は徐々に堆積



PL. 100 B区北側土層

を括げて、前述の「えびす岩」との間を埋めていったと考えられる。弥生時代前期後半の遺跡（貝塚）は調査地点の東半部において、縄文晩期の上層という状態で展開していたが、特に遺物の濃密な状態は東北方向に展開すると考えられ、人骨片も出土した。かつて、「えびす岩」付近の堤防工事に際しても時期不明ながら人骨の出土があったといわれていることを考えれば、弥生時代の貝塚と墓域は、今次調査を西南端として展開する可能性が強い。

以上の状態を概括すれば

1. 白浜貝塚のある現在のA砂丘は、縄文時代後期には未発達の状態にあり、縄文時代後期人の生活は調査地点をほぼ南北に二分する線を東限として営まれた。
2. 縄文時代晩期および弥生時代後半の項は砂丘が餘々に発達し、この項の生活の場は、調査地点をほぼ二分する線の以東において展開した。貝塚が営まれたのもこの頃である。
3. 縄文時代晩期貝塚・弥生時代前期貝塚を包含する茶褐色の砂層は、視覚的には殆んど区分不可能である。このことは、縄文時代晩期以降においても微速ながら引き続き砂の堆積が見られたことになる。
4. 現在の住宅地群が造成される以前のA砂丘部は、古老によれば、現在、遺跡の上に建てられている平屋よりも高かったといわれ、弥生時代前後、砂丘の形成は急激であったと考えられる。因みに、白浜貝塚における弥生時代前期層のレベルと、かつて存在したA砂丘のレベルを現存の平屋の屋根として比較すれば、4m以上の差となり、A砂丘形成の速度がうかがわれる。

白浜貝塚における縄文時代後期・同晩期・弥生時代前期の遺跡は、現在のA砂丘の消長とともに成立したといえよう。

なお、今次調査地点の縄文後期層の最下部において、滑石粉末を混入した阿高系の土器片が検出されているが、量的に稀少であり、明確な包含層を認めえなかった。但し、地元の研究家松崎久磨治氏採集になる豊富な縄文中期土器ないし、曾畠系の土器片はA砂丘南端部において採集された由であるから、白浜砂丘の別の地点においては、縄文時代前期ないし、同中期の項も遺跡が営まれた可能性があることを付言しておく。

8. 五島・白浜貝塚出土の縄文晩期人骨^{*}

松下孝幸^{**}, 分部哲秋^{**}

はじめに

長崎県の五島列島の福江市にある白浜遺跡は1979年の5月と、同年の7月から8月にかけての2回にわたって発掘調査が行なわれ、その結果若干の散乱骨と保存良好な2体の合葬骨が出土した。2体の人骨のうち1体は壮年の男性骨で、残りの1体は1才半位の幼児骨であった。

この2体の人骨は浅い土壌中に葬られていたものと考えられ、頭蓋は2体共潰れていたが、成人骨の四肢骨は破損することなく、ほぼ完全に残存していた。

男性骨の埋葬姿勢は仰臥屈膝で、幼児の肋骨等がこの男性骨の前腕の下に位置していたことから、男性が幼児を右腕で抱いていたものと考えられる。

この2体の合葬骨は別項で述べられているように、考古学的所見から縄文時代晩期に属する人骨である。

※ 本報告の要旨は第35回日本解剖学会九州地方会において発表した。

※ 長崎大学医学部解剖学第二教室



PL. 101 D区晩期人骨出土状況（白い矢印は北方向）

縄文時代晩期人は縄文人と弥生人との差異を検討する上で重要な示唆を与えてくれると考えられるが、その出土例は少ないので現状である。

自浜晩期人は保存状態がきわめて良好だったので、観察や計測を行ない、西九州出土の縄文後期人（内藤他、1977）ならびに弥生人（内藤、1971）との比較を行なったので、その結果を報告したい。なお弥生人の四肢骨については、胫骨は西九州弥生人（松下、1978）を、その他は浜郷弥生人（松下、未発表）を比較資料とした。

資 料

1号人骨

頭蓋は、出土時は原形を留めていなかったが、各破片の骨質がしっかりと頑丈であったので、ほぼ完全に復元することができた。脳頭蓋は前頭骨の一部を欠く他は完全であり、顔面頭蓋も左頬骨と右の頬骨弓を欠損している他はすべて残存していた。

下頸骨は左下頸枝を欠いている他は良く残っており、歯もほとんどが遺存していた。

四肢骨の保存もきわめて良好で、上肢骨は肩甲骨の一部と左鎖骨の一部が欠損している他は完全であり、下肢骨も寛骨の一部と腓骨の一部が欠失している他は完全である。

また軽幹骨の保存状態も良好であった。

性別・年令については、下記の所見より、壮年男性骨と推定される。

2号人骨

頭蓋は出土時は原型を留めていなかったが、破片が比較的良好に残っていたので復元することができた。脳頭蓋はほぼ完全であるが、顔面頭蓋の保存状態は悪く、右頬骨と左上頸骨の歯槽突起の一部が残存するだけであった。また下頸骨は右半分のみが残っていた。

四肢骨の保存はあまり良くなく、上腕骨については、右側は骨体の遠位半が、左側は骨体の一部のみが残存しており、桡骨は右の骨体がほぼ完全で、尺骨は左側の骨体が良く残存していた。下肢骨は大腿骨、胫骨、腓骨のそれぞれ骨体が残っていた。

その他、肋骨、椎骨が残存していた。

年令は残存骨の大きさと歯の萌出状態から1才半位の幼児骨と推定される。

所 見

1号人骨

(1) 頭 蓋

1. 脳頭蓋

骨壁は厚くて頑丈である。眉上弓はやや発達し、鼻根部も陥凹しており、乳様突起も大きい

が、外後頭隆起の発達は良くない。3主縫合はやや疎で、内外両板には明らかな遮蔽はみられない。また前頭縫合も残存している。

上面觀はOvoidesに属しており、脳頸蓋の主要計測値は表1に示すとおりである。頭骨最大長は179mm、最大幅は142mm。バジオン・ブレグマ高は136mmである。またが数値については、頭骨長幅示数が79.33、頭骨長高示数が75.98で、頭骨幅高示数は95.77となり、頭型はmeso—, hyspi—, metriokranに属している。

脳頸蓋の諸径を西九州出土の縄文後期人および弥生人と比較してみると、頭骨最大長は縄文後期人の191.14mm(7例)や弥生人の182.81mm(21例)よりも小さく、また頭骨最大幅においても縄文後期人の147.00mm(8例)、弥生人の144.95mm(20例)よりも小さい。バジオン・ブレグマ高については、縄文後期人の139.50mm(2例)よりは小さいが、弥生人の134.60mm(15例)よりはやや大きい。

頭骨長幅示数は白浜晩期人が79.33で短頭に近い中頭型に属しているが、縄文後期人は76.15(7例)でやや長頭に傾いた中頭型に属しており、白浜晩期人はむしろ弥生人の79.17(20例)に近い示数值である。

2. 頭面頸蓋

頸骨が強く張り出し、上顎骨も頑丈で、顎面は低い。

顎面頸蓋の計測値は表2に示すとおりで、中頸幅が(97mm)、頭高は106mmで、上顎高は59mmである。従って、ウィルヒョーの顯示数は(109.28)となりBreitgesichterに属し、ウィルヒョーの上顎示数は(60.82)を示し、breite obere Gesichterに属している。

次いで顎面頸蓋の諸径を縄文後期人および弥生人と比較してみると、中頸幅は縄文後期人の102.40mm(5例)および弥生人の105.00mm(17例)よりも小さく、頭高も縄文後期人の116.00mm(5例)および弥生人の117.07mm(14例)よりも小さく、上顎高についても縄文後期人の68.60mm(5例)および弥生人の68.06mm(17例)よりも小さい。また示数值についてはウィルヒョーの顯示数は縄文後期人の109.53(4例)と大差なく、弥生人の111.78(14例)よりも小さく、ウィルヒョーの上顎示数は縄文後期人の64.00(4例)および弥生人の64.84(17例)よりもさらに小さい値である。

眼窩幅は46mm(右)、眼窩高は30mm(右)で、眼窩示数は65.22(右)となり、chamaeknoch(低眼窩)に属している。また鼻幅は26mm、鼻高は45mmで、鼻示数は57.78となり、chamaerrhin(広鼻)に属している。なお鼻骨最小幅は9mmで、鼻骨はやや広い。

3. 下顎骨

骨質は厚く頑丈で、下顎角は強く外側へ張り出しており、咬筋粗面も良く発達している。下顎高は58mm(右)、下顎枝幅は35mm(右)で、下顎枝は低くて幅が広い。

4. 齒

歯は上、下顎共良く残存しており、残存歯を歯式で示すと次の通りである。

| | |
|---------------------------------|--------------------------------------|
| $M_1 M_2 P_1 P_2 C I_1 I_2$ | $I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2$ |
| $M_1 M_2 M_1 P_1 P_2 C I_1 I_2$ | $I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 \bigcirc M_2$ |
| | [/ 不明 (破損)] |
| | [○ 歯槽開存] |

咬合度はBrocaの3度で、齶歯および抜歯は認められない。また咬合型式は鉗子状咬合である。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

1. 肩甲骨

諸径が大きく、頑丈で、関節窩も大きく、肩甲棘もよく発達している。

2. 鎮骨

諸径が大きく、筋付着部の発達もきわめて良好である。主要計測値は表3に示す通りである。

3. 上腕骨

左右共完全に残存しており、頑丈で、三角筋粗面の発達も良好で、特に右側は著しい隆起をつくっている。

最大長は281mm(右), 282mm(左)で、やや短かく、中央最大径は27mm(右), 23mm(左), 中央最小径は左右共に17mmで、骨体断面示数は62.96(右), 73.91(左)となり、右側の方がより扁平である。また中央周は73mm(右), 67mm(左), 最小周は63mm(右), 62mm(左)で、周径も大きく、長厚示数は22.42(右), 21.99(左)となり、頑丈であることが示数値からもうかがえる。(表4)

次いで右側について西九州縄文後期人および弥生人との比較を行なってみると、最大長は縄文後期人の289.80mm(左, 5例)および浜郷弥生人の290.20mm(10例)よりも小さく、中央周は縄文後期人の74.00mm(左, 4例)に近似し、浜郷弥生人の68.40mm(10例)よりも大きい。また最小周は縄文後期人の66.50mm(8例)および浜郷弥生人の66.13mm(16例)よりも小さい。すなわち骨体は遠位部がやや細く、中央部が太くなっているが、これは三角筋粗面の発達によるものである。

4. 桡骨

両側共完全に残存しており、桡骨粗面は大きく、また陥凹もみられるが、骨体はやや細く骨間縫の発達も悪い。主要計測値は表5に示す通りである。

5. 尺骨

両側共完全に残っており、消済切痕は大きく、尺骨粗面の発達も良く陥凹もみられるが、骨体はやや細く、骨間縫の発達も良くない。主要計測値は表6に示すとおりである。

2) 下肢骨

1. 宽骨

右側は恥骨上肢と下肢を欠損している他は完全で、左側も半骨枝の一部を欠いている他は完全に残存していた。諸径はやや大きく、頑丈で、大坐骨切痕の角度は小さい。また右側の恥骨結合面は欠損しており観察できないが、左側の恥骨結合面には若年者にみられる平行隆線が残存している。

2. 大腿骨

大腿骨は左右共に完全に残っており、長径はやや短かく、また周径もやや細いが、大腿骨頭は大きい。粗線の発達はあまり良くないが、殿筋粗面は良く発達しており、その下位には陥凹も観察される。また骨体上部には扁平性も認められる。

最大長は406mm(右)、407mm(左)で、骨体中央矢状径は左右共に26mm、横径は左右共に24mmで、骨体中央断面示数は左右共に108.33を示し、柱状形成の像も認められない。骨体中央周は80mm(右)、81mm(左)で、長厚示数は19.80(右)、20.00(左)となり、ややきしゃな傾向がうかがえる。また上骨体断面示数は75.86(右)、78.57(左)となり、やや扁平である。(表7)

次いで縄文後期人および弥生人との比較を行なってみると、最大長は縄文後期人の424.67mm(左、3例)および浜郷弥生人の422.85mm(12例)よりも小さく、中央周も縄文後期人の89.67mm(左、3例)および浜郷弥生人の86.33(12例)よりも小さい。また骨体中央断面示数についても縄文後期人の113.82(左、3例)および浜郷弥生人の116.58(12例)よりも小さく、上上骨体断面示数については縄文後期人の79.70(8例)および浜郷弥生人の80.51(18例)よりも小さい。長厚示数は縄文後期人の21.43(左、3例)および浜郷弥生人の20.70(12例)よりも小さい。すなわち白浜1号縄文晚期人の大腿骨は縄文後期人および浜郷弥生人と比較すると、短かくてややきしゃではあるが、骨体上部には扁平性が認められるという特徴をもっている。

3. 股 骨

左右共に完全に残存しており、大腿骨と同様に長径も周径も小さい。右側の前面には一稜が形成されており、中央断面型はヘリチカのIV型を、左側はII型を呈しているが、両側共にヒラメ筋線の発達は良くない。

最大長は331mm(右)、330mm(左)で、中央最大径は28mm(右)、27mm(左)、横径は左右共に20mmで中央断面示数は71.43(右)、74.07(左)となり、扁平性は認められない。骨体周は75mm(右)、73mm(左)、最小周は69mm(右)、68mm(左)で周径も小さく、長厚示数は21.50(右)、21.25(左)となり、あまり頑丈なものではない。(表8)

次いで縄文後期人および浜郷弥生人との比較を行なってみると、最大長は縄文後期人の353.00mm(左、3例)および西九州弥生人の345.64mm(11例)よりも小さく、骨体周も縄文後期人の86.67(左、3例)および西九州弥生人の82.42(33例)よりも小さい。また最小周についても縄文後期人の75.63mm(8例)および西九州弥生人の75.35(31例)よりも小さい。しかし中央断面示数は縄文後期人の63.30(左、3例)および西九州弥生人の69.45(34例)よりも大きく扁平性は認められない。長厚示数は縄文後期人の21.93(左、3例)に近似し、西九州弥生

人の22.35(9例)よりも小さい。

4. 腓骨

左侧は完全であるが、右側は腓骨頭を欠いている。諸径はあまり大きいものではなく、稜の発達も著明でない。主要計測値は表9に示すとおりである。

5. 踵蓋骨

左右共にほぼ完全に残存しており、骨質も厚く、また外側の切痕もやや深い。(表10)

(3) 脊幹骨

椎骨・肋骨も良く保存されており、それらの諸径は大きいものではない。

(4) 推定身長値

右大腿骨の最大長からPearsonの公式を用いて推定身長値を算出すると、157.63cmで、藤井の公式を用いて算出すると、155.18cmとなり、いずれも低身長である。

次いでPearsonの公式より算出した縦文後期人および西九州弥生人の推定身長値と比較してみると、縦文後期人の161.15cm(左、3例)よりも小さく、西九州弥生人の158.79cm(16例)に近い値を示している。

性別は対象の大坐骨切痕の角度が小さいことや、筋付着部が良く発達していることから男性と推定され、年令については歯の咬耗度は強いが、縫合は内外両板に明らかな融合がみられないことや恥骨結合面に平行隆線がまだ残存していることから壯年と推定される。

2号人骨

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

骨壁は薄く、頭骨最大長は161mm、蝶骨最大幅は118mm、バジオン・ブレグマ高は115mmである。示数値は頭骨長幅示数が73.29、頭骨長高示数は71.43、頭骨幅高示数は97.46を示し、頭型はdolicho-, ortho-, metriokranに属している。

2. 頭面頭蓋

右頬骨と左上顎骨の歯槽突起のみしか残存していなかった。

3. 下顎骨

下顎体の左半分が残存しており、歯槽部には歯も釘植していた。

4. 歯

上顎と下顎の大部分の歯が残存しており、それを歯式で示すと次のとおりである。

| | | | | | | | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|-------------|------------|-------|------------|------------|-------|---------------|---------------|
| $\frac{(\dot{M}_1)}{(M_1)}$ | $\frac{(\dot{m}_2)}{(m_2)}$ | \dot{m}_1 | $/$ | i_1 | i_2 | \bigcirc | m_1 | (\dot{m}_2) | (\dot{M}_1) |
| (M_1) | (m_2) | m_1 | \bigcirc | i_2 | \bigcirc | $ $ | i_1 | i_2 | C |

(/ 不明(破損) ○ 歯槽開存 () 未萌出 · 遊離歯)

ほとんど咬耗のあとはみられない。また咬合型式は不明である。

(2) 四肢骨

いずれも諸径は小さいものである。骨体が完全に残存していたのは右桡骨と右腓骨で、その長さはそれぞれ76mm, 104mmである。その他大脛骨、胫骨の残りが比較的良いが、共に両端を欠いている。

年令は歯の萌出状態と四肢骨の大きさから1才半位と推定される。

総 括

長崎県の五島列島にある白浜遺跡から、縄文晩期に属する保存良好な成人骨と幼児骨との珍しい合葬例がみいだされたので、主に成人骨について観察および計測を行なった。その結果は次のように要約することができる。

1. 合葬骨2体のうち1体は牡年男性骨（1号人骨）で、残りの1体は1才半位の幼児骨（2号人骨）であった。
2. 牡年男性の葬位は仰臥屈膝で、幼児を右腕で抱いた姿勢であった。
3. 1号人骨の脳頭蓋の骨壁は厚く、頭骨最大長は179mm、最大幅は142mm、バジオン・ブレグマ高は136mmで、頭骨長幅示数は79.33、頭骨長高示数は75.98、頭骨幅高示数は95.77となり、頭型はmeso-, hypsi-, metriokranに属している。
4. 脣面頭蓋は低く、顎高は106mm、上顎高は59mm、中顎幅は(97mm)で、ウィルヒヨーの顎示数は(109.28)、上顎示数は(60.82)となり低頑である。
5. 齒齒および抜歯は認められず、咬耗度は強く、Brocaの3度である。また咬合型式は錯子状咬合である。
6. 上腕骨は頑丈で、三角筋根面の発達もきわめて良好である。最大長は281mm(右)で短かく、最小周は63mm(右)で、長厚示数は22.42(右)となり頑丈である。また骨体断面示数は62.96(右)となり扁平性が認められる。
7. 大脛骨もやや短かく、最大長は406mm(右)で、中央周は80mm(右)でやや細く、長厚示数は19.80(右)となり、ややきしゃな傾向がうかがえる。中央断面示数は108.33(右)で、粗線の発達は良いものではなく、柱状形成の像も認められないが、上骨体断面示数は75.86(右)となり、扁平性が認められる。
8. 胫骨もやや短かく、最大長は331mm(右)、最小周は69mm(右)で細く、長厚示数は21.50(右)となる。中央断面示数は71.43(右)で、やや大きく、扁平性は認められず、ヒラメ筋線の発達も悪い。また中央断面型は右側がヘリチカのIV型、左側がII型に属している。
9. 右大腿骨最大長から、Pearsonの公式と藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ157.63cm、155.18cmとなり低身長である。
10. 縄文晩期人は縄文人と弥生人との差異を検討するうえで、重要な示唆を与えてくれると考

えられるが、その出土例はきわめて少ないので現状である。

五島列島においては縄文後期人骨と弥生人骨とが出土しているので、地方差を無視して形質の時代差を検討することが可能であるが、今回出土した縄文晩期人の成人骨は男性骨がわずか1体だったので、後期人→晩期人→弥生人という形質変化を詳細に検討することはできなかつた。

しかしこの1例の縄文晩期人の形質は、頭蓋性、四肢骨共にすでに指摘されている縄文人の特徴を良く表わしているといえるが、四肢骨に関して上肢骨は筋付着部が良く発達し頑丈であり、扁平性も強いのに反し、下肢骨ではそのような傾向が弱く、扁平性あるいは柱状形成の像は認め得ないものであった。

(叢書するにあたり、本研究の機会をうえていただいた福江市教育委員会社会教育課、長崎県教育局文化課、ならびにご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。)

参考文献

1. 小山光昭, 1958: 日本人恥骨結合面の年令的変化。東京慈恵医大解剖業績集, 18: 1991-2017.
2. 内藤芳篤、松下孝幸, 1977: 九州における縄文時代人骨の研究。解剖誌, 52: 117。
3. 内藤芳篤, 1971: 西北九州出土の弥生時代人骨。人類誌, 79 (3): 236-248。
4. 鳩原和郎, 1952: 日本人男性恥骨の年令的変化について。人類誌, 62 (5): 245-260。
5. 藤井 明, 1960: 四肢長骨の長さと身長との関係について、順天堂大学体育学部紀要, 3。
6. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie, Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
7. 松下孝幸, 1978: 股骨の人類学的研究 - とくに縄文・弥生時代人股骨について -。人類誌, 86: 143。

表1 脳頭蓋主要計測値 (mm)

| | | |
|------|-------------|-------|
| 1. | 頭 骨 最 大 長 | 179 |
| 8. | 頭 骨 最 大 幅 | 142 |
| 17. | バジオン・ブレグマ高 | 136 |
| 23. | 頭 骨 水 平 周 | 522 |
| 24. | 横 弓 長 | 320 |
| 25. | 正 中 矢 状 弧 長 | 371 |
| 8/1 | 頭 骨 長 幅 示 數 | 79.33 |
| 17/1 | 頭 骨 長 高 示 數 | 75.98 |
| 17/8 | 頭 骨 幅 高 示 數 | 95.77 |

表2 顔面頭蓋主要計測値 (mm) (度)

| | | |
|-------|--------------|----------|
| 46. | 中 顎 幅 | (97) |
| 47. | 顎 高 | 106 |
| 48. | 上 顎 高 | 57 |
| 47/46 | ウイルヒョー氏顯示數 | (109.28) |
| 48/46 | ウイルヒョー氏上顎顯示數 | (60.82) |
| 51. | 眼 窩 幅 | 46(右) |
| 52. | 眼 窩 高 | 30(右) |
| 52/51 | 眼 窩 示 數 | 63.22(右) |
| 54. | 鼻 幅 | 26 |
| 55. | 鼻 高 | 45 |
| 54/55 | 鼻 示 數 | 57.78 |
| 55(1) | 梨 状 口 高 | 29 |
| 56. | 鼻 骨 長 | 18 |
| 57. | 鼻 骨 最 小 幅 | 9 |
| 57(1) | 鼻 骨 最 大 幅 | 11 |
| 72. | 全 側 面 角 | 75° |
| 73. | 鼻 側 面 角 | 76° |
| 74. | 齒槽側面角 | 72° |

表3 鎖骨主要計測値 (mm)

| | 右 | 左 |
|---------|-------------|----------------|
| 1. | 鎖 骨 最 大 長 | 148 |
| 2 a. | 骨 体 曲 突 | 30 |
| 2(1) | 肩 峰 端 曲 突 | 31 |
| 4. | 中 央 垂 直 徑 | 13 (13) |
| 5. | 中 央 欠 状 徑 | 12 (11) |
| 6. | 中 央 屬 | 41 (38) |
| 6 / 1 | 長 厚 示 數 | 27.70 |
| 2 a / 1 | 彎 曲 示 數 | 20.27 |
| 4 / 5 | 鎖 骨 断 面 示 數 | 108.33 (18.18) |

表4 上腕骨主要計測値 (mm)

| | 右 | 左 |
|-------|-------------|-------------|
| 1. | 上 腕 骨 最 大 長 | 281 282 |
| 2. | 上 腕 骨 全 長 | 278 279 |
| 5. | 中 央 最 大 徑 | 27 23 |
| 6. | 中 央 最 小 徑 | 17 17 |
| 7. | 骨 体 最 小 周 | 63 62 |
| 7 (a) | 中 央 周 | 73 67 |
| 6 / 5 | 骨 体 斜 面 示 數 | 62.96 73.91 |
| 7 / 1 | 長 厚 示 數 | 22.42 21.99 |

表5 楊骨主要計測値 (mm)

| | 右 | 左 |
|--------------|-------|-------|
| 1. 最大長 | 228 | 223 |
| 2. 機能長 | 214 | 209 |
| 3. 最小周 | 42 | 42 |
| 4. 骨体横径 | 16 | 16 |
| 4a. 骨体中央横径 | 16 | 16 |
| 5. 骨体矢状径 | 11 | 11 |
| 5a. 骨体中央矢状径 | 11 | 11 |
| 5(5) 骨体中央周 | 42 | 43 |
| 3/2 長厚示数 | 19.63 | 20.10 |
| 5/4 骨体断面示数 | 68.75 | 68.75 |
| 5a/4a 中央断面示数 | 68.75 | 68.75 |

表6 尺骨主要計測値 (mm)

| | 右 | 左 |
|--------------|--------|--------|
| 1. 最大長 | 243 | 237 |
| 2. 機能長 | 216 | 210 |
| 3. 最小周 | 35 | 36 |
| 11. 尺骨矢状径 | 15 | 15 |
| 12. 尺骨横径 | 15 | 15 |
| 中央最小径 | 12 | 11 |
| 中央最大径 | 16 | 17 |
| 3/2 長厚示数 | 16.20 | 17.14 |
| 11/12 骨体断面示数 | 100.00 | 100.00 |
| 中央断面示数 | 75.00 | 64.71 |

表7 大腿骨主要計測値 (mm)

| | 右 | 左 |
|--------------|--------|--------|
| 1. 最大長 | 406 | 407 |
| 2. 自然位長 | 404 | 405 |
| 6. 骨体中央矢状径 | 26 | 26 |
| 7. 骨体中央横径 | 24 | 24 |
| 8. 骨体中央周 | 80 | 81 |
| 9. 骨体上横径 | 29 | 28 |
| 10. 骨体上矢状径 | 22 | 22 |
| 8/2 長厚示数 | 19.80 | 20.00 |
| 6/7 骨体中央断面示数 | 108.33 | 108.33 |
| 10/9 上骨体断面示数 | 75.86 | 78.57 |

表9 腓骨主要計測値 (mm)

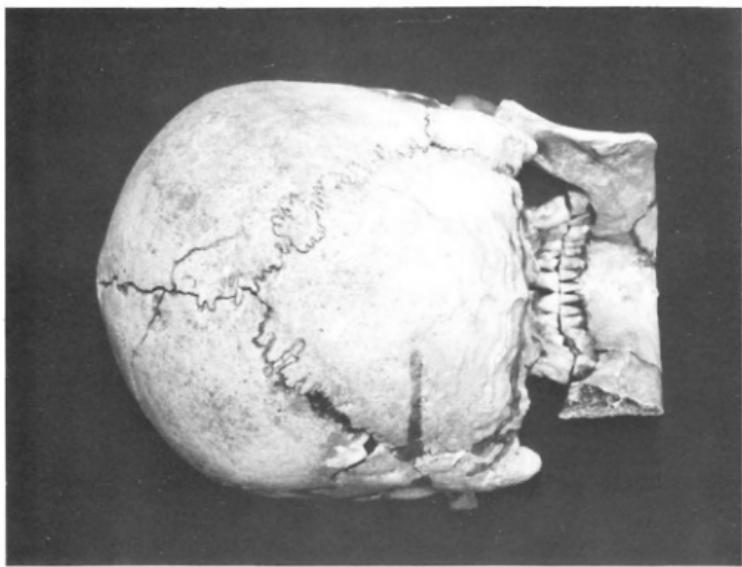
| | 右 | 左 |
|--------------------|-------|------|
| 1. 最大長 | 317 | |
| 2. 中央最大径 (13) | 12 | |
| 3. 中央最小径 (11) | 10 | |
| 4. 中央周 (41) | 38 | |
| 4a. 最小周 | 33 | 30 |
| 3/2 中央断面示数 (84.62) | 83.33 | |
| 4a/1 長厚示数 | | 9.46 |

表8 股骨主要計測値 (mm)

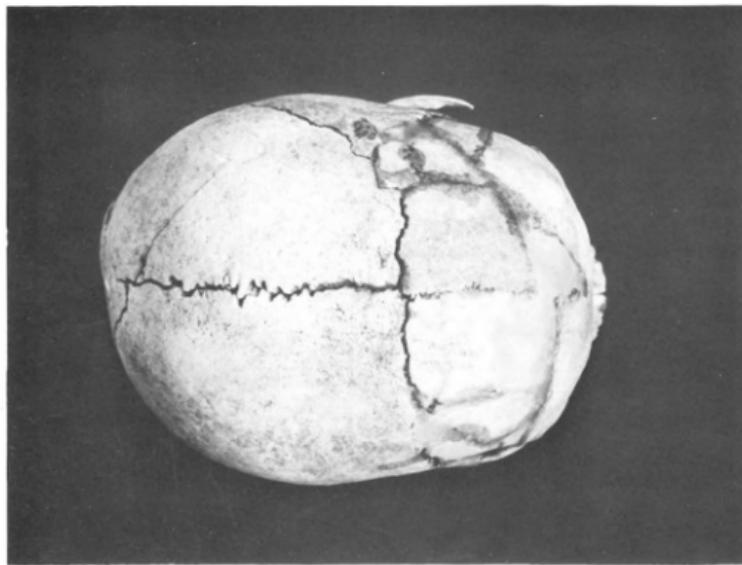
| | 右 | 左 |
|----------------|-------|-------|
| 1. 股骨全長 | 321 | 320 |
| 1a. 股骨最大長 | 331 | 330 |
| 8. 中央最大徑 | 28 | 27 |
| 8a. 采糞孔位最大徑 | 31 | 30 |
| 9. 中央橫徑 | 20 | 20 |
| 9a. 采糞孔位橫徑 | 21 | 22 |
| 10. 骨体周 | 75 | 73 |
| 10a. 采糞孔位周 | 82 | 82 |
| 10b. 最小周 | 69 | 68 |
| 9/8 中央断面示数 | 71.43 | 74.07 |
| 9a/8a 采糞孔位断面示数 | 67.74 | 73.33 |
| 10b/1 長厚示数 | 21.50 | 21.25 |

表10 膝蓋骨計測値 (mm)

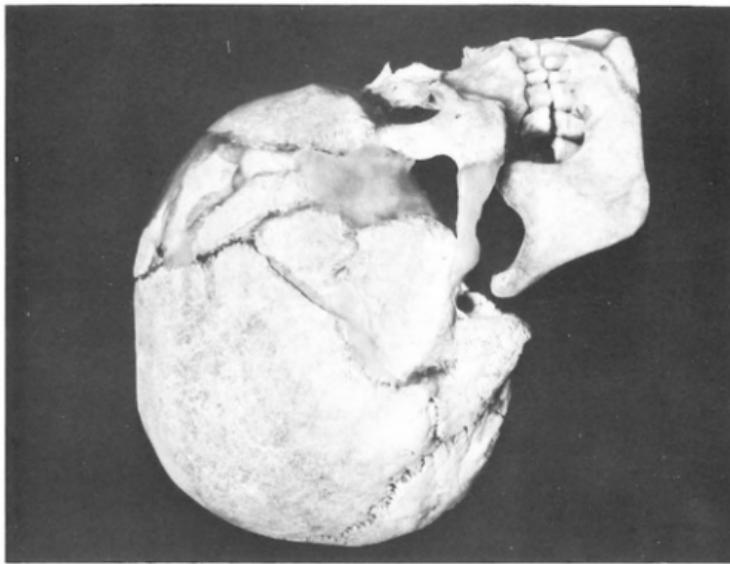
| | 右 | 左 |
|-------------|-------|-------|
| 1. 最大高 | 42 | 42 |
| 2. 最大輻 | 46 | 46 |
| 3. 最大厚 | 20 | 20 |
| 4. 開節面高 | 33 | 32 |
| 5. 内切面輻 | 20 | 22 |
| 6. 外切面輻 | 29 | 27 |
| 1/2 膝蓋骨高幅示数 | 91.30 | 91.30 |



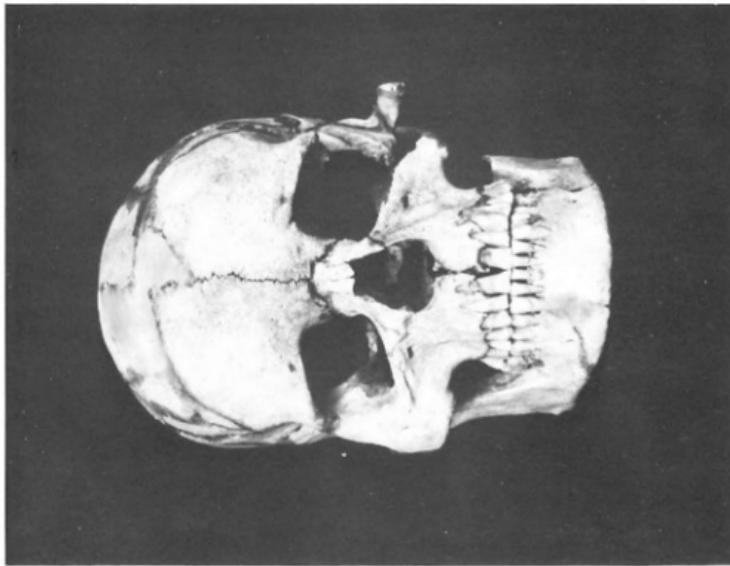
1号人骨（壮年男性）頭蓋後面觀



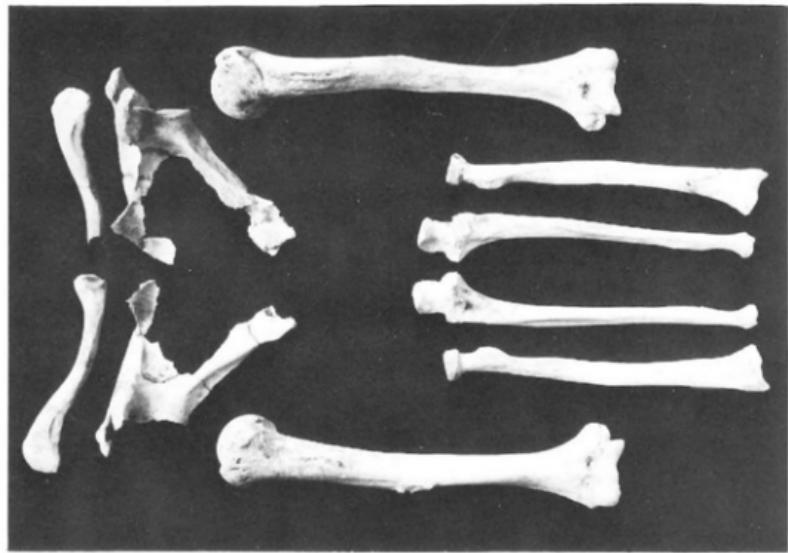
1号人骨（壮年男性）頭蓋上面觀
(右)



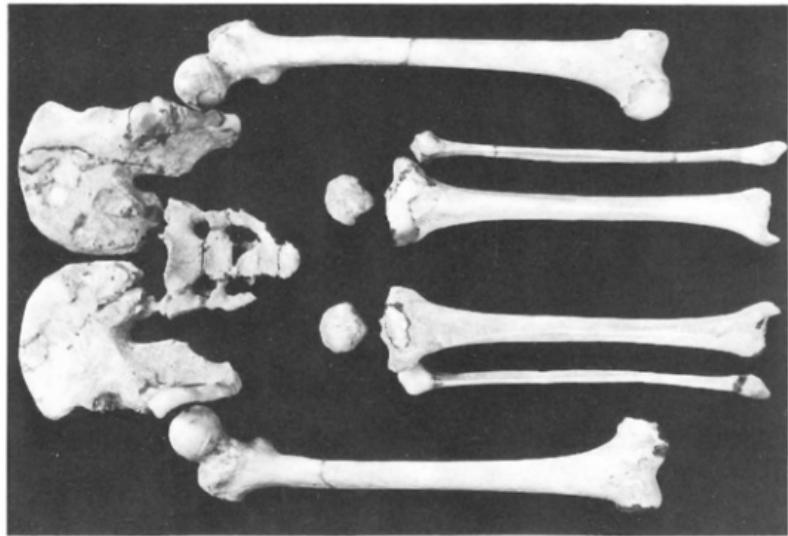
1号人骨 (壮年男性) 颅盖侧面觀



1号人骨 (壮年男性) 颅蓋正面觀



1号人骨 (壮年男性) 上肢骨



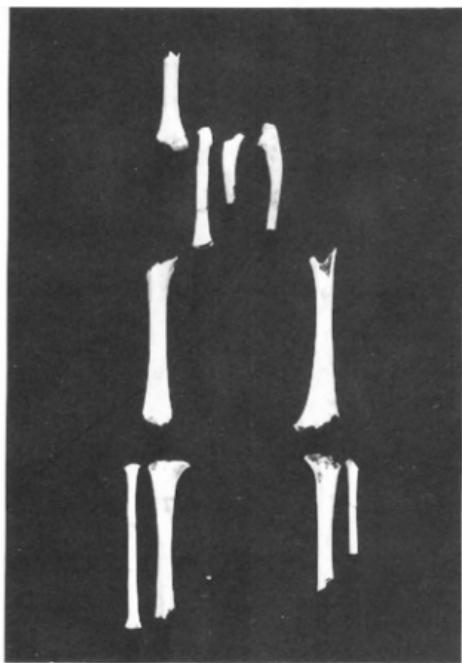
1号人骨 (壮年男性) 下肢骨



2号人骨（幼兒）頭蓋上面觀



2号人骨（幼兒）頭蓋後面觀

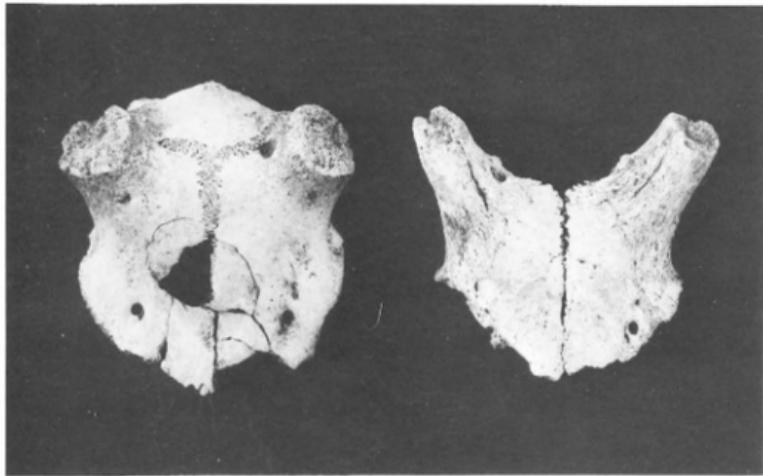


2号人骨（幼兒）四肢骨



鹿骨出土状況

鹿頭蓋骨 (1 / 2)



貝塚出土の鹿骨



(1 / 2)



貝塚出土の鹿角 (1 / 3)

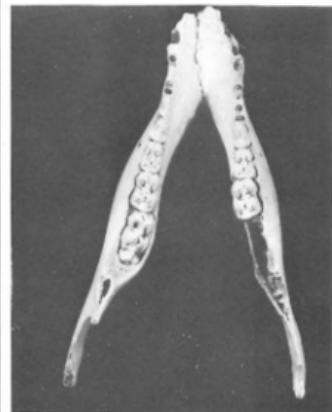


猪下顎骨出土状況

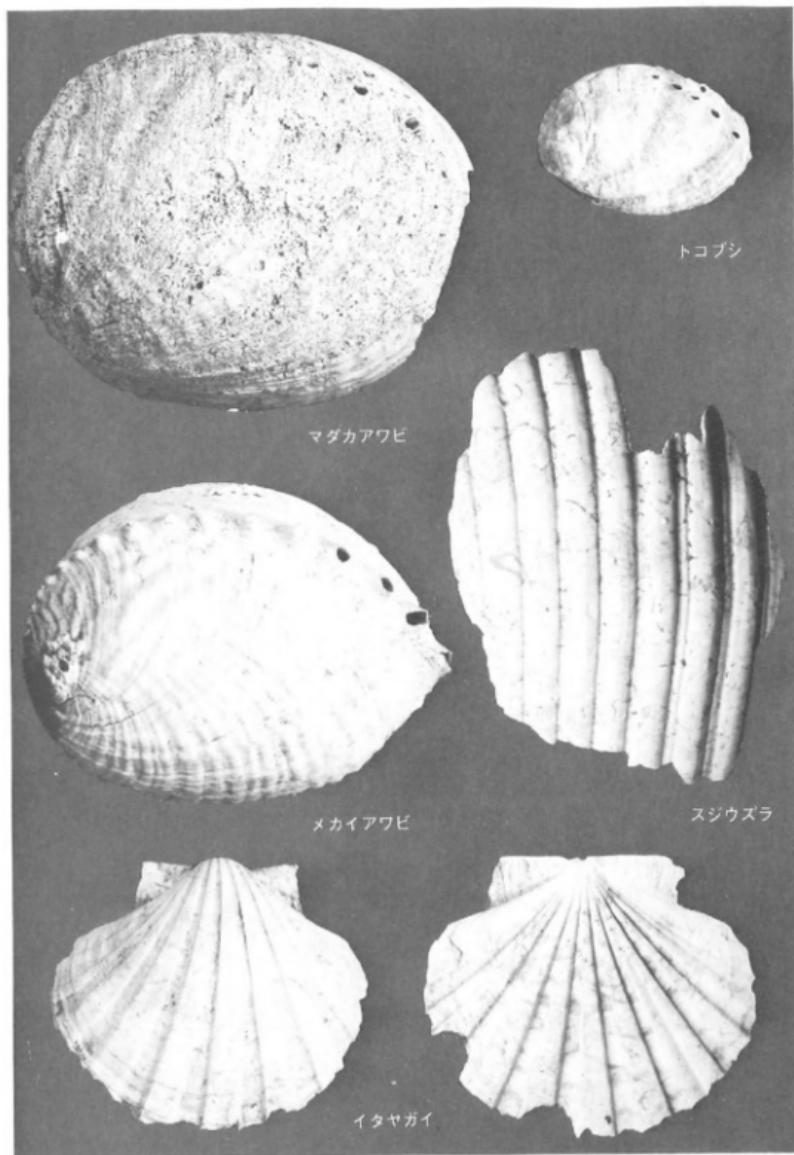


猪肢骨に残された傷痕 (1 / 1)

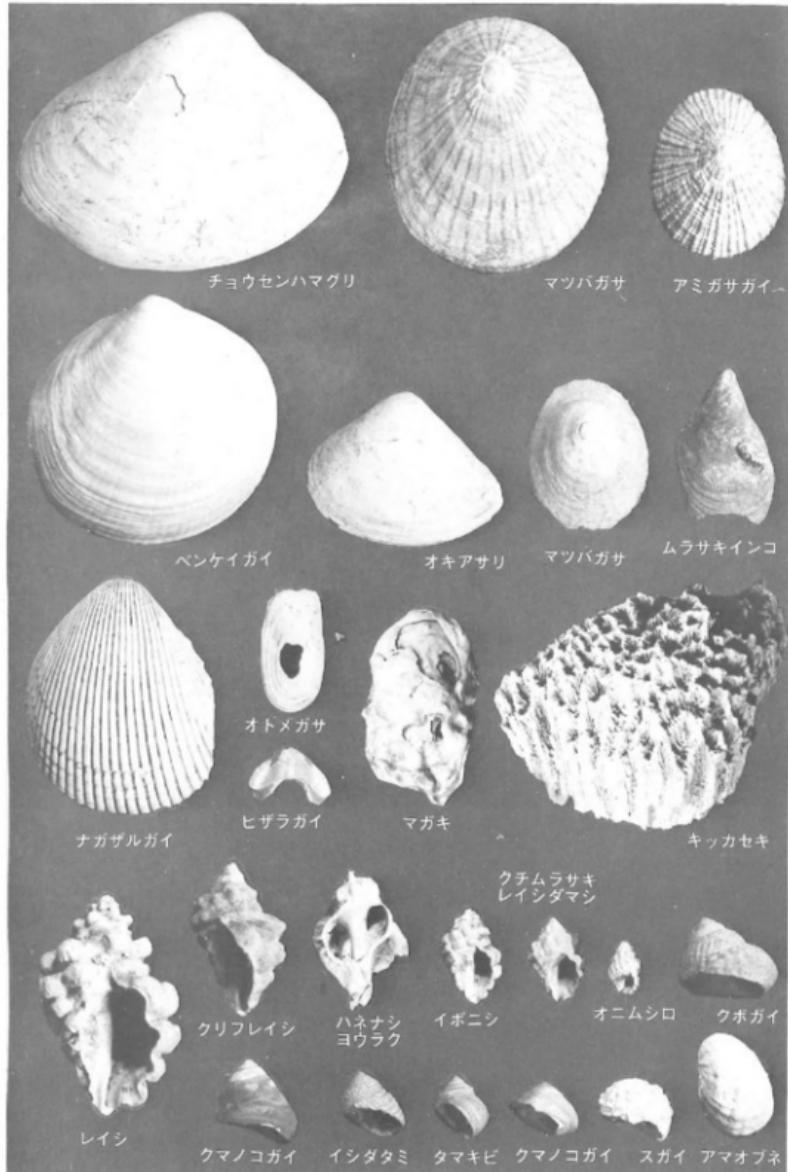
(1 / 2)



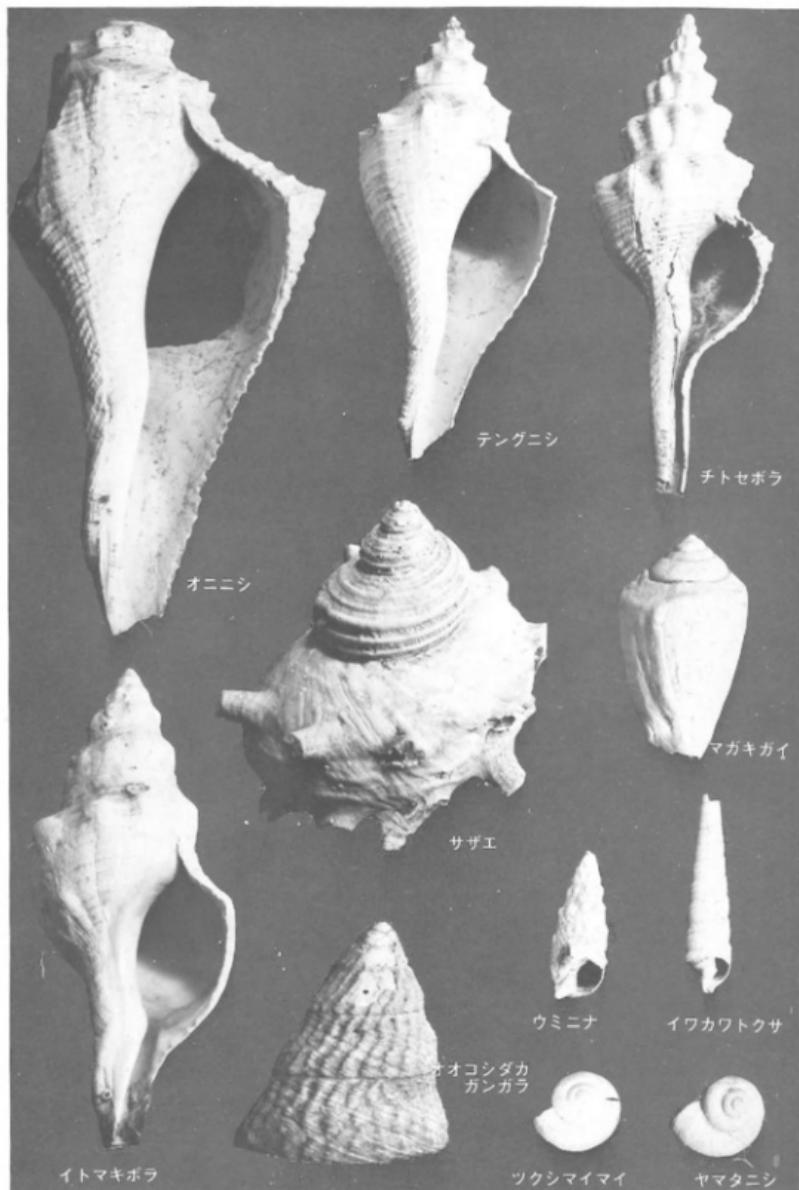
貝塚出土の猪骨



貝塚出土の貝類 (1 / 2)



貝塚出土の貝類 (1 / 2)



貝塚出土の貝類 (1 / 2)



遺 灵 祭



説 明 会
地元崎山中学校
生徒の見学



自然遺物のフル
イによる検出

あとがき

白浜貝塚の調査は前半において予想を上回る規模であることが認識され、後半の調査は炎天下の蒸し風呂のような中で実施されたが、当初予定地内は完掘することが出来た。

出土した遺物も膨大な量にのぼり、整理の方法も複雑を極め、ナンバーリングなど初期の整理が一段落したのは2月に入ってからであった。その間、報告書をどういった形にするか検討したが、結局物理的な問題や種々の事情により、図録の体裁をとらざるを得なかった。出土遺物については出来るだけ集録するよう努めたが、意にそわなかった点もある。また自然遺物、とりわけ歯骨、魚骨については全く手つかずの状態であり、同定については今後専門の研究者の方に協力をお願いしたいと考えている。

白浜貝塚が、西海の地に位置しながらも、内容的には、今回の調査が幾多の重要な問題を提起してくれたと認識している。いずれ詳細な考察に基いた報告を行い、調査関係者としての責務を果したいと考えている。

最後に調査から報告書刊行に至るまで、終始、調査を推進された福江市教育委員会の方々や、暑い中積極的に調査に協力していただいた地元崎山町の方々、それに直接、間接の御支援をいただいた沢山の方々に心からの感謝の意を表します。(安楽)



調査に参加した人たち

福江市文化財調査報告書 第2集

白浜貝塚

昭和55年3月31日

発行所 福江市教育委員会
福江市福江町478

印刷所 日本紙工印刷
長崎市興善町2-6